

ネギさんの妹、ハーレムを作る

あなルン

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

※完結しました（2018／10／20）

ネギの双子の妹、アナ。皆には秘密だが、彼女にはおちんちんが生えていた。これは2―Aの生徒と所構わずエッチする物語。

目次

プロローグ	1
カミングアウト	4
レイプ	9
魔法バレ	16
3大巨乳	20
フリーダムセックス	28
スプラッシュ	36
このかの膣内（なか）あつたかうい	42
のどかの個人レッスン	47
エヴァ一族、搾り尽くす	53
夜、このかと明日菜とエッチ	59
パールパールパール	64
雪広あやかさん、アナを振り回す	70
かえで姉、しゅごい	76
そうだ、真名で抜こう	81
実家に行くまで月詠と車エッチ	87
巫女さん、絶頂↓気絶ループに陥る	91
刹那さん、四つん這いで女の喜びを知る	96
詠春さん、手でしてもらったあげく、ぶっかける	101
刹那、このかと一緒に野外エッチしちゃう	105
アナ、武闘派3人娘に昇天させられる	108
エヴァさん、独占欲を持たれて中出しを許しちゃう	113
アキラさん、アナを優しく寝かしつける	121
朝倉さん、お風呂でぬぷぬぷされる	124

千草さん、バッグでいたしちやう	131
のどあす、おちんちんを膾に入れる	134
しずな先生と夜の授業	138
さよ ミルクタンクになる	142
ハルナ、抱かれる	145
アキラさん、口奉仕に目覚め始める	148
スライム娘 半オナホ状態	151
水牢からの帰還、からの乱交	155
結末 超鈴音	158

プロローグ

ぴちやぴちや、ちゅぷ、ちゅるっ……。

「あつ、アーニヤ、それ、ダメっ」

「ここはそうは言つてないみたいだけど？ あむ、れろれろ、ちゅぱ」

女子トイレで、2人の少女が個室で淫行に耽っていた。

片方は赤いツインテールの髪が印象的な少女、アーニヤ。

もう1人は英雄の忘れ形見の片割れアナ・スプリングフィールド。

アーニヤは男性顔負けのアナのペニスから顔を上げた。

「ぷは……お汁出てきた。もう出そう？」

「あつあつあつ」

手で竿を優しくしごきながら甘い声で囁いてくる。

「出る！ 出ちやうよアーニヤ！」

「はむ」

「ああつ」

アーニヤが亀頭を咥え、舐め回した。

ほどなくして、びゅるっ、と透明な液体が飛び出す。

「ああー、あ、あつ」

ぴゅ、ぴゅつと何度も液体が吹き上がる。

アーニヤはこくこくと喉を鳴らしながらアナのソレを飲み干して

いく。

「……ふう。いっぱい出したわね。スッキリした？」

「うん……いつもありがとう、アーニヤ」

「いいわよ。魔力過剰症なんだからしょうがないわ」

魔力過剰症。

父親ナギをも凌ぐ膨大な魔力は幼い体には毒だった。

魔法薬と儀式魔法を駆使した大手術により、アナはクリトリスをペ

ニスに変化させ、定期的に擬似的な射精をすることで体内の魔力を吐

き出し、魔力を一定以下に維持することで健康を保っていた。

問題は相手に魔力を譲渡する必要があり、1人では射精しても魔力を放出することができないことだ。

「はあ、ネギがしてくれればアーニヤに迷惑かけなくて済むのに」
双子の兄、ネギ。

自分と同じ赤毛の男の子で、生意気だが顔はそこそこ可愛い。

「ネカネさんに止められてるんだっけ？」

「うん。お姉ちゃんで我慢しなさいって言われた」

「きつとネギに取られたくないのねー」

「どういうこと？」

「アナって、舐めてあげてる時すごく可愛いんだもん」

アーニヤはアナのペニスに顔を埋め、再び舐め始めた。

竿には小さく幼い手を添えて、優しく包み込む。

「れろれるろ……ちゅぱ……ちゅぱつ。はい、綺麗になったわ。そろそ

ろ次の授業が始まっちゃうから、続きは放課後ね」

「う、うん」

2人の関係は魔法学校を卒業するまで続いた。

アナ達の年頃の魔法使いは学校を卒業すると、社会に出て修行をするため散り散りになってしまうのだ。

行き先はそれぞれの卒業証書に書かれている。

アーニヤはロンドンで占い師。

アナとネギは日本の麻帆良学園で教師をする、というものだった。

離れ離れになることが確定し、アーニヤは不機嫌そうにネギを睨む。

「バカネギ。ちゃんとアナの面倒見るのよ。あ、手は出しちゃだめよ！」

「わ、わかったよ。でも、手を出すって何？」

「な、なんでもないわよ！　ネギのくせに生意気！」

「ひどい!?!」

理不尽に怒られて涙を浮かべるネギ。

ネカネは心配そうにアナの手を握ってくる。

「いい、アナ。どろろしても我慢できなくなったら、これをネギに使いなさい」

握った手を開くと、薬の入った小瓶があった。

「ネカネお姉ちゃん。これは？」

「睡眠薬よ。1粒で何をやっても1時間は起きなくなるわ」

それはもう麻酔薬か何かじゃ……あと弟が犯されるのは良いのか。色々なことが頭を駆けめぐるが、自分の体のことを考えると仕方がない処置だし、手段はアレだが姉の想いが嬉しかった。

「ありがとう、お姉ちゃん」

「どういたしまして。向こうは慣れないことばかりで大変だと思うけど、アナならきつと上手にできるようになるわ」

アナとネカネは抱きしめ合う。

「……それじゃ、イッてくるね！」

アナはネギが待つバスへ駆け出した。

これは、1人の少女が様々な女性といたす物語である。

カミングアウト

「えー！… こんなガキと一緒に住まないといけなんでしょうか?!」

神楽坂明日菜の絶叫が学園長室に木霊した。

「いや、一緒に住むのはアナ君の方だよ。さすがに女子寮に10歳とはいえ男の子を住まわせるわけにはいかないからね」

「そ、そうでしたか。すみません。私早とちりしちゃって」

「いいさ。紛らわしい言い方をした学園長が悪いんだからね」

高畑はニコリと学園長に微笑む。

顔は笑っているが、言い知れない威圧を放っていた。

ネギが不安そうに高畑の裾を引っ張る。

「タカミチ、それじゃあ僕はどこに住めばいいの?」

「もちろん僕の部屋さ……いいですよ、学園長?」

「ほ? う、うむ。まあ、高畑君が良いならいいんじゃないが」

「やった。よろしくね、タカミチ!」

「ああ。同じ部屋で暮らす者同士、仲良くヤツていいこう」

「……?」

アナには何故か高畑の言葉が別の、セックスして絶頂しようぜ的な意味に聞こえた。

(あ、溜まってきたのかな。そろそろ抜かないとまずいかも……)

魔力が溜まるとアナの思考はシモネタに行きがちになってしまう。

普段はそんなことはないので、射精しないといけない時期を報せる警報の代わりにしている。

さっそくネギとアナはそれぞれの部屋に荷物を置きに行くことになり、学園長室を退出する。

子供は嫌いだ、と言っていた割にはネギを小突いてわーわー騒いでいる明日菜を見ていると、照れ隠しかたとアナは思った。

「あっ」

何もなくて転びかけた。

高畑が咄嗟に支えてくれる。

「君の体質については聞いているよ。そろそろなのかい?」

「え……はい……」

アナは恥ずかしさで俯いてしまう。

ペニスがある女の子。

幼馴染のアーニャや姉ならばともかく、あまり親しくない男性に知られて嬉しいことはない。

「悪いが僕はガチホモでね。君を助けてあげることとはできない」

「は？」

「ネギ君だったら喜んでこの身を差し出したのに……神は死んだ！」

勝手に殺すなよとアナは思った。

「おっと、これは秘密だよ。君もバラされたくないだろう？」

「それは……兄さんがあなたに掘られるのを黙って見てろと？」

「さすが、話が早いね。お互い難儀な身だが、頑張ろう」

高畑はスタスタとネギの横へ歩いていく。

その瞳がネギの尻をロックオンしていたのは言うまでもない。

（兄さん、逃げてー！）

そう叫ぶことができればどれだけ楽か。

何も知らないネギは高畑に子犬のように笑いかけている。

（ごめん兄さん。私は無力だ）

今高畑の魔の手からなんとかしても、アナは遅かれ早かれ、どうにもできなくなったらネギで処理しようと思っている。

ネギは妹に犯されるか、高畑に犯されるか、とにかく犯される運命にあるようだ。

（犯される星の下に生まれちゃったんだね、兄さん……って、まずいよ！ かなりエッチなことしか考えられなくなってる?!）

魔力の溜まり方が普段よりも早いのもかもしれない。

早く相手を見つけないと、危険な状態になりそうだ。

アナは焦る。

見知らぬ土地で知り合いすらいない状況で、射精させてくれる相手を見つけないではならない。

（うう、このかならず頼めばしてくれるかなあ）

ほんわかした雰囲気の優しそうな少女。

(スカートから伸びた足は細いけど健康的で……あの細い指で握られたらどんなに気持ちいいだろう……あー、もうだめだ。このかにしてもらおう!)

アナはこのかに走りより、手を掴んだ。

「このか! トイレ行こう、トイレ!」

「あやや。我慢してたんかえ? 場所はな〜」

「迷っちゃう! 連れてって!」

「了解や。アスナ、悪いけど先に行っててくれへん?」

「は〜い」

「……ネギ君もトイレ行くかい?」

「ううん。僕は大丈夫だよ」

「そうかい? 我慢しなくてもいいんだよ?」

「た、高畑先生! きよ、今日はいいい天気ですね!」

「ん? ああ、うん。そうだね」

明日菜が気を引こうと話しかけるが、高畑はそっけなく返す。

(はあ、なんで明日菜君は男の子じゃないんだろう)

高畑はそつとため息をついた。

く 女子トイレ く

くちゆくちゆくちゆ……。

「あつ、あつ」

「これでええ? 痛かったら教えてや」

「うんつ、すごく気持ちいいつ」

「なんか手のかかる妹ができたみたいで、ちよつと嬉しいなあ〜」

現在、下半身裸になったアナはこのかに後ろから抱きしめられ、ペニスを上下にしごかれていた。

「うちの手、気持ちええ?」

「うんつ、ひんやりしてて、すごく気持ちいいつ……あつ、出るっ」

このかに握られたペニスが上下に跳ね、その度にびゅ、びゅ、と透明な液体が大量に放出される。

「す、すごいなあ。これが魔力なん?」

「このかは手についたドロドロの液体をしげしげと見つめる。

「うん。私は魔法使いの中でもかなり魔力が多くって、定期的にこうやって出さないといけない病気なの」

「そうなんか。安心しいや。うち誰にも言わへんから」

「ありがとう……あ、あの、それでね?」

「アナちゃん、これって舐めても平気なん?」

「え? う、うん。大丈夫だよ。魔力はエネルギーの塊だから、栄養ドリンクみたいなもんだし」

だから手についても問題ない、と続けようとしたところで、このかはペろりとアナが出した魔力を舐めた。

舌の上でアナの液を転がして味見し、こくんと音を立てて飲んでしまふ。

気に入ったのか、ぴちやぴちやと音を立てて残りの液体を舐め始める。

その様子がとてもいやらしくて、アナのペニスはむくむくと鎌首を持ち上げた。

「……」

アナはぽーっと手を見つめているこのかの頭を両側から押さえ、自分の股間へと導いた。

「……あつ」

亀頭の先が暖かいものに包まれた。

裏スジを熱く濡れた舌がぎこちなく這う。

アナは恐る恐る下を見る。

顔を赤くしながらも、にっこりと微笑んだこのかの笑顔がそこにあった。

アナの目からポロポロと涙が出てくる。

「ぶは。ごめんな、痛かったかえ? うち、初めてでどうしたらいいかわからんくて」

「ううん。私こそごめんね。初めて会ったばかりなのにこんなことして……!」

このかはアナをそっと抱きしめた。

子供をあやすようによしよしと頭を撫でる。

「ええんよ。初めはびつくりしたけど、アナちゃんの辛そうな顔見てたらウチ、放っておけんくなってもうた。今も辛いんやろ？ ウチでいっぱい魔力出そ。な？」

「ひっく、ひっく、ありがとう、このかつ」

するするとこのかの体下がっていく。

このかはお腹につくほど反り上がったペニスを持ち、自分の口へ向ける。

「あー……む」

「あっ」

「れろれろ……アナひゃん、ひもひええ？　ちゅ、ちゅ」

「うんっ、うんっ」

しばらくの間、女子トイレにはぴちやぴちやという水音と少女の喘ぎ声が響くのだった。

レイプ

「あんた達、随分仲良くなったわねえ」

トイレから帰ってきてから、このかはアナにべったりになっていた。

夜になり、布団を借りてこようかという話になると、このかが一緒に寝れば良いと提案した。

アナは10歳にしては小柄な方なのでベッドで2人で寝ることは充分可能だった。

「アナちゃん、ウチとねよな、な」

「えへへ。お言葉に甘えさせてもらいます」

いそいそと端に寄ってアナの分のスペースを作るこのか。

明日菜は2段ベッドの上の方に登ると電気を消した。

「おやすみ〜」

「おやすみ〜。あ、アスナ、明日はバイトなん？」

「あ、うん。悪いけど起こしてもらっていい？」

「了解や〜」

「おやすみなさい」

このかの温もりを感じながらアナは目を閉じた。

(はあ、1日目でいきなりエッチしてくれる人が見つかって良かった。普通こんな簡単に見つからないよね)

睡眠薬でネギを眠らせて犯すという最終手段を高畑に封じられた今、このかが協力してくれるのはかなりの幸運だった。

(兄さんはまだ処女かなあ……まだ1日目だし、さすがに大丈夫だよね)

自分のことは棚に上げるアナ。

アツ〜という悲鳴が聞こえないうちに眠ろうとネギのことを頭から振り払う。

……さすさす。

(っ！こ、このか?)

(しー、アスナに気づかれるえ)

パジャマの上からペニスを撫でられる。

(アナちゃんが眠るまで、よしよしするんや〜)
なんで?)

そんな疑問も股間に送られる快樂の前にはどうでもよくなってしまふ。

(このかあ)

アナはこのかの胸に頭を擦りつけた。

このかの優しい愛撫は、このかが眠りにつくまで続けられた。

(まあ、あんなことされて眠れるわけないよね)

真夜中、アナは目がギンギンに冴えていた。

もちろんあつちもギンギンだ。

布団を捲り、パジャマ姿のこのかを見えるようにする。

すうすうと可愛らしい寝息を立てるこのか。

小さくて瑞々しい唇。

細い首筋。

意外と大きな胸が呼吸に合わせて上下する。

ボタンを外すしていくと、胸がはだけて白い肌が露わになる。

(ああー、何やってるの私?!)

アナは慌てて布団を元に戻した。

2人を起こさないように気をつけながら外に出る。

「はあ、これじゃアーニヤを犯した時と同じになっちゃうよ」

熟睡しているのをいいことに、さんざん秘部を弄り倒し、何度も絶頂させた。

途中でアーニヤは起きたが、気絶した後には我慢できなくなって挿入してしまっただ。

後で土下座して謝ってなんとか許してもらったが、お仕置きとして魔力が空になるまで搾られてしまった。

「頭冷やそう。今夜は満月か……散歩する分には丁度いいかな」

アナはよろよろと歩き始める。

その瞳はぼんやりと緑色に光っているのだが、気づくことはなかった。

た。

「くっくっく」

同じ時、エヴァは久しぶりの空中散歩を楽しんでいた。

普段は魔力を封印されている彼女だが、満月の日は魔力が多少回復し、飛ぶこともできるようになるのだ。

「へくちっ……ううむ。さすがにこの格好は不味かったか」

この格好。

エヴァは今、黒いマントとパンツ1枚という姿で空を飛んでいる。

「ここからは歩くか」

風邪を引いて学園長に馬鹿にされてはたまらない。

エヴァは高度を下げて地面に降りた。

ザザザッ。

「ん？ なっ」

緑に光るまん丸の目、口は三日月。

そんな作り物のような顔の子供が猛スピードでエヴァに近づいてくる。

エヴァは即座に魔法の矢を放った。

矢はまっすぐに子供……アナの額に命中する。

アナは衝撃で後ろにひっくり返るが、跳ね起きて何もなかったかのように走りよってくる。

「ええい気色悪いわー」

2 射目を放つ。

またひっくり返るアナ。

だがまたすぐに起き上がってエヴァ目がけて走ってくる。

そんなことを10回繰り返す。

(くそっ、このままでは魔力がもたん！)

空を飛んで逃げればいいが、それは誇りが許さない。

詠唱呪文は距離が近すぎて間に合わない。

手をわきわきさせ、ペニスをフル勃起させている奴と接近戦はしたくなかったが、他に手もないのでさっさと片付けることにする。

どびゆ、べちや。

「……」

びゆ、びゆつ。べちや、べちや。

「うがー！」

精液まみれにされた怒りがエヴァに問答無用で呪文を唱えさせた。

「来たれ氷精 闇の精 闇を従え吹雪け 常夜の氷雪 『闇の吹雪』」

氷の嵐が吹き荒れる。

森は一瞬で凍りつき、冬の様相へと変化した。

「なんだと？」

自分でやっておいて首をかしげるエヴァ。

（おかしい。今の私に触媒もなしにこの魔法は使えないはず……）

精液まみれになりながら、エヴァは冷静に思考する。

そしてすぐに自分が浴びた物が精液ではなく強力な魔力を帯びた物であることに気づく。

「この魔力は……」

「……あれ？」

気がつくと知らない場所だった。

木の壁に、洋風の内装。

そして、朝フェラされてる時のような感触。

「じゅぼじゅぼ……ふは。やっと気づいたか」

「え？」

自分と同じくらいの年の金髪美少女にフェラされていた。

その事実をアナの頭は受け止め切れない。

「ふん、覚えていないか。まあ、正気を失っていたようだから仕方あるまい」

少女はぐいと口を腕で拭うと立ち上がった。

どうもアナ達はベッドの上らしい。

少女もアナも裸だった。

少女……エヴァのつるつるの割れ目が目の前にある。

アナはほぼ条件反射で割れ目に舌を這わせた。

「きゃんっ……っつて、貴様！ あんっ、や、やめ」

ぺちやぺちやぺちや、くちゆくちゆくちゆ！

凄まじい快感がエヴァを襲った。

立っていられなくなり、腰を落とす。

仰向けに倒れたエヴァの足を持ち上げ、アナは一心不乱に舐め、膣をかき混ぜて愛撫をする。

エヴァはシーツを掴んで首を振って喘ぎ声を出さないように我慢するが、その仕草が一層アナを興奮させ、愛撫に力を入れさせる。

「~~~~~！」

ビクビクと痙攣するエヴァ。

「はあっ、はあっ……」

アナはペニスを膣口にあてがいがい、エヴァに「いい？」と目で訴える。

「はあ、はあ、ダメに、決まってる、だろうが」

「えー」

ペニスの先でクリトリスをぐちゆぐちゆと擦って抗議する。

エヴァはそんなに甘くなく、殴られて拒絶されてしまう。

「そんな顔をするな。口でしてやる」

「わーい」

アナもエヴァのを舐めようとするが、ころんと転がされてベッドに縛り付けられた。

「お前は動かんていい……あむ、ちゅぽ、ちゅぽ、じゅるるっ」

どびゅー！

「むぐ、ごく、ごく、ごく、ごく、ごく……ぶはっ。貴様どんだけ出すんだ!？」

びゅぶ、べちや。

射精の途中で口を離れたエヴァの顔に、べつとりとアナの体液がぶっかかる。

エヴァは無言でそれを指ですくい、丹念に舐め取った。

「あの一。ここまでやっておいてなんだけど、あなたは誰？ 私はア

ナ・スプリングフィールド」

「ふん、やはりナギの娘か」

「父さんを知ってるの?」

「当然だ。私は奴の呪いで延々と中学生をさせられているんだからな」

「え……やだ、父さんてロリコンだったの? ん? ということは、あなたが私のお母さん?!」

「違うわ! この世界に娘のモノをしゃぶる母親がいるか! 指を指すな!」

母親説は真つ向から否定されてしまった。

ちよつとへこむが、延々と中学生を、の件で目の前の少女が何者かアナは見当がついた。

「もしかして闇の福音、エヴァンジェリンさん?」

「ふつ、ようやく気づいたか。つて、なんで元気になってるんだ!」

ペシ、と復活したペニスをはたかれる。

「ごめんなさい。エヴァさんのおまんこ見てたらつい」

「私を前にしてよくそんな余裕があるな。どういう神経をしているんだ。まあいい。貴様のおかげで封印を解く方法も見つかった。奴の代わりに協力してもらおうぞ?」

「協力と言われても、私そんな難しいことできませんよ。教師の修行もありますし」

「なに、封印の解除に必要なのは貴様の魔力だ。貴様は今のよう私に魔力を寄越せばいい」

「それじゃあ、さっそくもう1発……」

「今日はもういいわ! お前の魔力で腹がたぶたぶだ! だから、なんで元気になるんだ!」

「エヴァさんがエッチなこと言うから……」

ビク、ビク、と脈動するペニス。

「やつぱりおかしいなー。日本、というか麻帆良学園に来てから魔力が溜まりやすすぎるような気が……」

「それは恐らく世界樹のせいだろう」

エヴァによると麻帆良は靈的にも魔力的にも恵まれた土地らしい。

魔力の回復力も相性が良ければ故郷より数段上がるそうだ。

「それ困るんですけど」

故郷にいた時ですら体調が良いと半日に1回は射精する必要があった。

この調子だと休み時間の度にこのかやエヴァを女子トイレに連れ込んで犯さないとイケなくなる。

アナは少し想像してみた。

トイレの蓋に手をつけてお尻を突き出したエヴァと、それを後ろから挿入し、腰を振るアナ。

「ん、ん、アナ、早く中に出せ。休み時間がなくなるぞ」

「エヴァちゃんのは浅いからなあ、ウチも手伝うな」

余った竿をこのかの手が包み込む。

しなやかな指による愛撫が始まる。

このかが耳元に囁いてくる。

「アナちゃん気持ちええ？ もっと強くしこしこして欲しい？」

どびゅ、びゅるるっ。

射精とともに、エヴァの中がきゅーつと締まる。

同時にイッたようだ。

腰を引くとちゅぽん、という音がして、無毛の秘所からとろりとアナの出した体液があふれ出る。

「いっぱい出したなく。スツキリしたかえ？」

「このか、残りを絞れ。掃除は私がする」

「あん。エヴァちゃんばっかりずるいわ。ウチもなめなめする」

2人の美少女が自分のペニスに顔を寄せる。

「……やっぱ最高かも」

ビクン、ビクン。

麻帆良に来て良かった。

アナは心からそう思うのだった。

魔法バレ

「ただいま〜」

「おかえり〜」

明日菜が新聞配達のバイトから帰ると、このかがキッチンで朝食を作っていた。

「あ、アスナ。そろそろアナちゃん起こしてきてくれへん？」

「ほーい」

アスナは布団を勢い良く引き剥がした。

「ほーらアナちゃん、もう朝よー！ ……へ？」

アスナの目が点になる。

アナの股間には立派なテントが張っていた。

「え？ アナちゃんて女の子じゃなかったの？」

「あー、もうバレてもうたか〜」

「このか？」

振り返るとエプロン姿のこのかが立っていた。

このかは朝食を机に置き、明日菜の隣にしゃがむ。

「アスナ、アナちゃんにおちんちんがあることは皆には秘密やえ？」

「いやいや、ちよつと待ってよ。アナちゃんって男なの？ それじゃネギと同じじゃない！」

「アナちゃんは女の子やえ？」

「はあ？」

「ほら」

「ちよつ」

ずるつとズボンを下ろすこのか。

「立派なモノがベチ！ とアナのお腹を叩く。

「な？」

「なんてもの見せんのよー！」

「アスナ〜、よく見てや、ほら、ここはちゃんと女の子やん」

半信半疑でアナの股間を観察すると、確かに自分と同じでツルツルの割れ目がそこにはあった。

「な、アスナと同じや」

「うっさいわね。私だってそのうち生えるわよ。それよりなんでお……」

「おちんちん?」

「う……そ、そうよ。なんでソレがあるの?」

「なんやよう分からんけどな、アナちゃんは魔法使いらしいんや。そんで、魔力が溜まりすぎる病氣なんやって。おちんちは魔力を出すために手術したらしいえ」

魔法使い?

魔力?

明日菜は訳が分からなかった。

「こんなにビンビンやなんて、また魔力が溜まってるんやなあ」

「ちよ、ちよつとこのか?!」

ペニスを握り、上下に擦り始めるこのか。

「明日菜、これは医療行為なんや。少女マンガみたいなエッチなんと違うんやで?」

「そ、そうなの?」

「そや。それにアナちゃんはこうやってあげると凄くカワイイんやで。ちよつと見ててや」

「う、うん」

さすさす……。

「あ、あつ」

まだ眠っているアナが喘ぎ始めた。

「なんか、凄くエロい声ね……」

「せやろく。こうするともっと可愛くなるんや」

このかは髪の毛を耳にかけ、ペニスに顔を近づけていく。

(うそ、フェラ?)

明日菜の予想通り、このかはペニスをしゃぶり始める。

「あ、む……ちゅぱちゅぱ、れろ、れろ……ちゅ、ちゅるっ」

「あんっ、あ、あつ……んあつ」

アナの腰が跳ねる。

ペニスがビクビクと震え、このかの口に大量の魔力を射精した。

このかは喉を鳴らしながら、こぼさないように飲んでいく。

「んく、んく……あ、そや」

このかは手のひらにタラー、と口の中の液体を垂らした。

そして「ほら」と明日菜に見せてくる。

「あれ？ 白くないわね」

「これが魔力らしいえ。ウチの言うこと信じる気になったやろ？」

「うーん。さすがにここまでされたらねえ」

おしっこにしては粘っこすぎるし、試しに匂いをかいでみると意外にも爽やかな香りがする。

まるで森林のような香り。

舐めてみると味は無く、ミネラルウォーターのようだ

「アスナもやってみいひん？」

「え？」

「アスナは高畑先生のこと好きなんやろ。ほんなら今のうちに練習しておいたほうがええんちやうかな」

「……なるほど。それもそうね」

明日菜はベッドに上がり、このかに聞きながらペニスをしゃぶり始める。

さすがにここまでされて眠っていられる訳もなく、すでに起きていたアナは明日菜の健気っぷりに涙が出てきた。

（アスナ可哀相。初恋の相手がガチホモだなんて……）

しかも恋敵は男の子（ネギ）だ。

何が悲しくてシヨタと争わなければならないのか。

若さで負け、性別という超えられない壁に阻まれた恋は果たして成就するのか。

とんだ無理ゲーである。

（あ、気持ちいい……はあく。このかのおててがく。アスナの舌がく）
薄目を開けると明日菜の「えへへ、高畑先生喜んでくれるかなく」なんていう顔が見える。

恋する乙女が自分のペニスをしゃぶっている。

それだけでアナは明日菜の口に射精してしまった。

「んむ?! ん、ごくっ、ごくっ」

「ああん。アスナ、独り占めしないでウチにも残しといてや〜」

「んん、んん」

（う、うわ〜）

明日菜がタラーと手のひらに魔力を垂らし、それをこのかが嬉しそうに舐める。

舐め終わると、小さくなったペニスを濡れタオルで優しく拭き、ズボンを履かせてくれた。

このかがポンポンと頭を撫でる。

「おはようさん。アナちゃん、朝ご飯にしょか」

どうやら起きていたことはとつくにバレていたらしい。

明日菜の方はびっくりしているが。

「えっと、おはよう。それと、これからよろしくね、このか、アスナ」

「なんかこのかにハメられた気がするけど、高畑先生のためだしね。

秘密にしてあげるから、練習させなさいよ?」

「喜んで!」

こうしてアナに新たなエッチ仲間ができたのだった。

3 大巨乳

「教師……やばい……」

放課後、アナは疲労困憊で倒れそうになっていた。授業の準備、宿題の採点に始まり、他にも学校内の見回りなどもある。

「ちよつと、休憩」

木陰の下で横になる。

疲れていたせいでアナはすぐに眠ってしまった。

「……ん？ 真名、あれは何でござろう」

そこに偶然、龍宮真名と長瀬楓が通りかかった。

友人の見ている方向を辿ると、木の傍で誰かが寝ていて、緑色にうつすらと発光していた。

（魔法関係者か？ こんな人目につく場所で何をしているんだ？）

真名は魔法の秘匿を守れと注意しようと近寄った。

寝ていたのは赴任してきたばかりの子供先生の1人、アナであることに驚く。

（ネギ先生よりも魔力は高いと思っていたが、ここまであつたか？）

真名が瞳に映る膨大な魔力に舌を巻いていると、楓がアナをそつと抱き上げた。

「真名、この様子、普通ではないでござるよ。早く治療した方がいいのではござらんか？」

「なに？」

真名は魔力からアナ本人に視点を戻す。

アナは顔を真っ赤にして、大粒の汗をかいて息を荒げている。

（なんだこれは？）

真名も魔法関係者だが、こんな風になった者は知らない。

その時、誰かの足音が近づいてきた。

楓はすぐに跳んで隠れようとするが、真名が止める。

「大丈夫だ。彼女は関係者だ」

近づいてきたのは金髪で少し強気そうな女子高生。

高等部に通う高音・D・グッドマンだった。

「ちよつと龍宮さん！ 何が起きてるんですの？ それに、一般人と一緒にだなんて！」

「彼女はほぼ私達と同じ側の人間だよ。それより緊急事態だ。先輩、これが何か分かるか？」

「え？ ……ア、アナ先生……それに、これは……」

高音は眉をひそめた後「恐らくですが」と前置きしてから話し始めた。

「これは魔力が暴走しているのだと思いますわ。身に余る力を奮おうとした反動。私も何度か経験がありますわ」

「我々はどうすればいい？ 放っておけば治るのか？」

「一番は手っ取り早いのは魔法を使って魔力を使い切る方法ですが」

高音はそこで言葉を切り、アナの様子をみる。

「気絶してますわね……」

「拙者が気づけで起こすでござる」

「ダメです。まず高畑先生の指示を仰ぎます。失礼ですが、あなたは部外者。ここは任せて下さい」

高音は携帯を取り出し、高畑に向けた。

すぐに繋がり、状況を説明する。

『なるほど。近くに近衛このか君はいるかい』

「いえ、おりません」

『そうか……僕も詳しくはないが、彼女は奇病にかかっているんだ。原始的な魔力譲渡でもって、彼女の魔力を吸い取るくらいしか対処法がない』

「そんな！ いくらなんでもそれはあんまりですわ！」

「真名」

楓が責めるような口調で呼んでくる。

（やれやれ、この人は面倒なんだが。楓は子供好きだからな……）

真名は高音から携帯を奪い、高畑からテキパキと何をするべきか聞きだしていく。

高音は携帯を取り返そうとするが、楓がそれを許さない。

「了解だ。こちらのごことは任せてください」

『ああ。君がそれでいいのなら。無理ならこのか君を見つけてくれ』

「真名、どうすれば良いでござる？」

「性交かそれに類似する行為で絶頂させること。これを繰り返せばいいそうだ」

「こんな幼い子にそんな真似させられません！」

「さすがに、それは……」

まだ10歳の少女を男に抱かせる。

2人は人命救助のためとはいえ躊躇ってしまう。

「あまり気は進まないが、命がかかっている。私がやるさ」

「は？」

「ぐ、ごぎゃっ……」

何言っただこいつ、という顔をする2人。

真名は詳しいことは後で説明すると言い、アナを大浴場に連れて行った。

全員裸になって、浴室に入る。

「こ、これは……」

「なるほど、そういうことでござったか」

楓と高音は真名がお姫様抱っこで連れてきたアナの股間を見て、全てを察した。

「楓、悪いが持っていてくれないか」

「いや、拙者も手伝うでござるよ。知識だけでござるが、房中術の心得はあるでござる」

「そうか。では先輩。アナ先生を頼む」

「は、はい」

高音は正座をして、アナの頭が胸の谷間にくるように後ろから抱っこする。

「いやー、まさかこんなに早く役に立つ日がくるとは思わなかったでござる」

楓はボディソープを胸に垂らし、泡立てる。

アナのペニスを胸で挟み、その大きな胸を上下に揺らす。

「パイズリだけか？」

「まさか。これからでいじぐるよ……はむ」

楓は胸の谷間から顔を出している亀頭を口に含む。

丸くぷっくりとしたそれを、丹念に舐め回した。

「じゅるる、じゅず」

どびゅー！

「ぐんぐん?! げほっ、げほっ」

予想以上の早い射精に、喉の変なところに精液が入った。

咳き込む楓の顔、鎖骨、胸に大量の体液が降り注ぐ。

「これは潮、というものですか？」

高音は楓の鎖骨に溜まっている透明な粘液を摘む。

プルプルしていて、友人から聞いた精液とは全く別物のようだった。

真名は瞳を通して、それが魔力の塊であることを看破する。

「いや、これは彼女の魔力そのものようだ。高畑先生の言った通り、これを繰り返せば彼女は安定するだろう。どれ、今度は私がやろう。

楓、場所を代われ」

「わ、わかったでござる。げほ、げほっ」

楓に負けず劣らずの巨乳を両脇から寄せて、真名はアナのペニスを挟んだ。

その後は楓、真名、高音と交代で射精させ続ける。

3人は粘液がかかっている所を探すほうが難しい程、アナの魔力まみれになった。

「うーむ。これ、いつになったら小さくなるでいじぐるっ。」

「殿方とは、これほどなのですか……」

ぐちゅぐちゅと音を立てながら高音が胸でペニスを擦る。

アナは立たされ、両側から真名と楓の巨乳に挟まれた形になっていた。

「……ニヤー」

「んっ」

アナが楓の乳房に吸い付いた。

「少し意識が戻ってきたようでござるな」

楓はアナの頭を優しく撫でる。

心なしかアナも嬉しそうだ。

「減るものでもなし、好きなだけ吸うでござるよ」

「んみゆ……ちゆ……ちゆ……」

楓は胸を寄せて乳首をアナの口に押し付ける。

「先輩、私も混ぜてくれ。暇になってしまった」

「え、ええ。でもどうするんですの？」

「両側から胸を、そう、押しつけあって……ペろ、ちゆ、れろ……」

「はむ、ちゆっ、ちゆっ」

高音と真名による両側からのパイズリと、亀頭舐め。

びゆる、とすぐにアナは射精した。

「……ん？」

「どうしたでござるか、真名」

「まいったな。アナ先生が絶倫なのかと思ったが、どうやら私達は甘かったらしい」

「どういうことですか？」

「今、魔力の塊……アナ先生が出した体液から魔力がアナ先生に戻るのが分かった。どうやら魔力譲渡というだけあって、この体液は放っておくと意味がないらしい」

「そ、そんな……」

「うーむ。つまり、飲めばいいでござるか？」

「たぶんな」

「いえ、恐らくそれでは無理かもしれません」

「どうしてでござるの？」

「オーラルセックスと膣への挿入では譲渡できる魔力は雲泥の差なんですわ。あ、もちろん本で読んだんですのよ？」

「実践済みか、などと下種な勘繰りはせんよ。だが、いいのか？ 私と楓では吸収できる魔力に限界がある。アナ先生の保有魔力は明らかにその許容量を超えている。必然、魔法が使える先輩に最後は頼むしかない」

真名は高音が本番をするしかないと決意を固めつつあることに気づき、念を押す。

そんな時、楓がアナの不調に気づく。

「まずいでござるよ。また意識が無くなったでござる」

その言葉に、高音は覚悟を決めた。

(……あれ)

気がついたら湯気がいっぱい場所にあった。

木の下で寝ていたはずなのに、今は白い天井が見える。

パン、パン、パン。

「あんっ、あっ、あんっ」

金髪の美女が大きな胸をぶるん、ぶるんと揺らしながら自分の上で腰を振っている。

一瞬、姉のネカネかと思っただが、すぐに別人であることに気づく。すぐ横には褐色の肌の女性と、日本人女性が、お尻をこちらに向けて横になっている。

2人の性器からはドロドロと見慣れた液体が流れていて、床に小さな池を作っていた。

(ていうか、こえええっ)

良く見れば、金髪の女性の後ろには何十という黒い人形がいて、激しくスクワットをしていた。

「い……………くうううー」

首を大きく後ろに反らして、女性がビクツ、ビクツと痙攣する。

ぎゆうぎゆうと膣が締め付けてきて、アナも絶頂を迎えた。

どびゆうっ、どぶ、びゆるるるっ。

高音の子宮が熱い液体に満たされていく。

「……………かはっ」

高音は後ろに倒れ、ぬるんとペニスが膣から抜けた。

「ふう、すまんでござる。大分楽になったでござるよ」

「そ、そうですか……………お、お願ひします」

起き上がったのは楓だった。

中学生とは思えない巨乳を揺らしながら、アナのペニスに手を添え、腰を落とす。

「あんっ」

「お、気がついたでござるか、アナ殿」

「楓……もしかして私、やばかった？」

「で、ござるな。緑色に光り、高熱にうなされているようでござったよ……んっ」

「ずちゅ、ずちゅ。」

楓が腰を動かし始める。

「ひゃあ、しよ、しよれしゅごい、気持ちいいー」

「んっ、ふっ、そ、それは良かったでござる、ん、んっ」

腰を捻ったり、動かし方に緩急をつける楓。

肉壁が色んな角度から竿に当たり、亀頭に何度も子宮口がキスをする。

「びゅー！ びゅるるー！」

「く、起きている時のほうが量が多いでござるな。一度でお腹いっぱいいでござるよ」

「ふえ……？ 何回したの……？」

「10回あたりから数えるのはやめたでござるよ」

「しよ、しよんなに……」

楓が腰を上げる。

割れ目から透明な粘液がどろどろと流れ出した。

今度はいつの間にか復活していた真名がアナの上に立つ。

「ふむ。体調は戻ったみたいだな」

「真名もしてくれたんだよね、ありがとう。こんな言葉じゃ足りないのは分かってるんだけど、今はお礼を言わせて」

「意識も良好。それじゃあさっそく、お礼とやらをもらおうか」

「あんっ」

真名が腰を落とし、アナを啜え込んだ。

楓とも違う感触にアナは喘ぎ声を上げる。

その後、アナは3人が満足するまでお礼の相手をする事になった

た。

「こ、腰が……」

終わった頃にはアナはただ寝ていただけにも関わらず、歩けないほど腰に負担がかかっていた。

他の3人はツヤツヤした顔で平気で歩き回っている。

「まぐわいとは良いものでござるなあ」

「そ、そうですわね。ふしだらで下品なものだと決め付けていたことが恥ずかしいですわ」

「まあ、相手がアナ先生だからというのものもあるだろう。普通の男が相手で、同じように乱れられるかは疑問だな」

「今度は芽衣と一緒に……はっ、わ、私ったら何を」

「皆さん、ご満足頂けたでしょうか？」

アナは壁に手をつきながら、よろよろと立ち上がった。

「うむ。また頼むでござるよ、アナ殿」

「辛くなったら遠慮なく言ってくれ。ただし、私は安くないぞ？」

「その、メアド交換して頂けませんこと？」

「お、お手柔らかに……」

ア、アハハ、とアナはぎこちなく笑った。

フリーダムセックス

アナはエヴァアのログハウスに駆け込んだ。

メイド服を着た茶々丸がキッチンからやってくる。

「アナ先生。どうされました?」

「エヴァアさんに相談したいことが」

「なんだ、もう溜まったのか?」

2階からエヴァアが下りてきた。

「ううん。このままじゃ腰が持たないの」

「なんだその贅沢な悩みは。というかお前、意外と手が速いな」

「や、あれは善意の救命行為なので不可抗力というか」

アナはエヴァアに先ほど起きたことを説明した。

エヴァアはすぐに霊脈の通りで寝たせいだと教えてくれる。

しかし、霊脈とか言われてもアナにはどこに通ってるかなんて分からない。

どうしようと困っていると、エヴァアが椅子から降りて机の下に潜った。

足を開くと「ジー」とジッパーを下ろされる。

小さな手がよいしょよいしょとペニスを取り出した。

「はむ……れるれる……ふふ、ここからは有料だ」

「エヴァアさんのエッチ」

「お前に言われたくないな」

エヴァアは小さな口を使って亀頭を舐めたり含んだりして刺激してくる。

的確なポイントを攻められて、すぐに射精してしまう。

「んく、んく……ぷは。相変わらず凄い量だな」

どびゆ、べちゃ。

エヴァアの顔にべっとり液体がぶっかかる。

「……お前、わざとやってないか?」

「そんな器用なことできません」

顔にかかったまま席に戻る。

茶々丸がハンカチを出してエヴァの顔を拭っていく。

エヴァの顔が綺麗になると、茶々丸は「失礼します」と足の間に座ってきた。

今度は茶々丸がしゃぶってくれるのかな、と期待するが、ペニスを綺麗に拭いて定位置に戻ってしまう。

じつと見ていると、茶々丸は困ったような顔をする。

「あの……その、あとで、なら……」

「待て待て。茶々丸、お前はあつちにいつてろ。アナもこつそり啜えさせようなんて考えるんじゃないぞ」

「……うん」

「後で私が付き合ってやるから我慢しろ」

「うんっ」

「はあ……まあいい。解決策は2つ。1つはお前が3人娘を相手にしても大丈夫なくらい体を鍛える。2つ目はテクニクを磨いてさつさと満足させる。私が言えるのはこれくらいだ」

「現実的なのは2番目かなあ」

「そうだろうな。あいつらは軽く一般人のレベルを超えている。今から鍛えたのでは生半可なことでは追いつけまい」

エヴァは本棚から一冊の本を持ってくる。

題名は「性技1巻」。

「ド直球だね。でもありがとう。明日菜にも読ませてあげてもいい？」

「英語だぞ。あいつに読めるのか？」

明日菜の成績はネギからなんとなく聞いている。

そんなに良くないそうなので、無理かもしれない。

アナは本を鞆に仕舞う。

そして、今度は自分が机の下に潜った。

椅子に座っているエヴァが足を開き、スカートを捲る。

黒いガーターベルトと、黒のレースの下着。

下着を脱がして片足に残す。

アナはつるつるの割れ目に舌を伸ばした。

「んっ」

ぴちやぴちや、ぴちやぴちや。

エヴァは顔を赤くしながら身悶える。

数分も舐めていると、エヴァは足をつ張って絶頂を迎えた。

「はあ、はあ……お前、今でも充分上手いぞ」

「幼馴染に鍛えられました。あ、茶々丸も舐めるの？ あ、拭くんですか、そうですか」

アナは立ち上がって茶々丸に場所を譲る。

「そういえば、あの3人とは本番しかしてなかった」

「自分の技を使わないでどうする。今度試してやれ。もしかしたら半分くらいの回数で済むかもしれないぞ」

「半分かー。やっぱりあの本読も。2巻もあるの？」

「2巻はまだ見つかっていない。それも別荘から取ってきたものだしな」

「別荘？」

「便利な倉庫みたいなものだ。そこに本やら何やら適当に放り込んである……茶々丸？ いつまでそこにいるんだ。拭き終わったんなら出てこい」

つぶ。

いきなり指を入れられたエヴァは、茶々丸の頭を殴った。

「痛いです。マスター」

「こっちの台詞だ！ いきなりどうした?！」

「私も……マスターに気持ち良くなってもらいたくて……」

「お前はそんなことしないでいいんだ。今でも充分役に立っている」

「はい……」

す、と机の下から出てくる茶々丸。

茶々丸はエヴァに見えない位置からアナに口パクで「おしえてください」と言ってきた。

アナは小さく頷く。

茶々丸は微笑んだが、嬉しそうに微笑んだ。

エヴァの家から学園に移動したアナは、職員室でネギに出会った。机が隣同士なので、軽く雑談を交わす。

「兄さん。教師の仕事には慣れてきた？」

「うん。皆授業をよく聞いてくれるし、困ったことがあったらタカミチが助けてくれるからなんとかなってるよ」

「そ、そう」

高畑の影がちらつくのは、あまり良いことではない。

いや、まだネギの貞操は守られているという証拠か？

「でももつと体力は欲しいな。夜、疲れてぐっすりだもの」

「え、兄さん、高畑さんと寝ちゃったの？」

言っただけから、ネギが素で夜の性生活を会話にぶち込んでくるはずがないと思っただけ。

「ベッドは1つしかないからね。昨日もタカミチとお風呂に入って……あれ？　そういうえばお風呂出たから僕はどうしてたんだろう。朝はちゃんとタカミチのベッドで目が覚めたんだけどなあ」

(手遅れだったか……)

アナは高畑を甘く見ていたことを痛感する。

己の欲望のためにネギに「忘却」の魔法を使ったのだろう。

恐らく、昨夜は高畑の居合い拳がネギに炸裂している。

記憶が無いのは高畑の慈悲か、もしくは逮捕されるのを防ぐための狡猾な知恵か。

残念だがネギはもう大人の階段を登ってしまったのかもしれない。

「どうしたの？　肉屋に売られていく家畜を見るときみみたいな目をしてるよ」

「気分は解体された肉を見る心境かな。兄さん、今度何か奢ってあげるよ」

「ほんと？　紅茶の美味しいお店を委員長さんに教えてもらったんだ」

「へー。日本にもそういうお店あるんだ」

相槌を打ちながら、アナは委員長ごと雪広あやかのことを思い出す。

まだクラス全員と話したわけではないが、確かネギに好意を持っている女子生徒だ。

「あの人きつと兄さんのこと好きだよ。英国紳士としてはどうするの？ まんざらじゃないんでしょ？」

「それがタカミチに『あれはシヨタコンっていう病気で、数年もしたら飽きられるから距離を取って接すること』って言われたんだ」

さすが高畑。

すでに釘を刺していたか。

というか、教師としてその忠告の仕方はいかなものか。

さわさわ……。

(え……う?)

股間に撫でられたような感触がする。

机の下を見るが、何も無い。

さわさわ……。

しつかり見ている間にも撫でる感覚が続く。

ネギの悪戯かと隣を見るが、次の授業の教室へ向かったのか空席だった。

っー。

今度は竿を舐め上げるような感触が走る。

(気持ちいいからいつかー)

アナは肩の力を抜いて宿題の採点に戻った。

れるれる、ちゅぱちゅぱ、かほかほ……。

どびゅ!

(あ、出ちゃった……)

あっちゃー、とうな垂れる。

トイレで拭いた後、乾くまではネギの予備を借りよう。

とはいえ、トイレまでは見えないように隠したい。

ハンカチを取り出してズボンにかけようとしたところで、アナは相坂さよらしき幽霊と目が合った。

「もぎもぎ、もぎっ」

ペニスを啜えながら、上目遣いに、何か期待に満ちた目を向けられ

る。

はて、いつズボンからペニスを取り出したのだろう。

(気持ちよかったからいっか)

アナは小さな声で「ありがと、気持ちよかったよ」と言いながらさよの頭を撫でた。

ペニスを仕舞い、トイレに向かう。

誰もいないことを確認してから個室に入った。

「色々突っ込みたいところだけど」

「え、あ、あの！ ちよと待ってて下さい！ すぐ生やしますから！」
「？」

さよは「んんん！」と力む。

するとお化け状態だった下半身が2つに別れ、脚になった。

壁に手をつき、スカートを捲る。

「ど、どうぞー！」

エッチしたいけど口しか使えないね、おまんことアナルもあれば良かったのに、なんて言ったつもりはなかったのだが……。

「お尻しまつて。そういうつもりで言ったんじゃないから」

「え!? あ、すみません。お風呂場であんなことしてたから、つい見てたのか。」

いや、幽霊ならどこにでも自由に行けるか。

「確認したいんだけど、相坂さよだよね」

「はい！ そうです〜！」

「スピリチュアルボディに見えるんだけど、さよも魔法使いなの？」

とつさに幽霊という単語が出てこなかったので、慣れている方の言葉から引用する。

「私、60年前に死んじゃったみたいなんです。死因は分からないんですが、それからずっと幽霊やってます〜」

「え？ でも名簿に名前あったよ？」

「教室に空席がありましたよね。そこが私の席なんです」

言われてみればいつも生徒のいない机があった。

病気かな、と思っていたが、まさか幽霊用の席だったとは。

訳が分からないが、今は置いておこう。

学園長に今度聞いてみればいいし。

「それじゃあ、なんで私のしゃぶってたの？ これからもお願いしませう」

「へ？ あ、は、はい。あの、私って存在感ないらしくって。あれくらいしたら気づいてもらえるかな。って思ってた。いや、ちやいまして」

「ありがとうございます」

「いえいえ」

ぺこりと頭を下げあう。

アナの視界に、すらりとした少女の生足が見えた。

「やっぱりエッチしていい？」

「はい！ 不束者ですが、よろしくお願いします」

突き出されたお尻を撫でまわしてから、アナはスカートを捲った。

パンツは履いてなく、1本の縦スジからはすでに愛液があふれていた。

亀頭をを割れ目にあてがい、ゆっくりと挿入する。

「きつつ……」

意外なことに、まるで生身の人間のような抵抗を感じる。

「はわわ。アナ先生のおつききてあつついです」

「痛くない？」

「それが不思議なんですけど、体がほかほかしてすごく満たされた感じがあります」

「魔力の関係かな？ あ、続けるね」

「はい」

ずぶずぶときよの奥へ腰を進める。

ぬめぬめとした感触。

ところどころできゅつきゅと締まるが、全体的には優しく包み込むような膣だった。

「わ、すごい。全部入ってる」

一番年長の高音でさえ少し余った。

一番年長の高音でさえ少し余った。

ペニスが全部温かい感触に包まれるのは、思ったよりも嬉しいものがある。

アナは腰を振らず、さよを後ろから抱きしめて熱い膣の感触をじつくりと味わう。

「アナ先生は授業大丈夫なんですか？」

「うん。授業は次の次だから。だからゆっくりしたいんだけど……さよは激しい方が好き？」

「初めてなのでなんとも……。あ、でもゆっくりにしましょう！ アナ先生腰が痛いんですよね」

「ありがとね。今度……明日の朝とか腰の調子が良かったらいっぱい突いてあげる」

「えへへ。楽しみにしてますね」

アナは便座に座り、さよと対面座位で繋がった。

「はあく、さよの体やわらかい」

次の授業までの間、2人はゆったりとしたセックスを楽しむのだった。

スプラッシュ

「と、いうわけなのです」
きりつ。

その日の授業、アナは冴え渡っていた。

早乙女ハルナが肘で朝倉和美の乳をつつき、内緒話をする。

（ちよつと朝倉、アナちゃんどうしちやったの。あんたなんか知ってるでしょ、教えてよ）

（いや、ちよつと分からないわね。ヒントはありそうんだけど、これがまた曲者でねー）

朝倉は龍宮、楓、このかを見る。

龍宮と楓は数時間で肌つやが明らかに良くなっているし、このかも同居人としてマークしている。

取材をするならまずはこのかがいいかもしれない。

そんなことを考えていると、視界の隅でエヴァが足を広げ始めた。

（何してんだろ?）

エヴァはスカートをたくし上げ、手を股間に持っていつている。

あれはパンツをずらしているのではないか。

「エヴァさん、なにか?」

「なん、だと……いや、なんでもない」

アナはエヴァを見ても全く動じなかった。

エヴァは足を閉じ、首をかしげている。

（こりゃあエヴァちゃんも何か知ってるわね……）

終業の鐘が鳴る。

アナは新田主任を思わせる敏腕ぶりで連絡事項を伝え、教室を出て行った。

それをこのか、龍宮、エヴァが追いかけていく。

（綾瀬はおしっこか）

スカートを押さええながら小走りに教室を出て行った綾瀬夕映はスルーされた。

朝倉はカメラを鞆から取り出す。

スクープの匂いだ！ とアナを追って教室を出る。

廊下の端のトイレにアナはエヴァに連れ込まれていた。

急いで朝倉もトイレに向かう。

トイレのドアに手をかけようとしたところで、手首を捕まれた。

「ニンニン」

「な、なにか用？ ちょっと急いでるんだけど」

「女子トイレにカメラを持って侵入、でござるか。さすがに止めずにはいられないでござるよ」

「は、ははは。これはそのー、探究心、うわ、これじゃ変態じゃん」

「現行犯で逮捕でござるな」

朝倉は楓に教室へ強制連行された。

「私のスクープがあああ！」

く 女子トイレ く

「なんか廊下が騒がしいね」

「あの声は和美やな」

「大方楓に捕まったんだらう」

真名の言葉にこのかは納得した。

「あの、皆さん。出ていってくれませんか？ これじゃ出るものも出ないです」

プルプル震えながら、綾瀬夕映が抗議する。

足首には外見に似合わないアダルトなパンティが絡まっていた。

「うるさい。人払いの結界を張る直前に入ってきた貴様が悪い。どうせ遅かれ早かれ貴様もこちら側に来るんだ。諦めろ」

「エ、エヴァンジェリンさんは何をいつてるんですか？」

現在、女子トイレの個室には夕映、真名、エヴァ、アナ、このかの5人がすし詰め状態になっていた。

「おいアナ。さっきの授業はなんだ。いつもなら私の誘惑にかぶりつきにくせに」

「エヴァちゃんそんなことしてたんかえ？」

「ああ、確かに変だった。アナ先生の視線がまったくこなかったから

な」

真名はむぎゆ、と胸を持ち上げる。

「え、バレてたの?」

「ああ」

「そっか、これからもよろしくね?」

「あ、いつものアナちゃんや。ていうか、エヴァちゃんも真名ちゃんも、アナちゃんの事情知ってたん?」

「このかの問いにエヴァと真名は頷いた。

(やばい、修羅場になる?!)

恐る恐るこのかの顔色を伺う。

「このかはほんととアナの頭を叩いた。

「こーら。ダメやない。なんでウチやアスナに言わんかったん? 遠慮なんて水くさいえ?」

「え、そっち?」

「そう言うな近衛。アナ先生は気絶していたんだ。今回は多目に見てやってくれ。ちなみに楓と高音先輩もその時居合わせた」

「むー。なんや真名ちゃんがアナちゃんに優しい。ウチだけの妹にしなかったんやけどな」

「このかはため息をつくど、アナの鼻をつつく。

「アナちゃん良かったな。お姉ちゃんが増えたえ」

「そ、それだけ? 浮気者ーとかって怒らないの?」

「他の子にかまけて、ウチのことほっとかんかったら許したる」

「それはつまり、今まで以上にエツチなことすればいいってこと? 任せて!」

「お前という奴は……このか、あまり甘やかすところいつはどこまでもつけ上がるぞ」

「まあまあ。仲良くしようやエヴァちゃん。エヴァちゃんは何でアナちゃんのこと知ってるん?」

「ちよろ……ちよろちよろちよろ……じよろろろ……」

「も、もったです……」

「私はアナが来た夜に襲われてな。魔力で正気を失っていなかったら

「タダじゃおかなかった」

「あー、エヴァちゃんも魔法使いなん?」

「まあな。あまり吹聴するなよ。最悪、聞いた奴は全員記憶消去だ」

「わかったえ〜」

「このかが納得したので、エヴァはアナに向き直る。」

「さて、そろそろ何があったのか話してもらおうか」

「えーと、見えてないっばいんで信じてもらえないかもしれないけど、相坂さよさんです」

「アナはそこに人がいるかのように、ポンと手を空中に置いた。」

「エヴァ以外の全員が手を伸ばすが、空を切る。」

「真名は目を凝らすことで、なんとか薄っすらとさよを視認することができた。」

「まさかお前、幽体のさよで抜いてたのか?」

「はい……教壇の裏でおしゃぶりしてもらってました。あれは賢者タイムです。反省はしています。止める気はありません」

「清々しいほどにバカだな」

「ダメやえアナちゃん。ちゃんと授業はせな」

「う、ごもつともです」

「しゅんとするアナ。」

「おしっこを出し切った夕映は、同性だしもういいや、とトイレトペーパーであそこを拭き始める。」

「きれいに拭いて流すと、何故かアナが自分のあそこに顔を近づけてきた。」

「もっ」

「待つです、と言おうとしたが、熱い舌で割れ目を舐め上げられたせいで変な声が出てしまった。」

「クリトリスをぐりぐりされたかと思うと、舌先が膣口に侵入してくる。」

「じゅるじゅる、じゅぞぞ、ぺちや、ぺちやぺちやぺちや」

「なああ!? や、やめるです!」

「数分後。」

「あ、あ……あっ」

「じゅるじゅる、じゅるっ」

夕映は何度も絶頂させられ、息も絶え絶えになっていた。小さく喘ぎ、時々びく、と震えるだけでぐったりとしている。

(これは、夢ですか?)

夕映は自分の目を疑った。

ズボンを脱いだアナの股間、割れ目のすぐ上にハルナの同人誌に出てるようなモノがそそり立っている。

「夕映。これが私の秘密。皆には内緒にしてね」

「あふ、は、あ」

上手く声が出ない。

仕方ないので頷いて意思を伝える。

「ありがとう。お礼にいっぱい気持ち良くしてあげるからね」

(は? それはどういう……ちよー!?)

アナがペニスの根元を持ち、自分の割れ目にあてがった。

犯される!

慌てて逃げようとするが体が動かない。

くちゅ、くちゅ。

「あ、あっ」

「まずは愛液をまぶしてー」

「やめんか馬鹿者」

「いて」

今にも挿入しようとするアナを、エヴァが殴って止める。

(ありがとう! エヴァンジェリンさん!)

「こんな小さい穴にお前のデカブツが入る訳ないだろう。挿れるなら後ろにしろ」

(ちよー!?)

「え、さすがに後ろは……皆に舐めてもらえなくなるからちよつと」

理由は最悪だったが、夕映はアナの言葉に思わず感謝してしまった。

そこへ、真名が余計なことを言う。

「素股ならいいんじゃないか？ アナ先生も綾瀬も気持ち良くなれる」

「それだと制服がどろどろにならへんかな」

「……さよが先っぽ啞えてくれたから大丈夫みたい」

アナが腰を振り始める。

割れ目がクリトリスごとゴシユゴシユと擦り上げられる。

(!! ……!!)

夕映の目の中でバチバチと星が弾ける。

何度目の絶頂だろうか。

夕映はぶしやあああ、と潮を噴いて意識を手放した。

このかの腔内（なか） あったかくい

トントントントン……。

キツチンでこのかが夕食を作っている。

アナはその後姿を眺めていた。

お尻をうつとりと鑑賞していると我慢できなくなり、「このかく」と後ろから抱き着く。

「あん。危ないえ。包丁持つてるんやから」

「このかく」

ぎゅーっと抱きしめ、このかの張りのあるお尻にすりすり固くなったモノを押し付ける。

まるでバツクでセックスしているみたいで、アナは（割と元からだが）変な気分になってきた。

このかは包丁を置いて、アナのモノをちよんちよんと指でつついた。

「待て、やえ。アナちゃん。夕飯作ってしまわな」

「ご褒美はく？ わんわん」

「んく、そうやなく」

このかは考えながらも料理を再開する。

アナは邪魔にならないように気をつけつつ、抱きつくのは止めなかった。

「そういえば、アナちゃんは楓と真名ちゃんとはもうエッチしてもうたんやつけ」

「あれは素晴らしくも厳しい戦いだっただよ……」

都合50回は射精したのではないだろうか。

気持ち良かったが、今度からは是非とも1人ずつお相手してもらいたい。

近い未来、楓が分身して悲鳴をあげることになるのだが、アナがそのことを知る由はなかった。

「このかく、このかく」

「わ、アナちゃん、ストップストップ」

このかの腰を持って、ぐいぐいとお尻にモノを押し付け始めるアナ。

皆とのセックスを思い出したら、このかともしたくてしたくて堪らなくなってしまう。

「アナちゃんはウチともしたいん？」

「うん！」

「ほんならご褒美はそれにしよか」

「このか大好き！」

アナはぎゅーつと強く抱きしめた後、ぱつと離れて床に正座した。尻尾があつたらブンブン振っているだろう。

「ほな、ちよつと待っててや〜」

「わんっ」

このかは料理を再開し、下拵えを済ませていく。

アナは故郷でネカネに手伝いをさせられていたが、自分よりも手際が良い。

「ねえねえこのか。私にも料理教えてくれない？」

「ええよく。じゃあこつちに来て野菜あろうてくれへん？」

「はーい」

こうして、アナとこのかは一緒に料理の下拵えをするのだった。

下拵えが終わったら2人は部屋に備え付けられているシャワーで体を洗い、ベッドに入った。

アナはこのかに抱きつく。

すべすべした肌が気持ちいい。

「えへへ〜」

「アナちゃん。エッチってどうすればええんやろ」

「どうって？」

「やつぱ漫画みたいにキスして、69とかするん？」

「んー。その時の気分？」

「そうなんや〜」

「例えば今だところかな……えいつ」

「やん」

このかは割れ目の下にペニスを突っ込まれた。

アナは素股の状態で2、3回腰を振る。

「アナちゃんの熱々やな〜」

「ちゅー」

「ん……」

「舌、出してみて」

「し、舌？ んー」

「はむっ」

アナが口を被せる。

伸ばした舌にアナの小さな舌が絡まってきて、せわしなく動く。

（他人の舌って柔らかいんやな〜）

なすがままになりながら、このかはそんなことを考える。

ひとしきりお互いの唾液を交換し合った後、アナは唇を離し、このか首筋にキスをする。

「あっ」

ぞくりとする。

思わず身をよじらせてしまった。

「逃がしません」

「え？ ……あっ」

再び首筋。

今度はちゅっ、ちゅっ、とキスを落とされた後、舐められた。

このかの乳首が固くなっていき、つんと上を向く。

アナは割れ目に手を伸ばし、愛撫を始める。

「このかは感じやすいんだね。もうぐちよぐちよだよ」

「あんっ、あ、あっ」

「クリがいい？ それともこっちっ？」

「ふあっ」

ぬるりと指が入ってきた。

くちゅくちゅといやらしい音が聞こえてくる。

「あ、これかな？」

「！」

強烈な快感がこのかを襲った。

アナの指がそこを責める度、このかは絶頂してしまう。

「はえ〜。ウチこんな気持ち良いの初めてや〜」

「ほんとう？ それなら良かった」

「ん……」

2人はまたキスをする。

顔を離すと、アナが頬を染めながらにつこりと微笑んだ。

「それじゃ、そろそろ挿入するね？」

「い、痛いんやろ？ 優しくしてや〜」

「大丈夫大丈夫。まあ見ててよ」

「ほんま〜？」

「どちゅん！」

アナは一気にこのかの奥まで貫いた。

「~~~~!!」

先ほどまでの絶頂は何だったのかと思う程の快感に、このかはびくつ、びくつと痙攣する。

アナはペニスをぎゅうぎゅう締め付けてくる膣を味わいながら、このかの快樂の波が引くのをじつと待つ。

「はあ、はあ……す、すごかったわ〜」

「ね？ 全然痛くなかったでしょ？」

「そやなく。でも不思議やなあ。普通は痛いんやろ？」

「初めてでも痛くないように魔法をかけといたんだ。結構難しいんだよ〜！」

「へ〜」

破瓜の直前に麻痺、破瓜の直後に治癒、治癒後に麻痺の解除。

これらの行程をほぼ一瞬で行う。

それは糸を針の穴に振り下ろし、針の穴に糸が入った瞬間指を離し、通ったほうの糸を即座に掴んで引き抜くのに近かった。

雰囲気壊れるのでその辺の講釈はすつとばし、アナはゆったりと腰を揺する。

「ああん。アナちゃんちよつと待ってや〜」

「だめ〜。ここかな？　ここがいいのかな？」

じゅぷじゅぷ、ぐちゅぐちゅ。

卑猥な音が部屋に響く。

「あっあっ。そこ、そこ気持ちええ」

「おりや〜」

ぐるーんと腰を回すアナ。

「ひゃ〜。ア、アナちゃん、ウチの体で遊ばんといてや〜」

「えいえい」

「あ、あんっ」

2人はアスナが帰ってくるまで、キヤイキヤイと騒ぎながらエツチを楽しむのだった。

のどかの個人レッスン

(ん……?)

学園の見回り中、アナは全裸の明日菜が走っているのを見かけた。
(あつれー? もう溜まったのかな。昨日このかとあれだけエツチしたのに)

幻を見るようでは相当危険な気がする。

(私の上着を貸したら……あ、おっぱい隠しきれないや。おへそも丸出しになるし……肝心のツルマンも丸出しじゃん)
むしろいいかも?・

阿呆なことを考えながら巡回を再開する。

すると、林の中であわわわしているネギと満面の笑みを浮かべた高畑、気絶してゐるらしい宮崎のどかにばったり出会う。

「ネギ君。ダメじゃないか。2度とこういうことが起きないように、今夜はたつぷりとお説教だね」

「うう、すみません……」

(こいつ本当に説教する気あるのか?)

なんだか説教にかこつけて教師と生徒プレイに興じそうで怖い。

く アナ妄想中 く

「ネギ君。分かったかい? 魔法は無闇やたらに使っちゃいけないんだよ。」

「あんつ。分かりました先生!」

「それじゃあ、復習だ」

「あんつ。見られてしまったら、あんつ、まず、あんつ」

「出る! 豪殺居合い拳!」

「アッー!」

(いや、さすがに死ぬでしょ)

数年前、高畑が滝を割った技がそんな名前だったような気がする。
もちろんうろ覚えなので違うかもしれないが。

「2人とも、こんな所でナニしてるの？ あ、兄さん、痔になったりしてない？」

「え？ 痔？ 別になってないけど」

「はっはっは。何を言ってるんだいアナ君」

「あ、なんでもないです」

高畑がポケットに手をつ突っ込んだ。

下手なことを言えばヤラれる。

アナはのどかを抱きあげてさっさと退散することにした。

「保健室には私が連れて行きますね。高畑先生は兄さんにご指導ご鞭撻のほどよろしく願います」

2人きりにするから許して下さい。

そんな気持ちを含めて高畑にウインクして合図を送る。

高畑は満足そうに頷くと、ポケットから手を出し、ネギの肩に手を回した。

「のどか君のことは任せたよ。それじゃあネギ君。指導室に行こうか。鍵もあるし、あそこは滅多に人も通りかからないから安心だ」

魔法バレしないための配慮だね？

おっぱじめるつもりじゃないよね？

思わず聞きそうになるが、ぐっと出かかった言葉を飲み込む。

アナは回れ右をし、保健室に向かった。

道中、起きないのいいことにのどかの胸や太ももの感触を楽しみながら。

「失礼しまーす」

保健室には誰もいなかった。

アナはのどかをベッドに横たえらせ、ドアの鍵を閉める。

ズボンとパンツを脱ぎ捨て、のどかの上に乗る。

「のどか、起きてのどか」

「……」

「苦しいの？ 今楽にしてあげるからね」

「……」

ブレザーとYシャツのボタンを外していくアナ。

ぷるんと小ぶりなおっぱいがこんにちはする。

「のどか、のどか」

「……」

今度はスカートを捲ってパンツが見えるようにする。

白いパンツをひとしきり堪能したら、脱がして自分のポケットに入れる。

「やだ、エロい」

「……」

ジッパーを下ろすと、ビン！ とペニスが飛び出した。

アナはのどかの両足を肩にかけ、ペニスを割れ目にこすりつける。

「ごめんねのどか。すぐに終わらせるから」

「……」

さすがに同意もなしに挿入はできない。

素股のまま腰を振る。

ギシギシ、ギシギシ。

「あ……あ」

「気絶してても感じるんだ。あ、そろそろ出そう。お口貸してね」

アナはのどかの頭を持ち上げ、ペニスを突っ込む。

当然舐めてくれるわけがなく、口を閉じさせても歯が当たるだけだった。

「……もっかいやって、ギリギリで口内射精かなあ」

アナがそんなことを考えている時だった。

のどかがゆっくりと目を開く。

「あへ？ あはへんへい？」

びゆる！

ぼーっとした寝起きののどかの顔は、可愛かった。

啜えたままもごもごと喋るので、その時の刺激でアナはあつけなく射精する。

のどかはまだ意識が完全には覚醒していないようで、定まらない視線のまま口の中に広がる液体を本能的に飲んでいった。

「んく、んく……」

びゆる、びゆるるっ。

長い射精。

昨日このかに散々出したおかげか、それでも量は普段より少なかった。

射精が終わり、ちゅぽんどのどかの口からペニスを抜く。

最後にびゆる、と魔力が出て、のどかの顔に少しかかった。

「……あれ……おちんちん？ 私、夢見てるのかな」

「のどかはおちんちん見るの初めて？」

「はい。私、男の人って苦手で……」

「うんうん。ここって女子校だしね。男性と接点ないし、よく分からなくて怖いよね」

「はい〜」

アナはのどかの手を取り、ペニスを握らせた。

「どう？ あったかいでしょ」

「はい〜。ぴくぴくしてて、思ったより怖くないかも」

「のどか、好きな人が出来た時のために、ちよつとずつでいいから慣れる練習をしようよ。私のおちんちんならいつでも協力するからさ」

「はい……ありがとうございます〜」

のどかは頬を赤く染めながら、こくんと頷いた。

(よし〜)

アナは心の中でガッツポーズを取る。

それにしても明日菜といいのどかといい、ちよつとチヨロすぎないだろうか。

麻帆良に張られている結界でも影響してるのか？

少し気になったが、エヴァジェリンにでも聞けばいいだろう。

今のはのどかとの個人レッスンの方が大事だ。

正直アナの方が高畑よりも危険な存在だったたりすることにそろそろ自覚が出てきたのだが、気持ち良いから無視することにする。

「善は急げ。友達にメールして保健室で休むって伝えておこう。1時間ほゆる〜」

「はい〜」

のどかにアリバイ作りをさせて準備万端。

アナはのどかの口に再びペニスを突っ込んだ。

「へんへい?」

「水泳と一緒だよ。まずはおしやぶりから始めようね。えっとね、アイスクリームを舐めるみたいに……」

滅茶苦茶なことを言いながら、アナのフェラチオ講座が始まるのだった。

終業のベルが鳴った。

名残惜しいが、のどかの個人レッスンもお終いにしないといけな

い。のどかに膝枕されながら手コキしてもらっていたが、渋々と起き上がる。

「ありがとうのどか。気持ちよかったよ」

「えへへ。良かったです」

2人は靴下以外脱いってしまったので、急いで服を着る。

「あれ、アナ先生。私のパンツ見ませんでした?」

「えっ……」

のどかのパンツは今アナのポケットの中だ。

ちよつと惜しいが、せつかく築いた関係に水を差すのもアレかなと思

い直し、アナはポケットからパンツを取り出す。

「落とし物かと思ったけど、これかな」

「え?」

よく見ると、それは紐パンだった。

「たぶん、ゆえゆえのだと思います」

「そ、そっかあ……ど、どうする? ノーパンよりマシだと思っ

「そうですね……1度寮に戻るまで借りて、あとで洗って返します」

上着、靴下だけで下半身は裸ののどかは、夕映の紐パンを履く。

アナがその様子をしっかりと目に焼き付けていたのは言うまでもな

い。

エヴァ一族、搾り尽くす

「うーむ」

エヴァは自宅の机でうなっていた。

試験管やフラスコには透明な液体……アナの魔力が入っている。試薬を落としてはノートにメモをし、エヴァは難しい顔をする。

「まずいな……一日10リットル飲んでも3年かかる」

アナに頼んで採取した血液から、アナの魔法属性は光ということが判明した。

エヴァの属性は闇。

相性は最悪だった。

確か、アナは魔法使いの修行で麻帆良に来ている。

何年あるのか知らないが、3年もないだろう。

そもそも10リットルも毎日飲むのは面倒だった。

アナは喜んで協力してくれそうだが……。

エヴァはそつと股間を見る。

膣なら魔力の吸収率は飛躍的に上がる。

別にこの年でナギに初めてを捧げたいなどと言うつもりはないが、あまり気は進まなかった。

一方その頃、別室でエヴァの服をきたアナと茶々丸がベッドの上でいたしていた。

「ぴちやぴちや……」

「あん。そこ、今のよかったよ」

四つん這いになったアナの割れ目を茶々丸が舐めている。

「アナ先生。お尻の穴も舐めていいですか」

「や、それはちよつと。エヴァさんがオツケーだったら準備するけど」

「今度マスターに聞いてみます」

「え？ 茶々丸はエヴァさんが怖くないの？ 絶対怒られると思うから止めておいた方がいいよ」

「ダメ、ですか？」

「デリケートなことだからねー」

「分かりました。葉加瀬か超鈴音に良いアイデアがないか相談してみます」

「舌使いはだいぶ良くなってきたね。今日はこれくらいにしようか」

「はい。ありがとうございます。次回はどうするのでしょうか？」

「次回は指使いの練習に移ろうか。茶々丸にもおまんこがあれば教えやすいんだけどね」

「こんど超鈴音に頼んでみます」

「ちゃんとエヴァさんの許可とってからにしてね」

知らないうちにダッチワイフになっていた。

そんなことになったらエヴァに殺されるかもしれない。

クワバラクワバラと唱えていると、茶々丸に後ろからそつと抱きしめられた。

「ん？ どうしたの？」

「力を、抜いて下さい……」

茶々丸はペニスを握る。

冷たいが、ツルツルとしていて意外と気持ちが良い。

しばらく何かを確かめるように触った後、茶々丸は力を緩め、皮を上下にずらすように竿をしごき始めた。

もう片方の手は亀頭に伸び、親指の腹で鈴口の上側をさわさわと撫でる。

「ふあっ、イク」

びゅるっ。

「いっぱい、出して下さい……」

しゅっしゅ、しゅっしゅ。

びゅ、びゅ、びゅー。

「あっあっ、ちや、茶々丸、あんっ」

びゅるるうー。

「アナ先生、可愛いです」

しゅっしゅ、さわさわ、かりかりかり。

「ああー！」

どびゆ、どびゆ、どびゆ……。

茶々丸による終わらない愛撫が続く。

アナはどんどん敏感になっていき、1回しごかれる度に絶頂するようになってしまう。

「おいアナ。すまんがもう1度……」

「ああー！」

どびゆう！ ベちゃ。

ドアを開けて入ってきたエヴァは体液まみれにされた。

ちなみに、持っていたビーカーには1滴も入っていない。

「なにやっとするかー！」

びゆるっ。

エヴァは今度はビーカーでキャッチする。

「ナイスキャッチです、マスター」

「やめんか！ 貴様、静かだと思っていたら茶々丸に手を出していたのかー！」

「あふ、はふ……」

びくんびくん。

アナは息も絶え絶えになっている。

茶々丸がハンカチで綺麗にしようとするが、触るだけで射精してしまつて掃除にならない。

「あーもつたいない、こんなに床にぶちまけおつて。これだけで3リットルくらいあるんじゃないか？」

「どうかしたのですか、マスター」

「あとで説明してやる。ともかくその床をなんとかしてくれ」

「わかりました」

茶々丸は立ち上がり、ボボボとジェット噴射で浮き始めた。

茶々丸に抱きしめられているアナは、下半身丸出しのまま猫のようになだらーんとしながら一緒に空を飛ぶ。

「はふう、はふう」

「ふん、いい薬だ。これに懲りて少しは自重するんだな」
ぺし。

「あん」

びゆる、べちや。

竿を叩かれた刺激でまた射精する。

飛び出た体液は見事エヴァの目に命中した。

「ぐああああー！」

エヴァは目を押さえながらゴロゴロと転げまわる。

「ああ、マスター。そんな所で転がっては……」

「うう……体中ベトベトだ。風呂に入るか……」

く 別荘の浴場 く

「ふあく。きもちいー」

「じゅぽじゅぽ……れろれろ」

現在、アナは浴槽の端に腰を下ろし、エヴァにフェラチオされている。

エヴァは浴槽の中に入り、胸から上だけを出してアナのモノをしやぶっている。

かぼかぼと首を上下に動かし、今度は先っぽを舐める。

それをかれこれ10分ほど続けているが、アナは一向に射精しそうにない。

「おい、なんで出ない。我慢してるのか？」

「……ごしごし……きながら質問する。」

「茶々丸に搾り尽くされたんじゃないかなあ。トドメはエヴァさんだけだ」

「うーむ。1日10リットルは無理か……」

「え、なになに。そんなに毎日してくれるの？」

目をキラキラさせるアナ。

ペニスも1回り大きくなる。

「阿呆か。アゴが外れるわ」

「ちえー」

「……仕方ない。セックスするか」

「え？ いいの？」

「調べてみたが、私とお前では相性が悪すぎて封印解除に必要な魔力が足りん。こつちなら今までの10倍は効率があがることが分かった」

「分かったって……どうやって調べたの？」

「……秘密だ」

頬を赤くするエヴァ。

アナはスポイトでおまんこに入れたのかな、と想像する。

実際は、アナとセックスするのを想像しながらオナニーをし、絶頂と同時に膣に流し込んでいたたりする。

「エッチできるのは嬉しいけど、エヴァさんの中に入るかなあ」

「んっ」

アナはお湯の中に手を突っ込み、エヴァの割れ目に指を入れた。

案の定、指1本入れただけでもきつい。

「無理やり入れればいいだろ」

「えー。そんなことしなくても、ちゃんと解せば入るようになるよ？」

アーニヤは1ヶ月くらいかかったけど」

「アーニヤ？ 故郷の女か？」

「うん。幼馴染。あれは7歳の頃だっけ」

「うーむ……いいだろう。ここを使えば2日もあればいけるはずだ」

「どういふこと？」

「ここと外では時間の流れが違う。ここでの1日は外の1時間なんだ」

なるほどと納得する。

アナはついでなので、茶々丸の指導についても頼んでみた。

エヴァは自分を気持ちよくしてあげたいという茶々丸の願いに複雑そうな顔をする。

「そんなことせんでもいいんだがな」

「私からもお願いしたいな。好きな人ならなおさら、拒絶されたら寂しいよ」

「ふむ……」

エヴァは少し考える時間をくれといい、その日はそれで解散となっ

た。

後日、茶々丸も別荘で特訓に参加すると知らされる。

「良かったね、茶々丸」

「はい……」

本当に嬉しそうに、茶々丸は微笑んだ。

夜、このかと明日菜とエツチ

夕食の後、ほぼ日課になってきた明日菜のフェラチオ修行が始まった。

後片付けをしているこのかの後ろで、ズボンとパンツを脱いだアナの股間に顔を埋める明日菜。

明日菜は根元から裏スジまで舌をれろー、と這わせ、亀頭をくるくると舐め回しながら竿をしごく。

「はあく。きもちいいー」

「れろれろ、ちゅぱちゅぱ……ちゅっちゅっ」

明日菜の頭の中では高畑が「ああ、凄く気持ちいいよ明日菜君。こんなにエツチな女の子が恋人なんて、僕はなんて幸せ者なんだ」と言っている。

現実の高畑はガチホモなのだが。

明日菜の恋は前途多難だ。

「あ、おっぱいも見たい」

「ぷは。あんた、本当におっぱい好きねえ」

「男の人は皆好きだよ」

「え、そ、そう?」

「アスナは特に大きいし。きっと喜んでくれるよ（高畑は無理だけど）」

「えへへへ」

ニヤニヤしながらアスナはパマジヤのボタンを外していく。

ぶるんと大きな丸い乳房がこんばんわした。

アナは両側から押しつぶしたり、上下に揺すっておっぱいの形が変わるのを楽しむ。

「アスナ〜。せっかくやからパイズリつてのしてみたらどうや〜」

「パ、パイズリ? 何よそれ」

「おっぱいでおちんちん挟んでな。いっぱい擦るんや」

「ふむふむ」

明日菜は言われたとおりにやってみる。

先っぽが胸の谷間から顔を出す。

「亀頭は舐めてあげると喜ばれるよ」

「はいはい……あーん。もごもご、れろれろ」

竿はおっぱいに包まれて温かい。

先っぽは熱くて柔らかい舌がぺとぺと触ってきて気持ちがいい。

アナはすぐにびゆる、と射精した。

「ぐくっ、ぐくっ、ぐくっ……ぷはあ。ふう、今日も全部こぼさずに飲めたわね」

「ありがと。それじゃあ次はエッチしよつか」

ズボンを脱がしにかかるアナのおでこを、明日菜はデコピンする。

「私の初めては高畑先生に決まってるでしょ」

「いてて。じゃあ高畑としたらで」

「あのねー。それじゃ浮気になるでしょうが」

「えー」

アナは「ごめんなさい高畑先生！でもアナちゃんのおちんちんの方が気持ちいいの！」とか言わせて見たかった。

片付けを終えたこのかがエプロンを外し、パジャマのズボンとパンティを脱ぐ。

頬を膨らませているアナを床に寝かせ、69の態勢を取った。

「いただきまーす」

「あん。食後のデザートやえ、なんてな」

このかの割れ目をペロペロと舐めるアナ。

「アスナ、パイズリしてあげてや。ウチは先っぽ舐めるから」

「はいはい。よいしょっと」

むにゆんという感触に続き、亀頭が温かいものに包まれる。

鈴口をぺちやぺちやと舐められ、カリ首にも舌が這う。

程なくどびゆ、とこのかの口に射精する。

「んく、んく……」

このかは起き上がると口を開いた。

アナの吐き出した魔力がたっぷり入っているのが見える。

「こくん」

につこりと微笑み、アナの体液を飲み込む。
それだけで、ぴゅつとまた射精してしまった。

「きやつ。もく。顔にかかったじゃない」

明日菜は明日菜で顔射されたようになり、流れ落ちた魔力が胸を伝う。

アナは明日菜の胸を上下に揺らしてみた。

胸にかかった体液がローションの代わりを果たし、ぐちゃぐちゃといやらしい音を立てる。

「うわ、なんかエロいわね」

「……」

ぐちゃぐちゃ、ぐちゃぐちゃ。

これはいい。

まるでおっぱいを犯しているみたいな気分だ。

むにむにと形を変える丸いおっぱいも見ごたえ抜群。

アナは一心不乱に明日菜のおっぱいを動かす。

「あ、そろそろ寝なきや。明日バイトなのよね」

「待っておっぱい。あと5分。あと5分だけ」

「誰がおっぱいよ！ ダメダメ。朝早いんだから」

「ああん。私のおっぱいー」

風呂場に行ってしまう明日菜の背中に手を伸ばすアナ。

「アナちゃん。ウチもう我慢できひん……な？」

ベッドに手をついてお尻を向けてくるこのか。

アナは膣口に亀頭を宛がい、ずぶずぶと腰を押し進める。

「ああん。アナちゃんのいつもより固いわく」

「んっ、このかもいつもより濡れてる。締め付けもすごい！」

パン、パン。

どびゅー！

「あんっ。お腹の中に熱いのがいっぱい入ってくるえ。アナちゃんのせーしがウチの子宮にいっぱい流れ込んでくる」

びゅっびゅ、びゅるるっ。

射精する度にペニスが跳ねる。

このかのお尻がいやいやと左右に揺れ、色々な場所を刺激する。

「あつあつ、う、うそ。ウチも、あつ、あぁー！」

このかが海老反りになって痙攣を始めた。

膣がきゆうう、と締め付けてくる。

アナは腰を引き寄せ、このかの一番奥に龟头を押し付けながら射精した。

「はあ、はあ……なんか今日のアナちゃん凄かったなく。ウチすぐイッてもうた」

「これのおかげかな」

アナは革張りの本を取り出した。

エヴァに借りた「性技1巻」だ。

「なんなん、それ」

「エツチの指南書。まだ少ししか読んでないけど、効果は抜群だね！」

「アナちゃんはお嫁さんがたくさんおるからなあ。全員を気持ちよくするには必要かもしれないへんなく」

にゅぽんと膣から抜けたペニスに舌を這わせ、このかはアナにお掃除フェラをする。

（アナちゃんかわええからなく。まだまだお嫁さんが増えそうや。ウチもつかうかしてられんなく。真名ちゃんに楓、エヴァちゃんとあとはさよちゃんやろ？ あ、ゆえもか……ウチも勉強しようかな）
そういうえば昔、実家に入ってはいけないと注意された部屋がいくつもあった。

大きくなったら見てもいいと言われた覚えがある。

もしかして房中術についての書物が保管されているのではないだろうか。

（久しぶりに行ってみよかな？）

アナがまだ入浴中の明日菜の裸見たさに服を脱いで走り出す。

このかはくすくすと笑ってから、携帯で実家に電話してみた。

『……はい。近衛どす』

「あ、その声は千草さんかえ？ ウチやこのかや」

『お、お嬢様?! こない遅くにどないしはったんです?』

「今度の休みにでもそつちに帰ろうかと思てな？　一応連絡しとこ思うてん」

『長もお喜びになりますやろな。分かりました。しかと伝えます』

「あ、それとな千草さん。お父様には秘密にして欲しいんやけど……」

房中術の書物について尋ねてみる。

千草は「ウチに任して下さい」と快諾してくれた。

「このかー。このかも早くー」

「あ、ごめんな千草さん。呼ばれてもうた」

『いえ。それではお迎えに行きますんで、着いたらまた連絡ください』
電話を切り、このかも風呂場へ向かう。

すりガラス越しに、壁を手についた明日葉に後ろから覆いかぶさり、胸を揉みながら腰を振るアナの姿がぼんやりと見えた。

「んっ、このか早くきてっ。アナちゃん、あんっ、のせいでちつとも体が洗えないわ」

「ありやりや。アスナもとうとうお嫁さんかっ」

上着を脱いで浴室に入る。

しかし、よく見るとアスナは素股をさされているだけだった。

「あ、このか代わってよ。このエロガキ止まんないのよー」

「アスナっ、アスナっ」

「そんなこと言うて、なんだかんだでエッチさせてあげるんやから、アスナも優しいなっ」

「べ、べつに？　これは練習させてもらってるお礼よ、お・れ・い！」

「そかそか。アナちゃん、ウチも混ぜてやっ」

「このかっ」

「あんっ」

さっそくアナが後ろから挿入してきた。

浴室にパンパン、あんあんと嬌声が響く。

3人はひとしきり楽しんだ後、仲良くゆっくり湯船に浸かり、おしゃべりに花を咲かせるのだった。

パルパルパルパル

「そういうえばお前、バックタイオー仮契約はしないのか？」
お昼休み。

アナ、このか、明日菜、エヴァ、茶々丸、楓と真名、さよは屋上で
食事をとっていた。

エヴァの質問にアナは首を振る

「オナホ妖精がないから……」

「待て、なんだその卑猥な妖精は。初耳だぞ」

「あ、ごめん。オコジョ妖精だった」

「お前……まさか……」

エヴァはオコジョにちんこを突っ込んでゴシゴシしてるアナを想
像した。

「……」

食べかけのちくわをそつと弁当箱に戻す。

「アナちゃん、また溜まってきたんかえ？」

「ううん。あれは普段からそういう存在だったから、つい」

「どんな存在よ、それ」

「おいやめろ。食事中だ。それより仮契約だ。こいつらを従者にして
魔力を渡せばいちいち抜く必要はないんじゃないのか？」

「絶対やだ」

「即答か」

隣に座っている楓の胸に泣きつくアナに、エヴァは呆れてしまう。
バチツ。

(ん？ 今、何か通ったな……)

結界を踏み越えてやってきた者がいる。

エヴァはちくわをアナの弁当箱に入れ、立ち上がった。

「あれ、どうしたの？」

「結界を越えてきた奴がいる。どうせ小物だが、一応確認しておかね
ばならん」

「ふむ。エヴェンジェリンさんが行くなら私は不要だな」

「そうなのでござるか？」

「彼女は学園最強だ。今は力の大半を封印されているがな」

「それ大丈夫なのでござるか？」

「……」

楓に突っ込まれて、真名は考えを改める。

胸の谷間から拳銃を取り出して立ち上がった。

ニンニン言いながら楓も立ち上がる。

「なんか面白そうですね。私も行きます」

「……まあ、お前達なら足手まといにはならんか。さよはいつものように気配を殺しておけよ」

「は、はい」

すうー、と薄れていくさよ。

連日アナの魔力を浴びてきたさよは、霊格が上がってしまい、姿を自在に見えるようにすることができるようになっていた。

「さよもイツちゃうの？」

授業中の教壇裏セックスが……とアナは切なそうな顔をする。

「ウチが抜いたから安心してや」

「わーい。休み時間になったら女子トイレに集合ね……ちらっ」

「え、私も？ このか1人で十分でしょ」

パスパス、と明日菜は手を振る。

く 女子トイレ く

アナの携帯にこのかからメールが着信した。

『ごめんなく。お爺ちゃんに呼ばれてもうた』

「なん、だと……」

パンツを下ろして準備万端にして待っていたアナはがっくりとうな垂れる。

そんな時、女子トイレに誰かが入ってきた。

明日菜だったらしいのと思うが、さつき断られたばかりなので違うだろう。

コンコン。

「はいつてまーす」

「……アナ先生。夕映です」

「夕映？ どうぞどうぞ！」

下半身丸出しのままドアを開ける。

「わ、本当に生えてる！」

夕映、のどかの他に、何故か早乙女ハルナが立っていた。

ハルナは手で顔を隠しているが、指の間から見ているのが丸分からだ。

3人を個室に入れ、鍵を閉める。

「うわあ……すごい、これが本物なのね……」

「あの、夕映さん。これはどういうことなのでしょう？」

「すみません。ですが、元はといえばアナ先生が私のパンツをガメていたのが原因なのです」

「すみません。ゆえゆえにパンツを返したら、アナ先生の話になっちゃって、ゆえゆえも同じだねって話しているのをハルナに聞かれてしまったんです」

「3人とも、私におちんちんがあることは秘密にしてね。絶対だよ」

「もちろんなのです。私だったら誰にも知られたくないです」

「です」

「ありがとう！」

アナは夕映に抱きつく。

さりげなくスカートを捲り、太ももにペニスを擦りつける。

バレないうちにパツと離れ、のどかにも抱きつく。

身長差を利用して胸に顔を埋める。

(ふっふっふ。さあ、メインディッシュだ！)

ハルナの巨乳に飛び込む。

だが、ハルナはしゃがんだまま顔を真っ赤にして、じつと食い入るようにアナのペニスを凝視していた。

「……えい」

「ひゃっ」

腰を突き出すと、ズザザ、と後ろに後ずさられてしまう。

だが、そんなことで諦めるアナではない。
個室の隅に追いやり、ハルナの頭を掴む。

「わ、私にひどいことするつもり？ エロ同人誌みたいに！ エロ同人誌みたいに！」

「エロ……どうじんし？」

日本語の勉強はしたが、その言葉は知らなかった。

(後で聞けばいいか)

わたわたしているハルナの口が開いた瞬間を狙い、ペニスを突っ込む。

「あー、あー」

ハルナは精一杯口を開き、ペニスに触らないようにする。

「うーん……」

どうも嫌がられているようだ。

アナはペニスを引き抜き、便座に座った。

のどかの手を引いて、じっと目を見つめる。

「え、えと……恥ずかしいけど、頑張りますー」

のどかが足の間に座り込む。

竿を握り、あーんと先っぽを啜えてくれた。

「うわ……ほんとに舐めてる……」

「かぼかぼ、ちゅ、じゅる……ゆえゆえも一緒にしよ〜」

「えっ、わ、私もですか。し、仕方ないのです……失礼するです。アナ先生」

竿の上にはのどかの顔。

右には顔を真っ赤にしたハルナ。

左には竿の左側を舐める夕映。

「ぴちやぴちや」

「れる、れる……」

「ふ、ふたりとも凄いわね」

「ハルナもしようよ。触るだけでいいから」

「う、うん」

ハルナはおっかなびつくりといった感じで竿に手を伸ばす。

ちよつと触れたらすぐに引つ込めてしまおうが、恐る恐るまた触ってきた。

「おー。すごく温かいのね、おちんちんって」

「根元の方を上下に擦ってみて。そうそう」

しゅっしゅ、ぴちやぴちや、れるれる、もみもみ。

どさくさに紛れてアナはハルナの巨乳を制服の上から揉む。

（はあく。気持ちいいよー）

このかとエッチする予定だったが、これはこれで嬉しい展開だ。

「あ、出そう」

「はい〜」

亀頭の裏スジを舐めていたのどかは鈴口に唇を被せる。

びゅる、とのどかの口に大量の体液が流し込まれた。

「こくん……こくん……」

「あれ？ この垂れてきたのが精液？ なんか透明だけど」

のどかはまだ全てを飲みきることはできず、口からいくらか溢れてしまった。

夕映は丹念に舐めとつていき、ハルナは手に付いた粘液を指を閉じたり開いたりして観察する。

「意外です。これは今まで飲んできたジュースのランキング上位にくる味です」

「え、おいしいのこれ」

「はい。爽やかな甘みと、まるで雨上がりの森林のような緑豊かな匂い。飲まないのは損ですよ、ハルナ」

「いや、そんな力説されても……あ、でも確かに良い匂い」

「いっぱいあるから、好きなだけ飲んでね」

「それでは、お言葉に甘えて……」

「あん」

夕映とのどかが場所を交代し、今度は夕映がちゅうちゅうと吸い付いてきた。

「あ……ア、アナせんせー」

「んんっ」

アナはのどかとハルナのスカートに手を入れ、愛撫をする。

しばらくするとふたりのスカートの中からくちゆくちゆという水音が聞こえるようになった。

「ハルナ。だっこしてー」

「んっ、あっ……こ、ここう？」

ハルナの胸の間にアナを抱き寄せる。

アナは力を抜いてハルナに体を預けた。

「じゅるじゅる、ちゅっ、れろれろ、ちゅー」

「あっ……あんっ」

「……あ、あ」

「んっ、んっ」

ハルナの温もりに包まれ、3人の喘ぎ声に耳を傾ける。

ペニスに吸い付く夕映の舌に腰を震わせながら、アナは至福の時間を味わうのだった。

雪広あやかさん、アナを振り回す

く 森の中 く

エヴァ達は侵入者と思しきオコジヨ妖精を追いかけていた。

「ひいー！」

「真名！ そっちにいったぞ！」

「了解」

バキューン。

グネ。

「ちっ。いったぞ、楓！」

「ニンニン。4つ身分身！」

「ぎゃあああ?!」

オコジヨ妖精を4人の楓が取り囲む。

「オコジヨフラーツシュー！」

「ぐ、ごぎ?!」

オコジヨ妖精から強烈な光が発せられ、楓達の視界を白く塗りつぶす。

楓の横をすり抜けていくオコジヨ妖精。

パパパン！

「ぶへぽもげろろっ」

破裂音と共にオコジヨ妖精の悲鳴が聞こえてきた。

ようやく目が見えるようになると、ぐったりとしたオコジヨ妖精と、それを摘んだ高畑の姿があった。

「やあ、間に合って良かった。彼とは知り合いだね。僕が預かるよ」

「え?」

「ん? なんだい、エヴァ」

「いや、その、なんだ。すまん。お前のだとは思わなかった」

「……? 何か勘違いしているみたいだけど、これはネギ君のだよ」

「そ、そうか……」

アナに聞いていたオナホ……オコジヨ妖精はネギのだった。

その場にいた女性陣全員が微妙な気分になる。

そうこうしているうちに、高畑がオコジヨ妖精、カモを連れていく。「エヴァ殿、やはりネギ坊主もアナ殿と同じなのでござろうか」「ないとは言い切れんが、可能性は低いな」「私から見てもネギ先生の魔力は安定している。つまり、まあ、アレは純粹にそういう目的のために使うのだろう」「で、ござるか……」

息子のベッドの下からエロ本を見つけたら、こういう気分なんだろうか。

楓はふとそんなことを考えるのだった。

放課後、アナは珍しく仕事が早く片付いた。

なんとなく2―Aを覗いてみると雪広あやかが1人で何か作業をしている。

手伝おうかな、と思った矢先、アナの中で悪戯心が芽生える。

(兄さんの真似しておねだりしたら、どうなるのかな?)

アナはトイレに入り、髪形を少しネギに近くして声真似をする。

「あ、あー。いいんちよさん。いいんちよさん。んっ、ん。よし、やってみよう」

双子なだけあり、かなり似ていた。

「お疲れ様です、委員長さん」

「まあネギ先生！ この雪広あやかに何かご用でしょうか?!」

いきなりテンションマックスで接してくるあやか。

アナは調子に乗ってエッチなことをおねだりしてみる。

まずは股間を押さえて苦しそうな演技をした。

「うっ」

「ど、どうなさいました?!」

「委員長さんを見てたら、なんかドキドキしちゃって……おちんちんが痛くなっちゃいました」

「ブー」

「うわっ」

あやかが鼻血を噴出す。

すぐにさささ、と綺麗にふき取ると、ハアハアと息を荒くして肩を掴んできた。

「この雪広あやかにお任せ下さいー！」

「は、はいっ」

あまりの迫力にネタ晴らしのタイミングを逃すアナ。

椅子に座らされ、ジツパーを下ろされる。

「あ、おっぱい見たいです」

「もう……少しだけですわよう？」

あやかは教室の鍵を閉め、カーテンを引く。

制服とYシャツのボタンを外し、クラスで1、2を争う巨乳を出した。

ビン、とパンツを押しつけてアナのモノがそそり立つ。

「まあ……なんてたくましい……さすがネギ先生ですわ」

あやかがうっとりそんなことを言う。

さすがにこれ以上は誤解されたままだと不味いのでアナは止めようとした。

「あのね」

「あ、すみません。すぐご奉仕いたしますね」

「ひゃん」

ぱく、とあやかが先っぽを咥え込む。

明日菜同様、恋する乙女の顔で一生懸命アナのペニスに舌を這わせる。

「んぐんぐ、じゅぽじゅぽ」

「ま、まってあやか！」

「うふふ。分かっておりますわ。アナ先生」

「え、いつからバレてたの？」

「胸を見たいとおっしゃった時に。アナ先生の地が出てましたわよ」

「あ、さいですか……じゃあ、なんでここまでしてくれるの？」

アナの質問にあやかは唇に手を当てて「うーん」と考える。

「そうですね……胸を見たいといった時の甘えた声とか、ボタンを

外している時の期待に満ちた顔が可愛かったから、でしょうか」
「そ、そうなの？」

それだけでここまで普通するだろうか。
アナの疑問が伝わったのかあやかが不安そうに見つめてくる。

「こんな私は、やはり気持ち悪いでしょうか？ 幼い男の子に夢中になるなんて」

「ううん。私はあやかのこと好きだよ！」

おっばい大きいし！

さすがにそれは言えなかったが、あやかはパツと笑顔になる。

「ありがとうございます、アナ先生！」

あやかは涙を浮かべながら抱きしめ返してくる。

顔におっばいが押し付けられて息が苦しかったが、アナは胸を揉みしだき、その時の快感を優先する。

(ああ、やわらかー……)

「アナ先生、アナ先生！」

「へ？」

あやかにガクガクと体を揺すられていた。

「良かった。お気づきになられたんですね」

「あ、気絶してた？」

「すみません。私が気づくのがもう少し早ければ良かったのですが」

「ううん。気持ちよかったからいいよ」

懲りずにあやかの胸に顔を埋める。

両側からもゆもにゆと揉み、おっばいの感触を楽しむ。

「くす、本当におっばいがお好きなんですネ」

あやかはアナの頭を撫でながら、そつとペニスに手を伸ばした。

初めはさわさわと触れるか触れないかという微妙な力加減で撫で、
鈴口が濡れてきたらしゆ、しゆと竿全体をしごく。

「ふあ。きもちいいー」

「アナ先生はもう精通は迎えてらっしゃるのですか？」

「いっぱい出るよー。あ、もう出そう」

「まあ」

「ぶ」

あやかが亀頭を啜えようと股間の方へ身を乗り出し、膝枕から落ちたアナは床にごちんと頭をぶつけた。

熱い感触に亀頭が包まれた瞬間、びゆる！ と射精する。

「……………ぐく、ぐく……………ぷは……………アナ先生の精液は、とても美味しいですね。本にはとても苦いとありましたが」

「あやか、痛いよー」

「あつ、すみません。教室だと匂いが残ると思ひまして。生徒で分かる方はいないとは思いますが、高畑先生などは気づくかもしれませんし」

気づくどころか精液に関してはスペシャリストじゃ……………。

出かかった言葉をアナはギリギリ飲み込む。

そして、ペニスを持って左右に振った。

「あやか、もっかい舐め舐めしてー」

「あら、舐めるだけでいいんですの？」

あやかは立ち上がり、スカートの裾を持ち上げる。

太ももが露になり、やがて白いパンティが顔を覗かせる。

割れ目の部分が愛液で濡れていた。

「い、いいんですの？」

「ふふふ。冗談ですわ」

あやかはパサリとスカートを下ろす。

アナもパタリと倒れる。

「順番が逆になりましたが、デートしてくれませんか。その、憧れですの」

「喜んでー」

きつとデートの後でさせてくれるんだ。

アナはそう勝手に思い込んで飛び上がった。

その後はあやかのクラス委員としての仕事を手伝い、あやかの部屋にお邪魔する。

那波千鶴や村上夏美もいたが、何かと世話を焼いてくるあやかの好

きにさせ、たっぷり甘えさせてもらった。

那波が「ラブラブね。良かったわね、あやか」と冷やかしてくるが、二人の世界を作りつつあったあやかには届かなかった。

かえで姉、しゅげい

「かえで姉どこかな〜」

「お姉ちゃん待ってー」

鳴滝姉妹はとことこと世界樹の近くを歩いていた。

「野暮用でござる」と言っておさんぽ部を休んだ楓の後を追っていたのだが見失ってしまったのだ。

「ボク達の追跡から逃れるとは、さすがかえで姉……あれ、史伽？」

後ろの茂みで史伽がしゃがんでいた。

何をしているのだろうかとうと近寄ってみると、顔を真っ赤にしてじっと遠くを見ている。

視線を追ってみると、アナと楓が青いシートに座っていた。

アナは楓に膝枕され、楓の胸に手を伸ばしている。

楓はアナの頭を撫でながら、ズボンから出ている棒のようなモノをさすっていた。

よく見れば、楓は前をはだけけていて、お風呂に入ればぷかぷかと浮かぶ大きな胸をさらけ出していた。

声はよく聞こえない。

アナが立ち上がると、楓が胸で棒をはさんで上下に揺らす。

動きを止めると、今度はアナが胸を持って腰を動かし始めた。

しばらくすると、楓が胸に顔を埋め、アナの「あうー」という声が聞こえてきた。

「はあはあ……」

隣にいる史伽が胸を揉みながらオナニーを始めていた。

風香も胸がドキドキして、顔を熱い。

アナがシートの上に横になると、楓は棒の上に腰を下ろした。

パンパンという乾いた音がこっちまで聞こえてくるほど、激しく腰を上下させている。

それに合わせて胸もぶるんぶるんと揺れる。

アナが楓を押し倒し、今度は楓が下になる。

楓の脚がアナの腰に絡まる。

対面座位、四つん這い、バックと様々な体位で2人は交わる。いつの間にか、風香と史伽はお互いの性器を愛撫しあっていた。木に手をつけて楓がお尻をこちらに向ける。

割れ目からどろどろと透明な液があふれ出ていた。

アナが楓の後ろに立ち、腰を振る。

風香達の指も激しくなる。

またイク。

そんな時、アナがこつちを向いた。

ビクツとして指が止まる2人。

アナはニコニコしながら手招きしてきた。

「ど、どうしようお姉ちゃん。覗き見してるのバレてるみたい」

「今逃げててもアナ先生とは授業で会うし、行くしかないんじゃない？」

「ううー」

風香と史伽は茂みから出た。

「…………… どうしたでござるかアナ殿……………ふ、風香に史伽!? に、逃げるでござるー!」

「へ?」

「え?」

「おりゃー」

「や、それはダメ……………」

「とおー」

「く……………ああああー!」

アナが腰をぐるぐる回す。

楓は嬌声を上げて絶頂した。

「すごい。かえで姉もそんな声出すんだ……………」

「かえで姉、すぐくエツチな顔してる」

「史伽、風香、こつちにおいで?」

「う、うん」

アナは楓を横たえ、両脇に2人を寝かせる。

「んあつ」

再び楓に挿入。

じゅぶじゅぶと小刻みに腰を動かして濡れ濡れになっている腔をかき混ぜる。

それと同時に史伽と風香の下着を下ろして割れ目を愛撫する。すでに充分に濡れていたため、スムーズに指を入れることができた。

「あれ、意外と柔らかいね」

1本、2本、3本と指を増やす。

「ふああ！ ああん！」

「あ、あ……ひやう……」

楓に抱きつきながら、アナの愛撫に2人はあえぐ。

「これなら挿入しても大丈夫そう」

ぐちゅぐちゅと激しく指を動かしながらアナはそんなことを言う。それを聞いて、楓はアナの腰にガツチリと脚を絡めた。

「はあ、はあ、いかにでござるよアナ殿。今日は拙者の番でござる」

楓と真名は体力がありすぎて、2人同時に相手をするには休日でもないと時間がいくらあつても足りない。

相談した結果、1日交代で、ということになったのだ。

「さきつちよだけ！ さきつちよだけだから！」

「かえで姉。ボクもエツチしてみたい」

「え！ お姉ちゃん？」

「ま、待つでござるよ風香。こういうことは好きな相手と、いやそれより、お主達はもっと体が成長するまでしない方がいいでござる」

「だって、ボク達のこと好きになる人ってロリコンじゃん。やだよそんなの」

自分じゃなくて幼い子としたいだけ。

そんなのは風香はごめんだった。

「その言葉を待っていた。ぐえ」

「させんでござるよ」

風香の足の間に移動したアナの首に足を絡めて引き倒す。

「よいしょ」

「こら風香！ 止めるでござるー！」

アナのペニスにしゃがもうとする風香を楓は止めるが、風香は聞こうとしない。

ダメか。

楓が諦めかけたその時、誰であろうアナが風香の割れ目からペニスを退かした。

ぺたん、と竿の上に風香は着陸する。

「風香、それじゃ痛いだけだから、私に任せて。それと、やっぱり今日は楓とするよ。約束だからね」

「じゃあボクは？」

「明日……は真名と約束してるから、明後日。楓もそれでいい？」

「うーむ。拙者を優先してくれるのは嬉しいでござるが、風香は本当にそれでいいんでござるか？」

「かえで姉、すつごく気持ち良さそうだったんだもん。私もやってみたい！」

「お姉ちゃんがするなら、私もやってみたいな」

史伽もそんなことを言い出す。

なんとか説得して止めさせたい楓だが、風香がにしし、と悪戯つ子の顔をする。

「させてくれないなら、史伽とエツチな……バイブ？ でするからいいよーだ」

「楓、初めてがバイブより、私プロデュースの無痛で気持ちよくて最高に素晴らしい初体験の方がいいと思うんですよ。どうですか、どうですか？」

じゅぶじゅぶ、じゅぶじゅぶ。

楓の膣にぐいぐい挿入しながら力説してくるアナ。

「はあ……仕方ないでござるな(どびゅー！)くっ……そ、その代わり(どびゅー！ どびゅー！) あっ、んっ、優しくしてあげて欲しいでござる」

「喜んでー！」

びゅるるー！

「あっ」

熱い感触が子宮いっぱいに広がるのを感じ、楓はイッてしまう。

ありがとーと、アナ、風香、史伽に抱きつかれるが、楓は複雑な気持ちだった。

(バイブよりはマシ、か……)

なんだかんだで楓もアナとのセックスは楽しんでいる。

ネギのように道具で発散するよりかは健全だろう、と最終的には納得することにした。

く おまけ く

「兄貴、兄貴、これ見てくませえ」

「なあにカモ君」

カモがテレビを指差す。

画面の中ではネギと同一年くらいの女の子達が強烈な魔法を放っていた。

「わ、すごい。これ燃える天空かな」

「兄貴も使えるようになりますぜ。あつしと契約して魔法少女になれば……」

「え？」

カモはネットで取り寄せた魔法少女の衣装を広げる。

「さあ兄貴！ あつしと契約して魔法少女になりやしよう！」

(くつくつく、兄貴を男の娘にして、あーんな写真やこーんな写真を撮って売りさばけば……ぐへへ)

カモは目を「\$」にしながら熱く説得を続ける。

「ねえ、カモ君」

「……え？ あ、はい。なんでやしよう」

「それ着たら、またシテくれる？」

ネギはもじもじしながら頬を赤くした。

「もちろんでさあー！」

カモは衣装を放り投げてテーブルにぺしよ、と腹ばいになった。

ネギはズボンを下ろして、パンツを脱ぐ。

カモを持ち上げ、股間へカモの顔を……。

そうだ、真名で抜こう

「今度の休みに京都へイクんだけど、みんなもどう、と……」

アナはポチポチ携帯を操作してメールを皆に送った。

ピピッ。

「マスター。アナ先生からメールです」

「なんだって?」

「今度の休みに京都でイクんだけど、みんなもどう、だそうです」

「なんでわざわざ京都まで行って、あいつのソロプレイに付き合わねばならんのだ」

清水の舞台に立って、おちんちんをしごいているアナと、その隣でオナニーをしている自分達を想像する。

阿呆らしい、とエヴァは切って捨てた。

ピピッ。

アナの携帯が着信を報せる。

メールの送り主はこのかだった。

「なになに……アナちゃん、たまつとるん? 抜きに行こか、か……お願いします、と」

まだまだ魔力に余裕はあるが、してもらえるなら是非して欲しい。ピピッ。

「今度はハルナからか……是非お供します! ネタにしている? かつ……なんの話だろう?」

とりあえず「いいよ。一緒にイこうね」と返信した。

アナは手帳を取り出してハルナは参加、とメモをする。

ピピッ。

またハルナから返信が来た。

「や、私にはまだ早いのでご勘弁を? イキたいんじゃないのかな」ピピッ。

今度は楓からメールが着た。

「楓は……アナ殿。京都『へ』行くではござらんか、か。ん? 私そう書いたはずだけど」

アナは携帯を操作して送信したメールを見直してみた。

「……やっぱ、溜まってるのかなあ」

このかがもうすぐ来るだろうし、丁度いいか、とアナは特に気にしなかった。

これがネギあたりだと物凄く落ち込みそうだな。

双子なのにこれほど性格に差が出るのは、属性に影響されているからだろうか？

よし、今度エヴァさんに聞いてみようかとアナは考える。

「あ、トイレに行つて人払いの結界の準備しておこつと」

アナは今日はどんな体位でこのかとエッチしようかなあとウキウキしながらトイレへ向かった。

金曜日の夕方、駅にはアナ、このか、真名、エヴァ、茶々丸が早く電車こないかなと待っていた。

特にエヴァの落ち着きのなさが凄い。

あとは少し離れた柱に刹那が隠れているのだが、結わいた髪の毛がはみ出ている。

このか以外にはバレバレなのだが、刹那は気づかれていないと思っ
ているらしい。

アナは声をかけて欲しいのかなと思つて近づこうとするが、真名に
止められる。

「まだ恥ずかしいそうだな。自分から言い出せるまで待つてやつて欲しい」

「そうなんだ。刹那にはメール送つてないんだけど、真名が誘つたの？」

基本的に、エッチした人にしか送っていない。

例外としてはネギだが、腰が痛いから休むという意味深なメールが返つて来て「え、高畑つて受けだったの?!」とアナをビビらせた。

「ああ。このかと仲直りする良い機会だと思つたんでね」

「そういう理由だったんだ」

「何だと思つたんだい？」

「刹那も私とエッチしたくなつたのかと……」

「フ……アナ先生はブレないな」

ちえーと唇を尖らせるアナに苦笑いする真名。

案外、このかと竿姉妹になれると言えばすんなり受け入れそうな気もする。

刹那がそつち方面に興味がなかった場合、竿姉妹になれると言つてもピンとこないかもしれない。

いや、下手にこのかとアナ先生の間係を知ったら斬りかかるんじゃないかアイツ、と真名は特にもないので色々シユミレーションをして暇を潰す。

「そういえばアナ先生。エヴァンジェリンさんがここにいるということとは、封印は解けたのか？」

「ああ、うん。京都に行くメンバーを聞いた日の放課後から特訓してね。さんざん搾り取られたけど、気持ち良かったし、エヴァさんは可愛いかったし、役得でした。はい」

「アナ先生、こんなところで興奮しないでくれないか。カメラがある場所ではしたくないぞ？」

「大丈夫。さよ、悪いんだけど……あつ」

ぶるるっ、とアナが震えた。

その後はあく、と気持ち良さそうに息を吐く。

まるでプールでおしっこした時のようだが、どうやらさよがアナのおちんちんをしゃぶっているらしい。

電車に乗り込んだアナ達は、おしゃべりに花を咲かせていたが、しばらくすると真名はアナがじつと自分の胸を凝視していることに気がついた。

「どうかしたのかい、アナ先生」

「え？ 揺れるおっぱい見てたの」

「フフ」

真名はアナの股間に手を置いた。

すぐにおちんちんが固くなり、真名の手を押し返す。

「トイレで抜こうか？」

「是非」

ウイंकする真名に2つ返事でそう答える。

2人はトイレの個室へ入った。

真名がトイレの蓋の上に座り、上着を脱ぐ。

丸くて大きなおっぱいがゆさゆさと揺れる。

アナはおっぱいを両手で持ち上げ、おちんちんを谷間に挿入した。

上下に同時に揺らしたり、交互に揺らしたり。

膣に見立てて前後に腰を振ってみたり。

10分、20分、30分。

アナはおっぱいを弄り続ける。

「ん……」

真名がぴくんと震えた。

始めの10分くらいから顔が赤くなっていたが、どうやら軽くイッたらしい。

「胸だけでイクこともあるんだな。初めてだよ」

「エヴァさんは耳が弱いんだよ」

「ほう。それは貴重な情報だ。怖くて試せないのが残念だな」

真名は情報のお礼ということで、アナのモノを挟みながらフェラチオを始める。

「あむ……ん、ん……ぷは。アナ先生のはいつも元気だな。れろ……ちゅ、れろれろ、はむ……かほ、かほ、じゅる、んー……ぷは。おかしいな。今日は妙な気分だ。はむ、れろれろ、ちゅ、ちゅ……」

真名は舐める度にじゅん、と愛液がにじむのを感じた。

気分もいつもよりエッチになっているらしい。

目の前の少女があえぐ姿をもっと見たい。

舐める度にあげる声をもっと聞いていたい。

もっと自分を見て欲しい。

(……うーむ。魅了の魔法でもかけられたか?)

それとも自分に流れる魔族の血の影響だろうか。

真名は頭の奥が痺れたような感覚を味わいながら、アナにパイズリ

とフェラチオを施し続ける。

「あつ、あつ……真名、気持ちいいよ、イク、イツちゃう！」

「じゅる、じゅぼじゅぼ、じゅるるる」

「あー！」

「んん……」

真名はアナが絶頂する直前に、アナのモノを喉の奥まで飲み込んでいった。

苦しかったが、全て口の中に収めることができ、唇が腹部にくっついた。

びゅる、びゅるる、と喉の奥で射精される。

真名はもう離さないと言わんばかりに腰に両手を回して抱きしめた。

舌を伸ばせば、割れ目、尿道口のあたりまで舐めることができた。

舌先をくにくにと動かしてみると、アナがビクビクと奮える。

「あんっ、しゅごい、しゅごいよ真名！ おちんちん全部入っちゃってる！」

「ん……」

ぴちやぴちや、ぴちやぴちや。

「あつー！」

びゅる、びゅる、びゅるるる！

（あれ……？）

アナは一瞬、真名の目にハートマークが浮かんでいるように見えた。

目をこすつてもう一度良く見ると、熱っぽく潤んだいつもの瞳だった。

（気のせい、かな？）

何かの本で似たような現象について読んだ気がしたのだが、ずるずると真名の喉からおちんちんが引き抜かれていく感触でアナは再び射精してしまう。

びゅる、びゅるっ、どびゅるるっ。

真名のおっぱいに大量に降り注いだ。

真名はうっとりとその様子を眺め、ほう……とため息をつく。
しなやかな指で丹念に掬い取っては口に運んでいく。
その様子があまりにいやらしかったので、アナはまた大きくしてしま
まう。

結局京都に到着するまで、2人はトイレから出てこなかった。

実家に行くまで月詠と車エツチ

蛙の群に襲われることもなく、一行は無事に京都に到着することが出来た。

「あー！ 千草はんや〜！」

ぶんぶんと手を振るこのか。

改札の向こう側に黄色い着物を着た和服美人が立っている。

その横にはゴスロリに身を包んだ、このか達と同一年くらいの少女が立っていた。

「おかえりなさいませお嬢様。他の皆さんはようこそ京都へ。ご実家まで案内させてもらいます。天ヶ崎千草といいます。よろしゅうに」「月詠です〜」

「アナ・スプリングフィールドです！ こちらこそよろしくお願いしますおっp、いや、千草さん！ 月詠！」

「おや」「やん」

2人に抱きつくアナ。

特に千草の胸に顔を押し付けて、ぎゅーつと抱きしめて堪能する。

アナは真名に耳を引つ張られて引き剥がされた。

「さすが外国の方。リアクションが大きいですなあ」

「よろしくな。アナはん」

月詠はアナの頭をよしよしと撫でてくれる。

皆に見えないように下の方もよしよししてくれた。

(おお……このかといいい月詠といい、京都の女性は女神なの?)

これは千草も期待できるかもしれない。

アナは今夜が楽しみになるのであった。

「ほな、行きましようか」

千草についていくと、黒い車が2台と、その横に巫女さんが1人立っていた。

「ほ、本物の巫女さんだ……」

あやかや真名、楓と同じくらいの巨乳。

千草は先頭の車の運転席に乗り込み、このかがその隣、月詠が後ろの席に乗った。

エヴァ達は巫女さんが運転する方の車に乗る。

皆が車に乗り込む中、アナは千草のおっぱいと巫女さんのおっぱい、どっちにしようか悩んでいた。

「アナはん。どうかしたんですか？」
「！」

千草は着物を着崩して、肩、上乳が丸見えになっていた。

アナはすぐに月詠の隣に乗り込む。

車が発進してからは、もうずっと千草の胸に釘付けになっていた。

「アナはん」

「なあに？」

あ、乳首見えそう。

身を乗り出すアナを、月詠が「危ないですよ」と席に座らせる。

アナは両手を合わせて見逃してと懇願する。

月詠はくす、と微笑むと、アナの股間に顔を近づけていった。

(え？ え？)

ジッパを下ろされ、おちんちんを取り出される。

「アナはんのお体のことは、お嬢様から聞いとります」

「え、そうなの？ あっ」

月詠がはむ、とまだ勃起していないおちんちんを口に含んだ。

「ごめんなアナちゃん。千草さんと電話してたら話が弾んで、ついポ

ロつと言つてもうたんや〜」

「ううん。千草さん……それと月詠も黙ってくればいいよ」

「ちゅぽちゅぽ……ちゅぽちゅぽ……」

頭を上下させてフェラチオする少女の頭を撫でる。

「月詠はんは知ら……」

バックミラーを見ると、アナの方に体を倒している月詠の姿が映っていて、千草は後ろで何が起きているのかなんとなく察した。

「月詠はんも誰にも言ったらあきまへんよ」

「ぶは……了解です。はむ……かぽかぽ、じゅるる」

「？」

このかはよく分かっていないようだが、千草が学校の様子などについて話を振ってきたので会話に意識を持っていかれた。

「じゅるじゅる……れろ……ちゅっ、ちゅ……アナはん、エッチな匂いがいっぱいしますな。後ろに乗ってるお嬢さんの誰かとエッチしてたんですか？」

れろー、と裏スジを舐める月詠。

アナは月詠のおっぱいを揉みながら素直に頷いた。

「うふふ。ほんなら、うちはその人と竿姉妹になれるんですね。」

ベルトを外し、アナの上に乗ってきた。

「アナはん。うちにもお情けをおくれやす……」

スカートの中にもお情けを入れさせられた。

月詠はパンティを履いておらず、びしょ濡れになっていた。

アナはお口でもらったお礼に、膣に指を入れて愛撫をする。

「あひん」

「ん？ どうかしたん？ 月詠ちゃん」

「いえ、なんでもありません」

月詠は腰を下ろし、ずぶずぶとおちんちんを飲み込んでいく。

こつん、と子宮まで挿入すると、きゅうううと膣全体が締め付けてくる。

「はあく……入れただけでイッてしまいました」

とろんと目を細めて快感に震える月詠。

その顔は、とても色っぽかった。

びゅる！ と子宮に射精する。

「あん。熱いのがいっぱい……それに、まだ固いままやなんて……うち、アナはんに溺れてしまいそうや……」

是非溺れて欲しいので、アナは月詠の腰を持ってズン、と突き上げる。

「~~~~」

口を押さえて必死にあえぎ声を抑える月詠。

「あいつら、おっぱじめ始めたぞ」

エヴァは上下に揺れる月詠を見てそう言った。

「あらあら。月詠ちゃんたら手が速いんだから。ごめんなさいね。あの子、最近ちよつと修羅に落ちかけてたとかで、何か別のことに夢中にさせて剣から遠ざけようとしたら、ああなっちゃったらしいの」「いや、いい。こつちにも似たような奴がいるから、苦労は分かる」「はあ、あんなにしたのに、まだし足りないのか」しら」

巫女さんと真名の嘆きが重なった瞬間だった。

巫女さん、絶頂↓気絶ループに陥る

アナ達はこのかの実家を訪れた。

山の中腹に建てられた大きな和風の屋敷にエヴァ達はおーと感嘆する。

アナだけはずらりと並んで出迎えてくれた巫女さんに夢中になっていた。

「アナちゃん、ウチの実家大きくて引いた？」

「え？ ううん。それより私達のサイズの巫女服ってある？」

欲望一直線のアナ。

お嬢様ということと距離をとられてしまうかも……と心配していたこのかはほつと胸を撫で下ろす。

一行は客間に通され、豪華な夕飯に舌鼓を打った。

途中でこのかの父親も食事に参加し、ナギの話になる。

「私と彼は旧知の仲で、離れには彼が一時期使っていた家もあります。良ければ案内しましょうか？」

「お気持ちは嬉しいのですが……兄と一緒にの時間をお願いします。抜け駆けしたくないので」

「……なるほど。アナ君はお兄さん想いなんだね」

このかの父親はしんみりとする。

「それよりお母さんはどんな人でしたか？ まだ生きてますか？」
出来れば巨乳の美人さんがいい。

く アナ妄想中 く

「お母さん、お風呂はいろく」

「もう、アナったら。またお母さんのおっぱいで挟んで欲しいの？」

「だってー。お母さんのおっぱい気持ちいいんだもん」

「もう。しょうがない子ね……よいしょ、と。はい、挟んだわよ」

「お口もく」

「はいはい……ぱくっ」

「あんっ」

阿呆なことを考えているアナに、このかの父親はすまなそうな顔をする。

「すみません。彼女の生死は分からないのです」

母の精子？

(いけない、いけない。また魔力が溜まってきてるな)

真名と月詠に散々出したはずなのだが……。

もしかしたら、このかの家は霊脈に恵まれているのかもしれない。

巫女さん達や千草といたしたいアナとしては、精力が強くなるのはむしろありがたい。

「お父様、アナちゃんのお母さんのこと知ってるん？」

「ええ。彼女は美人で気高く、スレンダーな」

なに？

「……ごほん。失礼。とにかく彼女は魅力的な女性でしたよ。ああ、そういうえば彼女が受けた儀式がありましたね。物は試しでアナ君も受けてみますか？」

「なんの儀式でしょうか」

「乳神様を降ろし、バストアップの加護を」

「えい」

このかはトンカチで父親の頭を殴った。

ばた、と倒れるこのかの父。

「何してはるんですか長」

千草が助け起こすと、このかの父は完全に気を失っていた。

「英雄も娘の前では形なしですなあ」

「千草さん。乳神様の儀式ってどんなのですか？」

アナは千草の胸に顔を埋める。

「神をその身に降ろした巫女と交わるんです。そうすることで、神様から加護を頂けるんですなあ」

「ち、千草しゃんー！」

「う、ウチですか？ すんまへん。ウチは陰陽師なんです。こちらの神はんなら何度か儀式をやったことがあります」

巫女の1人がすつと立ち上がった。

確か、エヴァ達の乗った車を運転していた爆乳の巫女さんだ。

「榊といます。私でよk」

「お願いしますー!」

アナは食い気味にお願いするのだった。

く 儀式の間 く

襦袢に着替えた榊とアナは、乳神様の儀式を始める。

榊が祝詞を唱えながら、神楽を舞う。

ぶるんぶるんと上下、左右に揺れるおっぱいがまた、圧巻だった。

そのうち榊が流す大粒の汗で襦袢が透けて、よりエロくなっている。

シヤン、と鈴を鳴らして、榊が動きを止める。

「……今宵の迷える子羊は誰かな? 私が率いる。私が総べる!

おっぱいに貴賤ナシ!!」

思っていたのと違ったが、明らかに榊とは別人になっていた。

指をわきわきさせながら近づいてくる。

アナは襦袢を脱いで裸になった。

「え……?」

乳神が動きを止めた。

「ちん、ちん?」

「どうかしたんですか、乳神様」

「あれ、君女の子だね? なんでおちんちんが付いてるの?」

「これには深い理由があるんですが、置いておきましょう」

「いやいや! 置いておけないよ? あ、ちよ、やめ」

アナは後ろからズン、と榊を貫いた。

「にゃー!」

ばたり。

「あれ? 乳神様? 乳神様?」

榊の肩を揺する。

パンパン腰を打ち付けてみる。

起きない。

アナは榊を仰向けにして片足を肩にかけ、腰を動かしてみた。ゆさゆさと胸が動く。

襦袢がずれてちよつと胸があらわになる。

もつと腰を動かしておっぱいを揺すり続けると、やがて全部襦袢からまろび出た。

達成感でびゆる！ と射精する。

「乳神様ー。乳神様ー」

今度は両足を広げて、ぐちゅぐちゅと榊の膣内をかき混ぜる。さらさらのおつゆでぐつしより濡れた膣がとても気持ちいい。

「……あ」

「あ、乳神様気がついた？」

「……乳神は妹です。私は姉の膣神といいます」

「ち、膣神？」

「妹に代わり、私が加護を授けましょう」

膣神が降りた榊は体を起こし、襦袢を脱いで裸になる。

アナは仰向けになっておちんちんを入れやすいように垂直に立てる。

榊が腰を下ろし、熱々の膣に再びおちんちんが包まれていく。

「はあ……ああ……ん……これは……とてもいい……肉棒ですね……あ……ん……そう、こんなにたくさん……少女を抱いてきたのですか……あっ……」

膣神はゆやゆらと緩やかに腰を動かす。

「あなたには……相手の感じる場所が分かる加護を与えましょう……」

ぎゅうう、と膣が強烈に締め付けてきたかと思うと、がくり、と榊は体を倒した。

アナは試しに榊の膣内を探るようにおちんちんを抜き差ししてみた。

「お、ここかー」

今まで分からなかったが、そこが弱点だ、というのがなんとなく感

じ取れるようになっていた。

「榊さんが起きたら、いっぱい気持ちよくしてあげよう」

それまでは、どこが感じる場所か調べて時間を潰そう。

アナは気絶している榊を仰向けにして、じゅぶじゅぶ出し入れを開始する。

気絶していても体は反応するようで、榊は数分毎にぷしや、ぷしや、と潮を嘔く。

「なかなか起きない……」

加護を与えられたアナの執拗な責めにより、榊の体は絶頂の嵐に曝されていて、目覚めたそばから絶頂させられては気絶していたのだが、アナが分かる訳もなく、榊はアナが飽きるまで快樂地獄を味わうのだった。

刹那さん、四つん這いで女の喜びを知る

「おや、あんさんも来てたんですか」

千草は柱に隠れている人物が刹那だったことに驚いた。

駅では刹那の姿は見えない。

「お久しぶりです千草さん」

「お嬢様とはまだ仲直りできてへんみたいやなく。良く知りまへんが、さくつと謝るなり許すなりしたほうが良いと思うわ」

——早くしないと、コロツといなくなってしまうかも知れへんで。

つい口に出しそうになった言葉を、千草は寸でのところで飲み込んだ。

「あんさんの部屋も準備しますから、儀式の間に行つてアナ先生達を呼んできておくれやす。どこにあるかは覚えてますやろ？」

「大丈夫です。その、お手数おかけします」

「ええって、ええって」

千草は手をひらひらさせながら歩いていく。

「儀式の間、か」

刹那は慣れ親しんだ廊下を進み、儀式の間に到着する。

扉の前に砂時計が置いてあり、砂は落ちきっていた。

確か、砂が流れている間は儀式の最中で、落ちきつていたら使っていないか、神降ろしが終わったという意味だったはずだ。

すれ違ったかもしれないが、刹那は念のため扉を開けて中を確かめた。

パン、パン、パン、パン。

「!？」

裸の女性を、アナがバックから腰を打ち付けていた。

気持ち良さそうな顔のアナ。

「……………え？」

刹那は目が点になった。

アナの股間に、おちんちんが生えている。

「んあっ」

ぷしや、と女性が潮を噴いた。

2人の結合部からどろりと白い液体が大量にあふれ出る。

(え? え? アナ先生は男?)

突然の事実に関頭が混乱する刹那。

そんな刹那に気づいたアナが、さっぱりとした顔で近づいてくる。

白い液でドロドロになったおちんちんをブラブラさせながら。

「刹那、いい所に来てくれたよ。ちよつと榊さんの様子を見てくれな
い?」

「え? 彼女は榊さんなのですか?」

麻帆良に来る前、榊には色々世話を焼いてもらった。

なんだか自分を見る目が少し怖かったが、それを除けば自分に良く
してくれた数少ない人だ。

刹那は急いで裸になる。

本当は水浴びをして身を清めてからにしたかったが、ぐったりとし

て動かない榊が心配だった。

「榊さん! 榊さん!」

仰向けにして、頬を叩く。

(あ、刹那もまだ生えてないんだ)

四つん這いになった刹那のお尻。

そこは1本スジがあるだけで、無毛だった。

アナのおちんちんがまたむくむくと鎌首をもたげていく。

(膣神様、膣神様。刹那とエッチしてもいいですか? あ、はい。あり
がとうございます)

別に答えてないが、アナにはにつこりと親指を立てる膣神の姿が見
えた気がした。

「アナ、いつきまーす」

「え? アナ先生……」

刹那のお尻を持って、膣口にちゅつと亀頭でキスをする。

それだけで、アナはびゆる! と射精した。

刹那の処女マンコに、熱い性液が所狭しと流れ込んでいき、子宮口
にぶつかった。

「……え？」

お腹に感じる熱さに「まさか？」と思う刹那。

アナは性液をローションの代わりにして、刹那のおまんこに先っぽを滑り込ませた。

にゅぽにゅぽ、にゅぽにゅぽ。

「あつ」

膣の入り口を亀頭で出し入れすると、刹那が仰け反った。

「へー。刹那はここが好きなんだ。ほれほれ、ここがええのんか？」

ん？ あ、もつと奥がいいですか、そうですか」

「あつあつ、ま、待って下さい！ 榊さんを起こさないと！」

「あ、そういえばそうだったね。よいしょつと」

ぬるー。

刹那の腰を引っ張り、熱く、ぬめぬめした膣をかき分けていくアナ。

こつん、と子宮に先っぽが当たると、びゆる！ と子宮の中に射精する。

「ああ！ な、中に、また中に出てます！」

刹那の頭に「妊娠」の2文字が頭を過ぎったが、涙が出る前にアナの言葉に呆然とさせられる。

「安心して。私のこれは魔力の塊で、精子はゼロだから」

「そ、そうなんですか？」

「うん。私おちんちんあるけど女だもん」

おちんちんがあるなら男じゃないんだろうか。

保健体育の成績もそんなに良い訳じゃない刹那はよく分からなかった。

アナは刹那の膣の感触を身をゆだねることにしたらしく、動きを止めた。

刹那はまた榊を起こしにかかる。

「ん、んん……あら、刹那ちゃん？ あらあら、刹那ちゃんもアナちや

んとエッチしてるの？」

「榊さん！ 良かった。お体はなんともありませんか？」

「今もちよつとイキ続けてるけど、さつきより大分マシね。アナちや

んのおちんちん凄すぎ。私、もうアナちゃんなしじゃ生きていけないわ」

「えへへー」

アナは照れながら、刹那のおっぱいを触った。

若いだけあって、弾力が凄い。

乳首をきゅつと摘むと、膣もぎゅつと締まる。

「あ、おつゆも出てきた。刹那、そろそろ動いていい?」

「あひい……ダメです」

「えい」

「あん!」

子宮を突かれた。

潮を噴きながら刹那は仰け反る。

「アナ先生……ください……って言ってくれたらやめてあげる」

「はあ、はあ……アナ先生、ください」

「わかったー」

「ああ! あん! そんな、あんつ、やめるって、いったの、に! あんつ」

ずちゅずちゅ、ずちゅずちゅと腰を前後させるアナ。

「じゃあ、今度は……エッチな刹那にいっぱいお仕置きしてください、かな」

「エ、エッチな刹那に……」

刹那は膣をかき回されて何度も絶頂しながら、アナの命令通りにお願いを言う。

今度こそ抜いてもらえると思ったが、アナは「よく出来ました」と頭を撫で、いっぱい動いて刹那をあえがせる。

「ダメ、ダメ、イク、イツちやううう!」

びゆる! びゆる、びゆるるるる!

アナの射精と同時に、刹那は絶頂を迎えた。

アナはそのまま腰を回し、刹那の膣をかき混ぜ続ける。

「いやあああ! イッてる、イツてますううう!」

「最初のお願いはなんだっけ?」

今度こそ止めてくれるかも。

刹那は藁にもすがる思いで必死に思い出す。

「あ、アナせんせ……ください……」

「よくなりましたー」

「あん、あんっ、あ、あっ」

パンパン、パンパン。

ぷしゃ、ぷしゃ、と刹那は何度も潮を嘔く。

「あん、あ、あっあっあっあっ」

またイク。

そう思った瞬間、ピタリとアナの動きが止まった。

もう少しでイケそうな刹那は、無意識にお尻を揺ろうとするが、

アナにすっかり掴まれて動かせなかった。

「それじゃあ2回目のお願いはなんだっけ？」

「く、ください！ 刹那にエッチなお仕置きいっぱいしてください！」

「ちよつと違うけど、大目に見てあげるね。えいえい」

「ああああああ！」

お願いをちゃんと言えられたら動いてくれる。

エッチなお願いをすれば気持ち良くしてくれる。

刹那は考えられる精一杯のエッチな台詞を使ってお願いを続けた。

「皆さん、何かあったんですか?！」

ガラ、と千草が儀式の間に入ってきた。

そこで見たのは、アナの上で腰を振る榊と、うつとりとした表情でアナとキスをしている刹那だった。

「あんっあんっ、アナちゃんのおちんちん気持ちいい！」

「……」

心配して損した。

千草はそつと扉を閉めた。

詠春さん、手でしてもらったあげく、ぶっかける

「くすくす。お父様。気持ちいいですか」

「ああつ、気持ち良い。気持ちいいよ、このか」
くちゆくちゆ、くちゆくちゆ。

和室の1室。

詠春は袴を脱いで、月詠に手でしごいてもらっていた。

とろんと蕩けた表情の月詠は見ているだけでゾクゾクする。

「ああ！ 出る、出るよこのか！」

「お父様、もう出てしまいそうなん？ 実の娘のお手で精子いっぱい出してしまおうん？」

「うああ！」

月詠の髪に、眼鏡に、白濁液がべつとりと降りかかった。

「娘と同じ年の女の子に射精するなんて、いけないお父様やなく」

イツたばかりで敏感な龟头を、月詠は指先でグリグリする。

「びくんびくんと痙攣する詠春。」

また射精し、月詠の顔を白く汚していく。

とろとろと顔を伝って流れてくる精液を、月詠は指で受け止めた。

そして、いつもならぺろりとひと舐めするのだが、今日はピツと指を払って飛ばしてしまう。

「え……」

いつもと違う仕草に詠春は戸惑う。

この後は「お父様のエツチなおつゆ。おいしいわ」と言ってくれ
るはずなのに。

月詠はティッシュで顔を拭くと「こういうことはこれで最後にして
下さい」と言っ去っていった。

少し時は遡る。

土曜日の昼、このかは千草と房中術について勉強していた。

「どうやら、千草さん」

今は魔力を循環させることを練習している。

このかの飲み込みの良さは異常で、常人が3日かかることを1回でこなす。

千草と手を合わせ、お互いの体の中を循環させる高難度の技もすぐに使いこなした。

その才能の高さに千草は舌を巻く。

「上出来です。いえ、初めてにしては上手すぎます。こちらに来る前に練習してはったんですか？」

「んー？」

このかは唇に指を当てる。

思いつくのはアナとのエッチだ。

射精されるたびに熱い感触とは別の何かがお腹の奥、ヘソ、そして全身へゆつくりと巡っていくのを感じていた。

(これは鍛えればあつという間に化けるやもしれへんな)

千草はこのかを鍛えなくなった。

こつそり陰陽師として仕込み、いけすかない西の爺と長の鼻を明かすのはなかなか魅力的な案に思う。

近衛近衛近右衛門は魔法協会理事。

このかも追々魔法使いにするつもりなのだろう。

これほどの才能を持つのだ。

恐らく魔法使いとしても大成するはず。

両親を奪った戦争を起こした魔法使い達からそんな逸材を奪う。考えただけでも胸が躍る。

(ま、これくらいしても罰は当たらんやろ)

千草はなんとか麻帆良に潜り込み、このかを陰陽師として鍛えようと決めた。

さて、ではどうするか。

このかとの修行を終えた後、千草は廊下を歩きながら考える。
スパーン。

「月詠君。これでお終いって、急にどうしたんだい？」

「うちはもう心に決めた人がおるんです。今までありがとうございました。ほな、さいなら」

「ま、まっつてくれ！ ……あ」
「……」

襖を開けて出てきたのは、下半身丸出しの詠春と、服を着くずした月詠。

千草はにやりと唇を歪めた。

「ち、千草君、これはその、違うんだ」

「ウチのお願い聞いてくれはるんでしたら、今のは見なかったことにしても良いですよ？」

「お願い？」

「お嬢様のお世話をしたいので、麻帆良に教員か何かで働けるようにしておくれやす」

「あー、それええですね。ウチも一緒に行きたいです。長く、ウチもお願いします」

「はうっ」

月詠はつゝ、と詠春の竿を撫で上げる。

「ほな、月詠はんの分もお願いします。1人も2人も同じでつしやる」

「だ、だがそれでは月詠君とは離れ離れに……」

「お札さん、お札さん、お願いします。長はロリコンだということを家中の者に……」

その言葉で詠春は折れた。

月詠と千草は泣き崩れる男を置き去りにして去っていく。

「ところで月詠はん、ファザコンだったんですか？」

「違いますよ。長とはお手でだけの関係です。お父様ういうたらえろう喜んでくれるんですよ？ 長もこのかゝ、このかゝ言いいながら顔にかけるのがお好きでしたなあ」

「……」

なんとなく、このかが西になかなか帰ってこず、東に行きつばなしな理由が分かった気がした。

「急に麻帆良に行くなんて、千草さんもアナ先生にハマってもうたんですか？」

「アホ。ウチはお嬢様を陰陽師にするために行くんや」

「なんやう。そうだったんですか。千草さんでしたら、ウチはいつでも歓迎しますよ」

「……まあ、考えておきます」

現在、千草は彼氏がいない。

陰陽師の仕事はストレスが溜まる。

人肌が恋しくなる日もあるのだ。

儀式の間で見たことを思い出し、アナならストレス発散の相手としてはかなり良い。

妊娠の心配もないし、何よりとても気持ち良さそうだ。

暗い感情だけが燻っていた千草だったが、案外悪くないかも、と気持ち少し上向いたのだった。

刹那、このかと一緒に野外エツチしちやう

土曜日の昼はエヴァのために観光をした。

エヴァは大喜びで京都を散策。

途中、記念撮影のデータ送信量が多すぎて超鈴音にストップをかけられた程だ。

刹那はこのかと無事に和解をすることができた。

アナの要望によりプチ露出をされていて、人ごみの中で持ち前の目の良さを無駄に使い、視線が反れた瞬間にスカートをたくし上げてノーパンをカシヤリ。

気分が乗って建物の影でいたしていた所にこのかがやってきた。

「あつ……あつ……アナ先生、すごい……」

「あややく。せつちゃんもお嫁さんか」

「お、お嬢様!？」

バックで貫かれているところをバツチリ見られてしまった。

慌てる刹那にこのかは自分のスカートを捲る。

無毛の割れ目から愛液が滴っていた。

「あれ……?」

水泳の着替えで見た時はうつすらと恥毛があつたはず。

「アナちゃんに剃られてもうた」

「えへへー」

「あんっ、あんっ」

子宮をトントントンされて声が出る。

このかが隣に手をつけて、お尻をくつつけてきた。

膣から引き抜かれたかと思うと、このかが喘ぎ始める。

「ひゃん！ アナちゃんそこ、すごいええ。グリつとされるの気持ちええ」

ズチュズチュと後ろから抱かれるこのかは口を半開きにして喘ぐ。

刹那はこのかの乱れる姿にごくりと唾を飲んだ。

アナはこのかから抜いて、刹那に挿入する。

「あれ、さつきより締まりが……それにおつゆも多くなってるような

「……」

「……」

アナの指摘に刹那は耳まで赤くなった。

ここは誤魔化そうとエツチなお願いをする。

「ア、アナ先生！ 早くエツチな課外授業の続きをして下さい！」

「あ、そうだね。刹那くんは真面目だなー。先生頑張っちゃうぞー」
パンパンパン。

「あうっ、おつきいです！ 先生ので刹那の壊れちゃう！」

「あ、出る！」

「!!」

びゆる、と子宮に熱い白濁液を流し込まれた。

アナは途中でこのかに挿入し、やはり膣の一番奥で射精をする。

「やくん。アナちゃんは欲張りやなあゝ。せつちやんとウチ、同時に妊娠させたいんかえ？」

「お嬢様と一緒に……」

「そうやでせつちやん。ウチらこれで（竿）姉妹やゝ」

「え？ そ、そうなんですか？」

「そうやでゝ。アナちゃんとエツチしたら皆お嫁さんやし、姉妹になるんやでゝ」

「わ、私がお嬢様の妹に……」

そつちの知識にうとい刹那はこのかが言ったせいもあり、鵜呑みにする。

「それじゃあ今度はお姉さんを指導しちやおうかなゝ」

このかの中をかき混ぜ始めるアナ。

「あん。お外でしてるせいやろうか？ なんかいつもより気持ちええわゝ」

「ちよつとパワーアップしたんだ」

「そうなん？ あんっ」

儀式の間で授かった加護のおかげで、このかの気持ちいい場所が手に取るように分かる。

「アナ先生」

「ひゃっ」

突然、アナは耳を甘噛みされた。

驚いてこのかの子宮を突いてしまう。

ぷしや、とこのかは潮を噴いた。

「急にいなくなるから、探したじゃないか。私はほったらかしか？」

ちゅっ、ちゅっ我真名が首筋にキスしてくる。

「ごめんね。真名もおいで」

「ああ」

嬉しそうに真名もパンティを下ろし、壁に手をついた。

そうして3人でパンパンしているうちに、寂しくなったエヴァと

茶々丸もやってきて刹那、このかが見張り役兼壁役になり、エヴァと

真名も野外エッチを楽しんだ。

「マスター。気持ち良いですか？」

エヴァの乳首をさすりながら茶々丸がそんなことを言う。

「あっ、んっ、んああっ……茶々丸、まさか録画してないだろうな？」

「絶賛録画中です」

「バカ者……あんっ」

びゅる、と10歳の無垢な子宮に注ぎ込まれ、絶頂に達するエヴァ。

ピク、ピク、と絶頂の余韻に震えるエヴァの割れ目から、どろりと

白濁液が溢れ出す。

茶々丸はその1部始終を見逃すことなく記録していった。

エヴァに2回、真名に3回注いだら京都散策を再開する。

茶々丸も撮影に協力してくれるようになり、刹那とこのか、真名と

茶々丸の4人でパンツを見せたり、大仏をうっとり眺めているエヴァ

のスカートを手で隠さないように捲りながらピースしたりした。

最後はバレてネジを巻かれまくってしまったが……。

何はともあれ、京都観光を満喫するエヴァ達だった。

アナ、武闘派3人娘に昇天させられる

「ただいまおっばい！」

アナは元気よく明日菜とこのかが住む部屋のドアを開けた。

「あ、おかえりー。京都どうだった？」

明日菜は少女マンガから顔を上げた。

パジャマ姿の明日菜の胸にアナは突撃をかます。

「寂しかった？ 私のこと覚えてる？ え、忘れちゃったの？」

もみもみ、むにむに。

「ぽへ」

「帰ってくるなり何すんのよー！」

明日菜の拳骨が叩き込まれた。

殴られながらもおっばいがゆさゆさ揺れる様子はすっかり目に焼き付ける。

「あ、これお土産の八橋」

「わくありがと〜」

コロツと機嫌を直す明日菜。

「アスナ聞いてやく。ウチせつちゃんも仲直りできたんやで〜」

「え、うそ。良かったじゃない！ おめでどう！」

「ありがと〜」

2人は抱きしめ合う。

アナは邪魔をしないようにそつと外に出た。

お土産の八橋を2-Aの生徒達に配っていく。

まずはエッチをしていない生徒達に配り、のどかの部屋を訪ねた。

「あ、アナ先生こんばんわですー」

「こんばんわ。はい、これお土産」

「わー。ありがと〜ございますー。あれ？ アナ先生？」

お辞儀をして、顔を上げたらアナが消えていた。

アナはというと、しゃがんでのどかのスカートを捲ってパンツを堪能していた。

「きやつ」

ぱつとスカートを押しさえるのどか。

「えへへ。それじゃまた明日ね」

「もー……またお願いしますねー」

赤くなりながら、のどかが小さく手を振る。

今度はあやかあの部屋へ行く。

「あら、アナ先生。まあ、わざわざすみません」

「あやか。こっちは変わったことなかった？」

「特にはありませんですね」

「今回は用事でイケなかつたけど、今度はイケるといいね」

「はい。またお声をかけてください」

あやかはにこ、と微笑む。

2歩下がりに、上着をまくってくれた。

白いブラジャーに包まれた巨乳があらわになる。

「お久しぶりにお口で……いかがですか？ 千鶴さんと夏美さんは大浴場に行っていますので」

「喜んでー」

楓や史伽、風香の部屋に行けば……。

「わざわざすまないでござる」

「わーい！ お菓子だー！」

「アナ先生、ありがとうございます。せつかくですし上がっていつて下さい」

「それじゃあ、お言葉に甘えて」

アナはテーブルに正座をし、出されたお茶に口をつける。

「ぶっ」

「どうしたでござるか？」

「う、ううん。ちよつと変なところに入っただけ」

(にしし)

(あれ、これお姉ちゃんもやってる?)

風香と史伽が足であそこを撫でてきたので、思わずむせてしまった。

お返しにアナは楓の胸に手を伸ばす。

「ニンニン。アナ殿は胸が好きでござるなあ」

「あ、そうだ。私、ちよつとすごくなつたんだよ」

「ほう。と、いうと、どうなつたんでござる？」

「ちよつと四つん這いになってお尻をこっちに向けてくれる？」

「ボクもボクもー！」

「私もお願いします……」

楓の左右に風香と史伽が四つん這いになる。

アナは手で小さな双子の割れ目を、舌で楓を愛撫していく。

「「あん」」

3人同時に喘いだので、結構な音量になってしまった。

「さ、3人とも声は抑えてね？」

「す、すまないでござる」

「お口にチャツクだね」

「……（手で口を押さえている）」

「それじゃ続けるねー」

ぴちやぴちや、くちゆくちゆ……。

「！」

「んっ」

「~~~~~！」

楓のお豆をさするように舐め、風香のきつきつだがおつゆの多い膣の奥まで指を入れる。

史伽は膣のざらざらした所を執拗に責めてやった。

3人は声を必死に抑えながら、ビクビクと震える。

5分もしないうちに風香がぷしや、と潮を噴いてへたりこむ。

続いて史伽も絶頂に達した。

「はあ、はあ……しゆ、しゆごいよアにやしえんしえー」

「ねー……お姉ちゃんとするときより気持ちよかつたかも……」

「かえで姉。ボクらの仇を取って〜」

「く、この体勢では攻められぬでござるよ……ああっ」

ちゆるんと風香と史伽から指を抜いて、楓の膣に入れる。

楓もぷしや、と潮を噴いた。

「どう？　すごかったでしょ……ペロペロ」

なんかおいしそうだったので、アナは史伽の割れ目を舐める。

「確かに。では、拙者も本気を出すでござるか」

ボン、という音がした。

不思議に思っただ顔を上げると、露出の高い忍者服を着た楓が4人立っていた。

股間の部分が丸く切り取られていて、とろとろのあそこが丸見えだった。

「「「今度はこちらから行くでござるよ」」」

「ひいひいひい!」

アナの脳裏に真名と楓を2人同時にした日のことが蘇る。

2人だけでも腰が悲鳴を上げたのに、今度はその倍だ。

死ねる。

「し、失礼しましたー!」

アナは楓達の部屋から逃げ出した。

大急ぎで隣の部屋に駆け込む。

「おや、アナ先生。どうしたんだい?」

「ア、アナ先生……もしかして、昨日の復習でしょうか?」

嬉しそうな真名と、期待した目を向けてくる刹那。

(こ、この2人も結構体力あるんだよねー)

とりあえずお土産を渡してお茶を濁そうと思って、2人とは京都に行っただと気づく。

コン、コン。

「ひっ」

「ん?　誰だろう。アナ先生、開けてやってくれないか」

「気のせいじゃないかな?」

「この気配は……楓?」

刹那が顎に手を当てて予想を言う。

「真名。拙者でござる。アナ殿が来てるでござろう。入れてもらいた
い」

「なんだ、楓か」

「あ、ああ……」

真名はドアを開けてしまう。

まだ千草さんとエッチしてないのに。

アナは今日で干からびる気がした。

「あれ？」

入ってきたのは楓1人だった。

4人じゃない。

「さすがに廊下を分身したままこないでござるよ」

「あー良かった。死ぬかと思ったよ」

「まだまだ足りないでござる。その気にさせた責任とってもらおうでござるよ?」

「分かった。でも分身はやめてね?」

「了解でござる」

ニンニンと楓は微笑む。

あそこ丸出しの服で出歩いたのは彼女にとって問題はないらしい。

カチャ……。

真名はドアの鍵を閉めた。

刹那は服を脱いで裸になり、アナを抱っこしてベッドへ連れて行く。

せつかくなのでゴロゴロ甘えるアナ。

ふあさ、と優しくベッドの上に横たえられる。

「アナ先生。今度実家の巫女服を持ってこよう」

「わ、ありがとう!」

真名も裸になり、近づいてくる。

楓はエッチな忍者服の前を開いて、大きなおっぱいを見えるようにする。

3人の女子生徒がベッドに上がる。

楓と真名の巨乳に顔を埋め、刹那にしゃぶってもらう。

「しあわせ〜」

体力自慢を3人相手にすることになっているのだが、アナは気づいていなかった。

エヴァさん、独占欲を持たれて中出しを許しちゃう

高畑に呼ばれてエヴァは仕方なく屋上へ向かった。

屋上には高畑の他にネギが待っていた。

「わざわざ呼びつけおつて。なんの用だ」

「ひゃ」

「あ、ごめん」

ネギのお尻を撫でた後、背中に手を回す高畑。

「エヴァ。ネギ君に経験を積ませる為に戦ってあげて欲しい」

「何故私なんだ？ 他の魔法使いに頼めばいいだろう」

「それがちよつと揉めてね。エヴァなら適任だということになったんだよ」

「ふん」

大方、英雄の息子に怪我でもさせたらと萎縮したのだろう。

その点、自分ならどうなるうとかまわない。

魔法使い達の考えを容易に見抜いたエヴァは不機嫌になった。

「お願いします！ 僕、父さんに少しでも近づきたいんです！」

「知るか。アナならまだしも、貴様のために手を貸す理由なんぞないわ」

魔力は父親譲りのためか、一般的な魔法使いを大きく超えているのを感じる。

だが、アナはネギのさらに上をいつているので、どうしても見劣りしてしまう。

「そこをなんとか頼むよ、エヴァ。僕じゃ魔法戦の参考になってあげられないんだ」

高畑は生まれつきの体質で詠唱魔法を発動させることができない。戦士としては一流だが、その戦闘スタイルは魔法使いというより気を使う者達の部類に入る。

「ふむ……」

登校地獄の呪いは解除した。

学園側の舐めた態度にも辟易していた頃だ。

ここらへんで1度、自分達がどんな存在を怒らせたか知らしめてやろうか。

エヴァが悪い顔になっていく。

そこへ、アナがやってきた。

「エヴァさんやっぱりここにいたんだ。あれ？ 高畑に兄さん……お邪魔だった？」

やっぱりエッチするのに屋上って人気なんだなーとアナは思った。

「アナ、お前やれ」

「え？ ナニを？」

「魔法戦だ。ネギ、アナに勝ったら私も戦ってやる。経験が積みたいのなら当然アナともやれるはずだな？」

「う……わ、分かりました」

ネギは頷いた。

妹と戦うのは気が引けるが、それよりもこれでエヴァと実戦をさせてもらえるという希望が出たことのほうが大きい。

アナの成績は中の中。

その点、ネギは主席。

楽勝だとネギは思った。

「エヴァさん、私が勝ったら？」

「……この間断った服を着てやる」

「ほんと！ よおし！ 頑張るね！」

ネットで見えた島なんかのコスプレ。

セーラー服にミニスカ・ローライズというもので、恥ずかしいとエヴァに断られたのだ。

勝敗なんてどうでもよく、適当に手を抜こうと思っていたアナは、俄然やる気が出てきた。

ちやうど授業まで時間があるということで、エヴァの別荘で戦うことになった。

城を背景にして、アナとネギが対峙する。

「アナ、手加減はするけど、ちゃんと結界でガードしてね」

「兄さん。悪いけど全力でいくよ」

「アナ、僕の成績忘れてない？」

「はじめ！」

ぐだぐだ会話されてはまるでっこしいとエヴァが開始の合図を出した。

ネギは杖を掲げて詠唱を始める。

アナは両手を握り締める。

「ラス・テル マ・スキル マギステル」

「ビバオツパイ！」

ゴオ、とアナの体から光の柱が立ち上る。

「さらば兄さん！ 光の矢、1億と2千万本!!」

「え!?!」

空中から幾万もの光の筋がネギに向かって降り注ぐ。

咄嗟に風楯（デフレクシオ）で防ぐが、周りに落ちた矢に破壊されて飛び散った石畳の破片が体中に当たる。

「うう……」

矢はまだまだ降ってくる。

風楯は防御力は高い反面、効果時間が短い。

すぐに再発動もできないため、このままだとモロに光の矢の雨にさらされることになる。

拳1発程度の威力とはいえ、何万も喰らえばタダではすまない。

盾が消えた瞬間に、対抗呪文で相殺するしかない。

ネギは現在の自分が使える最大の呪文を唱え始めた。

そして、盾が消えた瞬間に魔法を放つ。

「雷の暴風！」

雷が光の矢を飲み込み、消し飛ばしていく。

晴れ渡った空が見えるようになり、ネギはやった、と喜んだ。

……ザー。

「そんなん!?!」

数秒は途切れたが、再び光の矢が降り始めた。

もう1度呪文を唱えようとするが、ネギは杖を落としてしまう。

慌てて拾うが、もう目の前に光の矢が迫っていた。

「あ……あ……」

呆然とするネギの前に、立ち塞がる者がいた。

「ネギ君。僕の傍から離れちゃダメだよ?」

高畑が無音拳で光の矢を片っ端から打ち落としていく。

「タカミチ……すごい……」

「はっはっは!」

ネギにいい所を見せたくて、高畑はとても張り切っていた。

一方、アナはのんびり2人の様子を見守っていた。

膝にはエヴァを抱っこして、少女特有の柔らかさを堪能している。

「アナ。お前杖なしで魔法を使っていたが、指輪か何か別の発動体でも持っているのか?」

矢の数は持ち前の魔力でゴリ押ししたと想像がついたので、エヴァは疑問に思ったことを聞いてみた。

「アナはエヴァのお尻におちんちんを当ててぐりぐりする。」

「私のコレ、魔法発動体でもあるんだよね」

「無駄に高性能だな……」

「ケケケ、オモシレエ奴ダナ」

エヴァの頭に乗っているチャチャゼロがケタケタと笑う。

「アナはひよいとチャチャゼロを持ち上げ、スカートを捲った。」

「あ、ちゃんとパンティ履いてる。脱がしていい?」

「オイ止メロ! ご主人! 見テナイデ止メテクレ!」

「別に感じないだろ?」

「アナはパンティの上からさすってみた。」

意外なことに、お尻が弱点らしい。

手で包み込むように揉むとチャチャゼロがびくんびくんし始める。

「アツ、アツ、ナ、ナンダコレ?」

「まてまて。まさか本当に感じているのか?」

「ねえエヴァさん……エッチしょ?」

「アナははむ、とエヴァの耳たぶを啜える。」

「あ、ばか……耳を甘噛みするんじゃない。後でしてやるから今は我慢しろ」

「はい。それじゃあチャチャゼロ、後でしようね」
「マジカヨ」

エヴァの頭に戻されたチャチャゼロは、人形相手でもエロエロしようとするアナに戦慄した。

光の矢をしのぎ切った高畑達が近づいてきた。

途中からほとんど高畑任せだったネギの顔色は暗い。

「エヴァ、あれは無理だよ。この年で雷の暴風を使えただけでも上出来てことで合格にしてもらえないかな？」

「ダメだな。あの程度で音を上げるようでは私と戦っても得る物は無いだろう。鍛えてから出直して来い」

「そう、か。ごめんよネギ君。今回は諦めよう」

「……ねえタカミチ。さっきの技、僕にもできるかな？」

キラキラした瞳でネギが高畑を見つめている。

高畑は満面の笑みで頷いた。

「もちろん、できるようになるとも！」

やればデキる。

アナはの頭にそんなフレーズが浮かんだ。

「ねえエヴァさん。また兄さんと戦わないといけないの？」

「ん？ ……まあ、そうだな。あの矢の雨をクリアできたら戦ってやるつもりだ。アナは魔法を打つだけでいいぞ」

「あ、そう？」

高畑に入れ知恵されて、魔法ではなく殴りあいをしかけられる可能性は消えた。

だが、高畑がそれに異を唱えた。

ネギと2人きりで修行する時間を増やすためだ。

「強制はできないけれど、この先アナ君も自衛手段はあった方がいい。それにネギ君も競う相手がいた方が張り合いがでるはずだ。アナ君は……そうだね。古菲君に習うのはどうだろう？」

「ふむ……まあ、いいんじゃないか？ それじゃあアナに勝つまで私は坊やと戦わない。これでいいな？」

「ああ。それじゃあネギ君。さっそくやろうか」

「うんっ」

高畑とネギは城から離れていった。

「それじゃあエヴァさん。さっそくやろうか」

「オイマテ、オレモカ」

チャチャゼロを小脇に抱え、アナはエヴァの手を握って城へ向かった。

「……」

ベッドの枕には白濁液でべっとりとしたチャチャゼロが転がっている。

「ほれほれ、これがいいのか？ 変態め」

「あうー」

ノーパンに白いパジャマの上着だけを着了たエヴァが、むにむにとアナのおちんちんを踏んでいる。

つるつるの割れ目が丸見えで絶景だった。

「お嬢様ー、やめてくださいー」

「ふん、ここは嬉しそうだがな？」

「ふあゝ、気持ちいいゝ」

「おい。お前ばかりずるいぞ」

「ああ、そつか。エヴァさんは踏むだけだもんね。お嬢様と執事プレイは止めようか」

エヴァはベッドを下りて衣装棚を開く。

ゴスロリが目立つが、幼稚園児が着る服、麻帆良初等部の制服、バニースーツなど、アナがネットで注文したものもある。

「あ、そうだ。エヴァさん上も脱いで」

「ん？ どうするんだ」

エヴァは裸になった。

そのまま後ろから挿入される。

「ベランダに行こうー」

「なに？ あっ、ばかつ、そこは弱いから……あんっ」

よちよちと2人は繋がったままベランダに出る。

全裸で開放的なセックス、と考えていたが、高畑達の姿が見えた。このまま出るとバレそうなので、アナは少し下がってエヴァの体をカーテンで隠す。

エヴァはお尻を突き出し、顔だけ外に出す格好になった。

「あつあつ……おい、このまま続けるのか？」

「おーい！ にいさーん！」

「おい?!」

アナもカーテンから顔だけ出して、修行をしているネギに声をかけた。

遠くにいるネギがこちらを振り向き、手を振ってくる。

「えへへー。かわいいエヴァさんを兄さんに自慢しちゃうんだー」

「あつあつ」

じゅぷじゅぷとおちんちんを抜き差しするアナ。

京都で覚えた技を使い、エヴァの感じる場所をこれでもかところすり上げる。

「あん！ やつ、イク、イク」

「よいしょ」

さっとカーテンを閉めて、アナはエヴァを部屋の中に引っ込めた。ベッドで正常位になってギシギシする。

「あんつ、あつ……ど、どうした。見せびらかすんじゃないのか？」

「はあ、はあ……エヴァさんのエッチな顔、私だけのものにしたくなっちゃった」

エヴァの膣がきゅつと締まった。

無意識だが、誰かに好かれることを心のどこかでまだ望んでいたエヴァの体が反応したのだ。

アナは激しく腰を動かし始めた。

「あつあつあつ」

「イクよエヴァさん。いっぱい出すよ」

「う、うああー！」

ぎゅうう、とアナを抱きしめるエヴァ。

膣がぎゅうぎゅうと収縮し、ぷしや、と潮を噴いた。
遅れてびゆる、びゆる、とアナのおちんちんが跳ねる。

「はあ、はあ……あたたい……」

ベッドに折り重なるエヴァとアナ。

エヴァは子宮に広がる温かさに、小さな絶頂の波を感じ続けた。

アキラさん、アナを優しく寝かしつける

放課後、アナはプールに見学に来ていた。

「おー」

おっぱい、お尻、太もも。

そこはまさに天国だった。

「アナちゃん。ずいぶん熱心だね」

水を滴らせながら、大河内アキラがやってきた。

「おっぱい、いや、アキラ。良い飛び込みだったよ。もう1回みたいで
す」

「ふふ。ありがとう。アナちゃんも良かったら泳がない？ 水着なら
予備があるから」

「え？ いやー、そうしたいのは山々なんだけど……」

潜水しながら、水の中の彼女達を是非拝みたい。

ただ、股間のソレがスクール水着では隠し切れないので、泣く泣く
諦めている。

「……」

「ん？ どうしたの？」

アナはアキラをじつと見る。

大きなおっぱい……はこの際置いておいて、このかに負けず劣らず
包み込むような優しさを感じる。

もし最初に出会ったのがアキラだったら、アナは迷わずお願いして
ただろう。

「えっとね、ちよつと来てくれる？」

「……？」

アナはアキラの手を引いて更衣室へ行った。

「えっとね、言いふらさないで欲しいんだけど」

「大丈夫。絶対言わない」

アキラはアナを安心させようと、優しく頭を撫でてくれた。

アナはこっちもナデナデして欲しいのでアキラの手を股間に持つ
ていく。

「え……」

アキラは温かいソレの形を確かめるようにあちこち揉む。

「おちん……ちん？」

「あ、女だよ。お豆だけこうなの」

アナはズボンとパンツを下ろして証拠を見せる。

「わ……本当だ」

アキラはつんつんと割れ目をつつく。

「ひゃん」

「あ、ごめんね。痛かった？」

「ううん。驚いただけ。こうすると気持ちいいの」

「うん」

アキラに竿を握らせて、上下に動かす。

「それでね、先っぽをぱくって啜えてくれる？」

「うん……あー」

あむ、といきそうになったところで、アキラは止まった。

「これってフェラ、だよな」

「うん」

アキラは真っ赤になる。

「えつと、ご、ごめんね。ちよつと怖い、かな」

水泳と同じだよ。飛び込んだら意外とあつという間に慣れる慣れる、とか言いたかったが、ぐつと堪える。

アナはおちんちんを仕舞った。

「アキラ」

「なに？」

「ちよつと甘えてもいいーい？」

「うん。いいよ。あ、ちよつと待ってて。着替えて来るから」

「はい」

アキラは制服を取ってくるとアナの前で着替え始めた。

水泳部で同じ女性の前で着替えるのは慣れていないため、恥じらいはないが、その分隠したりしないのでとても眼福だった。

制服に着替えると、アキラはアナを抱き寄せる。

ほんほんとあやすように背中を叩いてやった。

「きもちー」

「ふふ。ここじゃ立ちっぱなしだし、私の部屋に行く?」

「部活はいいの?」

「うん。ちよつと調子が出なかったから、今日は体を休めて柔軟くらいにしておくつもり」

キャプテンに断ってから、2人はアキラの部屋に行く。

ベッドに腰掛けたアキラの上に、アナはコアラのように抱きついて甘えた。

「アキラ、あったかい」

「アナちゃん、10歳なのに先生やってて、大変じゃない?」

「大変ー」

「だよね。少し寝てもいいよ」

「ありがとう」

髪を優しく撫でられる。

アナを目を閉じてされるがままにした。

やがてうとうととしていき、ふわふわした何ともいえない心地よさのまま眠りについた。

朝倉さん、お風呂でぬぶぬぶされる

「む、これは……」

アナは今、学園の見回りをしていた。

目の前には誰にも見えなさそうな深い茂みがある。

「これは是非このかや真名とするエッチスポットに使えるか調査しないかね」

「周りには誰もいませんー」

ふわふわと漂っているさよがそう答えた。

「アナはスカートを捲り、今日のパンツを確かめる。」

「ほう。今日は水玉ですか」

「えへへー。お気に入りです」

さよは最近、おしゃれをするようになってきた。

服はまだ透明にできないが、パンティだけでもとアナが激選した物を履いている。

2人は茂みに入った。

ズボンからおちんちんを取り出すと、さよが嬉しそうにしゃぶりついてくる。

「ちゅぱちゅぱ、じゅる、じゅる……れろー」

「はうう」

根元から先っぽまで舐められると、ピクンとおちんちんが跳ねる。

さよの柔らかいほっぺにペタッと当たった。

「ウチも混ぜておくれやす〜」

「えっ」

さよが驚いた。

無理もない。

茂みに入ってきたのは京都にいるはずの月詠だったのだから。

しかも麻帆良中学校の制服まで着ている。

「全然気づきませんでした……」

「なんや窓から見えたんで飛び降りてきたんです〜」

月詠は3階を指差す。

さすがにそこまではさよも気が回らなかった。

「あー。それじゃあ、ここは丸見えなんだね」

アナが残念そうにモノをズボンに仕舞う。

「ウチは見られながらも……♪」

「他の人ともできる場所を探してるんだ。月詠は知らない？」

「初心な男の子に刻まれるウチの淫らな姿。これもまた興奮できるんですけどねー。探して見ますけど、さつき来たばかりなんでちよつとー」

「そういえば、どうしてこっちにいるの？」

「千草さんと一緒にこっちで暮らすことにしたんです。ウチは転校生。千草さんは寮母ですよー」

「やった！ ようこそ麻帆良へ！」

アナは月詠に抱きついた。

月詠は抱き返しながら、とろんと蕩けた顔でアナの耳を甘噛みする。

「いっぱい可愛がっておくれやす〜」

「もちろん！ それじゃ、さつそく寮母……これじゃ他人行儀すぎるよね。お母さんに会いに行こう」

「あー。なんや引継ぎ？ 仕事の説明とかで今日は忙しいみたいですよー」

「えー」

「アナ先生。おっぱいは逃げませんよー」

さよはかなりアナに毒されてきたようだ。

「こらー！ 月詠はん、戻ってこんかい！」

「あー、バレてましたか。上手く気配を殺したつもりやったんですけどねー」

学園の案内の途中だったが、抜け出してきたのだそうさ。

「ほな、またお願いしますね。幽霊さんもよろしう」

「え!？」

月詠はビュンと飛び上がり、姿を消した。

「良かったねさよ。月詠にも見えてるみたいだよ」

「はいー」

さよはにこつと微笑んだ。

せつかく使えると思つた場所は使えなさそうなので、アナは巡回を再開する。

しばらくすると、朝倉和美が近づいてきた。

首には一眼レフを、手には録音機を持っている。

「こんにちはアナちゃん。今いいかな」

「うん。どうかしたの？」

「この間の休みに京都に行つたよね。あ、お土産ありがと。八橋おいしかったよ」

「どういたしまして。京都に行つたけど、それがどうしたの？」

「さつき新しい寮母さんになる人の情報をキャッチしてねー。取材中なのよ。時期的に考えるとアナちゃん達が行く前から採用は決まつた気がするけど、念のためね」

確か朝倉は新聞記者になるのが夢だったはず。

アナは生徒の夢に協力できるなら、と取材に応じることにした。

「あ、その前にこの辺で誰にも見られないような場所とかない？」

「まっかせてよー!」

マル秘情報か？

朝倉は張り切つてアナを女性教員用の寮へ案内する。

管理人のおばちゃんが出迎えてくれた。

「こんにちはおばさん」

「和美ちゃんかい。また噂話を聞きに来たのかい？」

「今日はお風呂入りにきました。得ダネが入ったら一番に教えますよ」

朝倉はちらりとアナを見る。

ほほう、とおばちゃんは何かを察し、鍵と「掃除中」の看板を渡した。

「ごゆっくり」

掃除中の看板をかけ、鍵も締めて2人は大浴場に入る。

朝倉の大きなおっぱいはぶかぶかと湯船に浮いていて、とても魅力

的だった。

アナは吸い寄せられるように胸の谷間に顔を埋め、もみもみしながら顔におっぱいを押し付ける。

「あ、アナちゃん？」

「なあにおっぱい」

「ちよ、私は朝倉だって」

朝倉は苦笑いをする。

「悪戯する悪いこはこーだぞー？」

クリトリスを摘んで驚かせてやろうとアナが巻いたタオルの下に手を伸ばす。

グニ、と太いソーセージがあった。

「……」

ちんちん。

朝倉の頭にそんな言葉が浮かんだ。

呆けている間にも、手の中でムクムクと大きくなっていく。

「ア、アナちゃん男の子だったの？」

「お姉ちゃん、おちんちん痛いよー。ぼく病気なのかなー」

「あ、これは演技ね。ふたなりってやつ？」

「……お、お姉ちゃん。おちんちん痛いのー」

お姉さんが治してあげるといふ流れを期待したアナは頑張ってみるが、反応は良くなかった。

朝倉はアナを立てさせてタオルを取ると、しげしげと色々な角度から観察する。

「なるほど。クリがおちんちんな訳ね。たまたまはナシ。これは興味深いわ」

「あ、あのね？。このことは秘密に……」

そういえば新聞記者志望だったと思い出し、アナは慌ててそう言った。

スツパ抜かれたらこの先まだ見ぬおっぱい、割れ目さん達にいらぬ警戒をさしてしまう。

朝倉は親指をグツと立てた。

「安心して。私は真のジャーナリストを目指してるから！」
「ありがとー」

アナは朝倉のおっぱいを寄せて、ちんちんを挟んだ。
ぐにぐにと上下に揺する。

「はあ……すばらしい感触」

「アナちゃんはエロいけどやらしくないね」

言い寄る男子を思い出しながら朝倉はそんなことを言う。

「やらしい……あ、私ばっかごめんね」

アナは朝倉に抱きつきながら、割れ目を触る。

まずはクリトリスを皮の上からさすり、プニプニした割れ目全体を揺すって刺激する。

「ん……」

ぴくんと朝倉は快感に震える。

顔に朱がさし、あそこがぬるぬるしてきたら指を入れた。

入り口、少し奥、左側の膣壁。

指を蠢かすと朝倉はアナの手をぎゅっと握り締めてくる。

「やつ、うそ……あつ、そこ」

「今なら無痛で気持ちいいセックスが付いてきますが、いかがでしょうか」

もう片方の手でおちんちんを握らせ、上下にしごかせる。

「あんつ、で、でも……最初は好きな人になりたいし……」

「真実はすぐそこだよ。あ、私京都で秘術受けてるからすごいよ」

「え？ 秘術？」

京都の秘術と聞いて朝倉の好奇心が疼く。

「い、痛くしない？」

「もちろん。もう……」

もう何人も気持ち良い処女喪失を体験してると言いかける。

「それはそれは気持ちいいと評判ですよ」

あまり誤魔化せていなかったが、アナはそういうのが精一杯だった。

「あ！ そうだ、先つちよだけ入れて、膜までしないってのは？」

「んー。それならまあ、いいかな？」

アナは女の子だし、指を入れるのと変わらないだろうと朝倉は考える。

「わーい！」

アナはさっそく朝倉を立たせて、おまんこを先っぽでぐちゅぐちゅ擦り始めた。

「じゃあ、ちよつとだけ入れるね？」

「う、うん」

にゅぷ、と龟头半分だけ入る。

そのまま龟头だけ抜いたり入れたりを繰り返す。

「どう？・痛くない？」

「う、うん」

「あ、出る」

「へ？！」

びゅる！

膣内に熱いものが注がれた。

とろりと溢れる白い液体に朝倉は焦る。

「あ、これはま……ま……精子ゼロだから安心して。ほら」

アナは白濁液をすくって朝倉の口に突っ込んだ。

美味しい。

「苦いんだっけ」

「らしいねー」

アナは興味がなかったのもまた挿入を始める。

今度は膜の手前まで、龟头、竿を少し膣内に沈める。

きゅつ、きゅつと締め付けてきて心地いい。

上側をこすってやると朝倉の乳首がピンと尖った。

「ひゃあああ!?!」

「おおー」

ただでさえ大きなおっぱいが上を向いて、より大きく見えるようになった。

あそこにぶしゃ、と朝倉の潮がかかるが、アナはしばらくおっぱい

に見惚れる。

ずちゆずちゆとアナは亀頭で弱点をこすりながら、揺れるおっぱいを眺め続けた。

「和美、顔真っ赤だけどのぼせてる？」

「はあ、はあ……もう、らめえ……」

アナは朝倉に肩を貸しながらお風呂から出る。

ぬるめのシャワーで身体を流し、パイズリで1回射精させてもらってから2人は服を着て寮から出た。

「あ、取材……」

「べ、ベッドで続きとかっ」

キラキラした目で見てくるアナに、朝倉は苦笑しながら頭をクシヤクシヤと撫でた。

千草さん、バッグでいたしちやう

「はあ……ああ……」

寮母室で、千草は裸でアナに後ろから貫かれていた。

アナに合わせて四つん這いになっているので、突かれる度に大きな胸がゆさゆさと揺れる。

「あん、あつ、はあん……アナはん、ええです。もつと突いてくださいまし」

「お母さん、お母さんっ」

「もう出そうなんですか？ 全部受け止めてあげます。好きなだけ出してええんですよ」

びゆる、びゆるるるっ。

「ああ、熱いのがウチの奥に来てはります……」

ぷしや、と千草も潮を噴いた。

ぷしや、ぷしや、と何度も噴いたので、床がすごいことになる。

ブウン……。

その、千草の愛液の池からフェイトが現れた。

「お母さん、もう1回していい？ ボク、まだおちんちんが痛いよー」

「ええですよ。お母さんでいっぱい気持ち良くなっておくれやす」

「お母さん！」

「あつ、あつ、あつ……」

「……」

再び愛し合い始める千草とアナ。

2人は後ろにいるフェイトに気づいていない。

フェイトはアナの肩にぽんと手を置いた。

「ん？」

「あん、あん、すごいです、あつ、そ、そこダメ！ ああ！」

振り向いても腰の動きは止めないアナ。

「ちよつといいかい。千草さんに用があるんだ」

「この状況ですごい冷静だね。千草さんの式神かな……千草さん、式神が来たよ」

「え？ ……つて、フエイトはんやないか！ なんであんさんがここに?!」

千草は着物を手繰り寄せて体を隠す。

アナはそつと後ろに回って、ズブリと挿入した。

「あんつ」

「近衛このかの修学旅行先が決まったよ。京都だそうだ」

「ん、あつ、あつ、そ、そ、そ、うどすか」

「近衛近右衛門は関西に友好の新書をまだ見習いの魔法使いに持たせたそうだよ。舐められたものだね」

「……ほう」

「あ、それ違うよ」

「え？」

フエイトはアナを見た。

「タカミチが本物持つてるんだつて。兄さんには良い経験になるからそう言ったけど、本物はタカミチが渡すことになってるんだよ。兄さん、別に関東魔術協会の人間じゃないしね」

「なんや、それならウチがどうこう言うことやないですなく。友好を結ぶんは長達幹部が決めることや。ウチはお嬢様を立派な陰陽師にできればそれでええです」

「……高畑・T・タカミチが京都に来るのかい？ 彼はNPOの活動をする事になってるんだけど」

「さあ。私はそこらへんはちよつと。でも兄さんも京都に行くから、あのガチホモなら絶対付いてくると思うけど」

「……なるほど」

フエイトは苦い表情をする。

魔法大戦時代から今まで、何かにつけて口説かれてきた。

あんまりにもひどいので、子供の姿になったのだが効果はなく、むしろ逆効果だった。

なので、今はネギにご執心だということも領けるものがあった。

「念のため、小太郎くんにも声をかけるか……」

もしもの時のための身代わり。

フエイトは愛液の中に沈みこみ、転移した。

「裸の千草さんを見ても顔色ひとつ変えなかったけど、あの男の子もガチホモなのかな?」

「どうでつしやろう」

「まあいいか。おかーさん。続きしよっ」

「あんっ」

じゅぶじゅぶ、ぐちゅぐちゅとアナは千草の膣内をかき混ぜる。

就寝の時間がくるまで、2人はたつぷりと楽しんだ。

服を着て、アナはこのか達の部屋に戻るため玄関に立つ。

「お母さん。また来てもいい?」

ぎゅつと千草にしがみつく。

千草は頭を撫でた。

「ええですよ。月詠はんともども、可愛がつておくれやす」

「うんっ」

ぎゅーつと強く抱きしめてから、アナは寮母室を後にした。

「あ、アスナも先つちよだけなら入れさせてもらえるかも」

朝倉のように、処女膜さえ破らなければOKなのは。

アナはルンルンとスキップしながらこのか達の部屋に戻っていった。

のどあす、おちんちんを膣に入れる

『んあああつ』

モニターの中で、エヴァが海老反りになってピーンと突っ張った。ぷしや、と潮を嘔き、どさりとベッドに倒れる。

遅れて、アナとの結合部からトロ……と白い液体が流れ出てきた。

『エヴァさん。くちゆくちゆしていい?』

『はあ、はあ……少し、休ませてくれ……あつ、あつ、あつ』

エヴァの細い腰を掴んで、アナが小刻みに動き始めた。

ピタリと止まり頬にキスをする。

『まだまだ大丈夫そうだけど、どう?』

『……今日のはのんびりしよう。そんな気分だ』

『はーい』

2人は抱き合い、おしゃべりを始める。

時折アナがふざけて腰を振り、エヴァが可愛い声を上げる。

「はあはあ」

くちゆくちゆ……。

ヴァーチャルリアリティー用のヘッドギアを装着した葉加瀬が、手で割れ目をこすってオナニーをしていた。

顔を赤くし、体も桜色に染まっている。

「……」

その様子を、茶々丸は扉の影からそつと見守（録画）っていた。

「葉加瀬、エッチな玩具でも作ろうか?」

「はひゃい?!」

茶々丸の後ろからひよいと顔を出した超鈴音が、大きなファイルの手に葉加瀬に近づいていく。

葉加瀬はさつとパンツを履き、スカートを戻した。

「気にしなくていいヨ。私の時代ではルームメイトと百合百合するのは割とあることだから」

「は、はあ……」

「フフ。そつちの世界も教えようか?」

っー、と葉加瀬の顎をなで上げる超。

「え、遠慮しておきますー!」

「それは残念。さて、次回の修学旅行ダガ、ネギ坊主にとって初めての大きな実戦となる。迷彩ロボの調整はどの程度だったカナ?」

「アナ先生は戦わないんですか?」

「……彼女は相変わらずダタと聞いているヨ」

「そ、そうですね。えっと、迷彩機能搭載小型ヘリコプターですね」

葉加瀬はカタカタとパソコンのキーボードを打ち始めた。

1人エッチで色っぽかった顔から仕事人のそれへと変わる。

今日はここまでかな、と茶々丸は研究室を後にした。

放課後、のどか達の部屋でアナは住民の3人に見られながら明日菜と繋がっていた。

制服は着せたまま、前だけはだけさせておっぱいを見えるようにし、パンティを右足首に絡ませている。

アナは先っぽだけアスナの膣内に入れてくちゆくちゆしていた。

「あん、あつ、アナちゃん、そこだめ、あつ、あつ」

「うわー、アスナえろ……」

スケッチブックにペンを走らせながら食い入るように2人を見つめるバル。

「ゆえゆえー。すごく気持ち良さそうだねー」

「んっ、んっ。の、のどか。興味があるのですか?」

「ちよつと〜」

のどかに後ろから抱っこされながら、ツルツルの割れ目を弄られている夕映。

「うあつ」

「あんっ」

びゆる、びゆるるる!

明日菜の膣内に大量の白濁液が注がれる。

気持ち良い場所をピシヤピシヤ刺激されて、アスナの乳首がピーンと尖った。

足をアナの腰に絡め、もつと奥に挿入してと本能がアナのペニスを求める。

だがしかし、明日菜はぺち、とパルにオデコを叩かれた。

「アスナ〜、高畑センセとするんでしょ？」

「あ、そうだった。なんか気持ちよくてついね」

「私はいつでもOKだよ！」

「はいはい。私はいいから、本屋ちゃんする？ 上の方をクリクリされるのもいいものよ？」

「ちよつと怖いですけどー……やってみたいですー」

明日菜と場所を交代して、のどかがコロンと横になる。

両足を持ち上げてアナが肩に乗せやすいようにする。

すでにトロトロに濡れた割れ目がこんにちはした。

アナはおちんちんの先っぽを膣口に添えると、くぶくぶとゆっくり挿入していった。

「どう？ 大丈夫そう、のどか？」

「はいー」

「ちよつとキツそうかな。夕映、手を握ってあげて。ハルナはおっぱい」

「りよ、了解なのです。のどか、ひっひ、ふーですよ」

「ゆえゆえー。それなんか違う気がー」

「アナちゃん。さり気なかったけど自分が見ただけよね。い、いいけど」

真つ赤になりながらハルナは制服の前をはだける。

ぶるんと大きなおっぱいが飛び出した。

「おっぱい、おっぱい。あた」

「だーれがおっぱいよ」

明日菜はツツコミを入れながらも、ハルナの反対側から胸をアナの顔に押し付けてやる。

「はあく。極楽〜」

びゆる。

「あつたかいですー」

少しお汗が漏れ出て、のどかの膣を潤した。
にゅぷぷ、とおちんちんがさらに奥へ入っていく。
膜が破れるのではと心配した夕映が竿をぎゅつと挿んだ。

「あうっ」

びゅるっ。

「きゃ」

子宮口に熱い液体がピシヤピシヤと当たる。

「夕映、そのままさすってー。あ、アスナ達はおまんこ弄るね」

「あんっ」

「や、私は遠慮、んあっ」

2人の割れ目に指を滑り込ませる。

のどかのおまんこの入り口をグチユグチユかき混ぜながら、アナは夕飯まで気持ちの良い時間を過ごした。

しずな先生と夜の授業

深夜。

月が雲に隠れた静かな夜。

アナはひとり、パチリと目を覚ました。

世界樹の発光のようにボウ……と瞳が淡く輝いている。

「にく……うま……」

むくりと起き上がると、隣で寝ている明日菜のパジャマをはだけさせる。

大きく丸いおっぱいがまろび出て、アナは満足するまで揉みまくる。

乳首がツンと固くなると、片方は口に含み、もう片方は指先でクリクリと摘む。

チュパチュパ……れろれろ……。

おっぱいを舐め、腰を揺する。

パジャマ越しに明日菜のお腹、子宮の辺りをグイグイ擦り上げる。

いつまでたっても膣に挿入できないことに不思議そうな顔をするアナ。

アナは下で寝ているこのかにも同じことをするが、やはり挿入できない。

「びば……おっぱい……」

アナはフラフラと部屋を出て行く。

後には胸を丸出しにされた明日菜とこのかが残された。

「……う？」

源しずなは体に違和感を覚えて目を覚ました。

体が重い。

もしや金縛りか。

「おっぱい……チュパチュパ……うまうま……チュパチュパ」

「アナちゃん?!」

見知った少女に夜這いされるといふ事態にしずなは混乱する。

だが、学園結界の効果により「魔法使いだしこういうこともあるか」とすんなり受け入れてしまう。

いきり勃ったモノに触れると、アナはもどかしそうに腰を激しくする。

「そう、辛いよね」

見るからに正気を失っているアナ。

しずなは最後までではできないが、手でしてあげることにした。

ズボンを脱がせ、両手でシユツシユと優しく扱く。

「大きい……」

鈴口から我慢汁が垂れて竿を伝い、しずなの細い指に絡まる。

クチュクチュ、クチュクチュ……。

「おっぱいー。おっぱいー」

「あらあら。まるで赤ちゃんね」

ブルン、としずなはその大きな胸を揺らしながらアナの巨根を挟んだ。

ぐちゅぐちゅと音を立てながら動かしてやると、アナが気持ち良さそうなため息をつく。

そして、もつと気持ちよくしてと言わんばかりにしずなの頭を亀頭に引き寄せた。

「んぶ！ん、ア、アナちゃ、んぶ……れるろ、じゆる、ちゅっちゅ」

始めは抵抗したしずなだったが、仕方ないかと諦めて早く射精させようと気持ちを切り替える。

胸を動かしながら亀頭を舐め続ける。

無理やりされているが、真面目な性格のためか奉仕にも熱が入っていた。

ビュル！ビュルルルツ！

程なくして、口一杯に甘い液体が広がった。

意外なおいしさに、思わず飲んでしまうしずな。

「あれ？」

「ぶは……正気に戻った、アナちゃん？」

「しずな先生？……！……うー、あー」

まだラリった振りをして、アナはしずなのおっぱいに顔を埋めた。ついでとばかりに割れ目に手を伸ばす。

「あ、ダメ……あん♪」

クリトリスをこねまわし、割れ目にそって指を上下にさする。あつという間にしずなの下の口は濡れ濡れになってしまった。

アナは片手でズボンと下着を脱ぎ、巨根をしずなに握らせる。

「痛いよー。エッチしないと戻らないよー」

「あんっ、もう正気になってる、んっ、でしょ……んんっ」

「……ダメ？」

「……もう。1回だけよ？」

「わーいー！」

いそいそとしずなの服を脱がせていくアナ。

(はあ、全然振り向いてくれないあなたがいけないんですからね、高畑先生)

火照る体をアナに開く。

すぐさま熱いモノが差し込まれるかと思いきや、アナは亀頭で秘肉をぐにゅぐにゅと擦り始めた。

膣口、クリトリスを何度も往復させられる。

しずなはピク、ピク、と挿入を待ちながら震えた。

じゅわり……じゅわり……。

しずなの膣から愛液がにじみ出る。

亀頭全体にまんべんなく愛液がまぶされたのを確認し、アナはゆつくりと挿入していった。

「ひゃん……ええ？ あ、うそ……やあああつ」

まだ亀頭しか入っていないというのに、しずなは海老反りになって絶頂を迎える。

「はあ……はあ……こんなに早くイッたの、初めて……」

呼吸と一緒に、大きなおっぱいが上下に揺れる。

「しずな先生はここが好きみたいだね」

「初めてなのに分かるの？」

「うん。あとはこんなところとかかなー」

「ああんっ」

腰を回転させながらアナの巨根が膣をかきわけていく。

しずなはシーツを握り締めながら軽い絶頂を感じた。

(こ、これも初めて……)

アナが言っていたのはこれか。

そう思った瞬間、ちゆ、とお腹の奥を押し上げられた気がした。

「~~~~~」

次の瞬間、激しい快感が膣を、子宮を、全身を襲う。

「正解は子宮口でしたー。えいえいえい」

どちゆ、どちゆ、どちゆ！

「!!」

膣がぎゆうぎゆうと何度もきつく締まる。

激しく痙攣しながら、しずなはぷしや、と潮を吹いた。

ビュル！ ビュルルル！

(ああああああ！)

声にならない叫びを上げながら、子宮に流れ込む熱い感触に再び絶頂する。

「はあっ、はあっ、はあっ……」

息も絶え絶えのしずなの上にアナはぽふつと覆いかぶさった。

おっぱいを顔にムニユ、と寄せたり揉んだりする。

「しずな先生ってすごく敏感なんですね。ちよっと休憩しましたよっか」

「そ、そうしてもらえると、ありがたいわ」

「休んだら次は後ろからしたいー」

「げ、元気ね……」

魔法使いのセックスとは皆これほど凄いのだろうか。

休憩後、バックでパンパンと突かれながらしずなはふとそんなことを考えるのだった。

さよ ミルクタンクになる

超鈴音はパソコンのモニターを真剣に見つめていた。

世界樹の魔力が未来から持って来た資料と比べてこの時期あるべき濃度よりも5%低い。

誤差と言ってしまうばそれまで。

だが、世界樹の魔力は計画の根幹に関わる。

今はこの程度で収まっているが、10%、20%となっていくかもしれない。

「原因は何かナ？ 魔法先生達の魔法の使いすぎ？ いや、しかし、だが……」

アナが修学旅行より早く京都へ行った。

修学旅行での騒動の主犯が寮母になった。

儀式魔法が学園で行われた？

否、それならば魔力の高まりを感知しているはず。

超はアナの影響を破棄する。

「絶対、成功させてみせるネ」

考えられることをリストアップしていき、細かく計算していく。

夜遅くまで彼女の作業は続くのだった。

じゅぽ、じゅぽ、じゅずずず。

学校の女子トイレの一室で、アナはさよにフェラチオしてもらっていた。

喉で竿を包み込み、根元まで飲み込む。

霊体ならではの荒業だ。

ビュルル！

胃に直接精液を放つアナ。

その間もさよは舌を這わせながら頭を前後させて擬似セックスのようにフェラチオをする。

「アナ先生（ふえんふえい）、いつふあいりましたれ……ん……ぷはあ。お腹がアナ先生のでちやぶちやぶです」

さよは竿を根元からゆっくりと扱いてまだ残っている精液を搾り出す。

「はむ、ちゆるるー、ちゆう、ちゆうー」

イツたばかりで敏感になった亀頭を柔らかい唇がぶに、と当たる。アナはビクビクしながらさよのお掃除フェラに身を任せた。

それが終わると、さよのスカートをめくってパンツに手をかける。

「まだ出来るんですか？ 昨日からもう10回以上してますよー」

「いやあ。最近なんか魔力の溜まりが早くって。今年是世界樹の魔力が高まる年なんだとかで、それが原因じゃないかってエヴァさんは言うんだけど。せつかくだからさよに射精して霊格を上げる糧にしようかなと」

「そうだったんですか……ありがとうございますー！」

ピカーと光るさよ。

光が収まると、そこにはブルマ姿のさよが立っていた。

これは霊格が上がって出来るようになったことのひとつだ。

割れ目のところだけ丸く切り取られているのがマニアックだった。

アナはさよの足を持ち上げ、立ったままズブリと挿入する。

「あん、あ……アナ先生の熱くておっきいのが私の子宮にコツコツ当たってますー。ああん♪」

パンパンとトイレに乾いた音が響く。

さよが潮を吹いて絶頂するのに合わせて、アナは一番奥で射精した。

ビュル！ ビュル！ ビュルルルル！

「ああああんー！」

さよはアナに抱きついて子宮に流れ込んでくる熱い精液の感触に身悶える。

「はあ、はあ……アナ先生まだ固いですね……」

「うんー！」

ずちゅん！

「あん♪」

再び動き始めるアナ。

さよはお腹がぽっこりと膨らむまで精液を注ぎ込まれるのだった。

「んがあ！・ 何故また減ってるネ！」

超鈴音は叫んだ。

一通り作業を終えてみたら、誤差が5・2%になっていたのだ。
目にクマを作りながら、彼女の戦いは続く。

ハルナ、抱かれる

「あつ、あつ、あつ、あ♡」

漫画研究部の部屋。

ハルナは親友の宮崎のどかがバックで犯されている様子をスケッチブックにバリバリ描いていた。

横には白濁液を割れ目から溢れさせ、顔にもぶっかけられてぐったりしている夕映がいる。

「アナせんえー。も、もうイキます。イツちやいます。熱いのでお腹の奥コンコンされて、イツちやいますー♡」

「いいよのどか。そおいー！」
「どちゅん！」

「~~~~~！」

膣を一気にこすりあげられ、声にならない悲鳴を上げるのどか。

ぷしゅ、ぷしゅつと潮を吹きながら、のどかはビクビクと痙攣する。

絶頂の波がなかなか収まらないのか、こてんと床に寝転びながらピクピクと震え続ける。

ぬぼん……。

アナの巨根が抜かれると、割れ目から白濁液がどろりと溢れた。

「うわあ……えつろ」

カリカリカリカリ。

ペンを走らせるハルナ。

ぺたぺた……ぺた……。

「……」

アナはハルナの真横に立った。

ハルナはとても集中しているらしく、エロエロになった親友2人を模写することに忙しい。

アナは腰を突き出して柔らかい頬に亀頭を押し付ける。

「あれ、意外」

ハルナは先走りを塗りつけられても動じなかった。

興奮し、紅潮してはいるが、それはエロい少女2人に集中している

せいのようなだ。

「えい」

ぐぼ。

ハルナの口にモノを突っ込む。

「うそお？」

しかし、ハルナはこれにも動じなかった。

ぐぼぐぼと何度か腰を動かすも不発。

アナは反応がないのでつまらなかった。

これならまだ痙攣を続けているのどかをさらに快樂地獄の底へ、底すらブチ抜いた果てへと導いてやるほうが良さそうだ。

いや、それとも。

気絶している夕映が目覚めるまで体に快感を与え続け、起きた時にどうなるかを見るのも良いかもしれない。

ハルナの胸を揉みながら、アナはやりもしない激しいプレイを考えて気を紛らわす。

「ハルナー。そろそろエッチしよー」

カリカリカリカリ……。

「うん、いいよー。ほんと？ わーい！ えへへー」

アナは勝手に承諾を取ると、ハルナの腰を浮かしてパンティを脱がした。

割れ目とパンティを愛液が繋ぐ。

「おお、濡れてるじゃん。それじゃ、いただきまーす」

じゅぶん！

「ひゃんっ……ええ？ アナちゃん、今何したの？」

「ナニも……それより続きいいの？」

「あ、そうだったわ。こんなチャンス滅多にないわよー！」

スケッチブックに戻るハルナ。

その集中力に感嘆しつつ、アナはゆっくり腰を振り始めた。

じゅぶじゅぶ、じゅぶじゅぶ。

「んっ、んっ、ふ、ふっ……」

動きたびに、ハルナからかすかに喘ぎ声のような吐息が漏れる。

アナは俄然楽しくなり、動きを強くしていった。

「んっ、あつ、あつ、あつ……」

きゆうう、と膣が締め付けてきた。

アナは円を描くように腰を回して膣内をかきまぜる。

最後に子宮口を突き上げて、亀頭を子宮にくつつけながら射精をした。

びゆる！　びゆる！　びゆるるるる！

「はああ……気持ち良かったよハルナ。処女ごちそうさま……って、ええええ？」

胸を揉みながらハルナの顔を覗いたアナは、未だにカリカリしてることに驚いた。

負けた。

ナニに負けたかは定かではないが、アナは心を打たれた。

ハルナの情熱をサポートしよう。

アナはハルナから離れ、未だにピクピクしているのどかに覆いかぶさっていった。

「ああ、ダメ、ダメですせんせー♡」

夕映で学習したアナによる、気絶ストレスをいく快樂の嵐にのどかは曝されることとなった。

アキラさん、口奉仕に目覚め始める

アキラはアナに短パンタイプの水着をプレゼントした。

「おー！ これなら隠せるよ！」

ナニが。

「ふふ。喜んでもらえて良かった」

「さつそく着ていい？」

「うん。更衣室はこっちね」

更衣室には誰もいなかったが、念のためシャワールームで着替える。

アキラの生着替えを見たかったので、一緒に着替えようと誘うのも忘れない。

アキラは二つ返事でこれを了承。

アナが甘えているのだと判断した。

本当はエロいだけなのだが……。

「これは……困ったね」

「あー、まあこうなるよね」

アキラの裸を凝視した結果、見事に勃起している。

水鉄砲では濟まないレベルだ。

「……」

おもむろにジツパーを下ろす。

ピン！ と中から元気よく飛び出す。

チラツ、チラツ。

わざとらしく目線を送ると、アキラはあとため息をついた。

「もう……いい、1回だけだよアナちゃん」

「わあい！ アキラ大好き！」

「調子良いんだから」

アキラはしゃがむ。

アナの股間に顔を近づけていき、あーんと口を開けた。

「はむ……れる……れるろろ……ちゅっちゅ……」

竿の根元から舐め上げ、竿を手で優しくしごく。

また亀頭を口に含み、唾液を溜めながら舌を這い回らせる。

「じゅぽじゅぽ、じゅるる、どうアナちゃん。イキそう？」

「んー、もすこしかかりそう」

「そっか。あむ、れろれろ、じゅるる」

再び口奉仕に戻る。

これがエヴァなら「ふん、貴様なぞこれで十分だ」と言っただけでペシツと竿を引っぱたいて終わりだろう。

実際それで射精するアナもアナだが。

エヴァに叩かれた時を思い出し、射精が近くなった。

「アキラ、そろそろ出ちやいそう」

「ぶは……顔は恥ずかしいから、飲むね」

精液が残っていると、匂いやら見た目やらかなり不味いことになる。

アキラは亀頭を啜える。

竿を両手でしごき、ラストスパートに入った。

(胸に出すのも捨てがたい……ダメか。部活が休みの時にでも頼んでみようかな)

さわさわ……。

不埒なことを考えていると、割れ目を撫でられた。

皆アナにもツルツルのアソコが付いていることを失念して巨根ばかり愛撫するが、アキラはその愛撫も忘れない。

あまり味わうことのない快感に我慢ができなくなった。

びゅる！　びゅるるるる！

「んぶ?! ……んく、んく、んく……ぶはあ」

びゅるっ。

「ぎゃ」

アキラの鼻筋にピチャリと白濁液がかかった。

指で掬い、ぺろっと舐める。

アキラの口の中に爽やかな味が広がった。

「良い匂い。これならかけてもらっても大丈夫だったかな」

「やー。分かる人もい……ごにょごにょ」

「そう？ それにしても、まだおつきいままだね」
「……」

そつとアキラの股間に手を当てる。
手を重ねられ、やんわりと外された。

「もう1回数舐めてあげるね」

「んー……うん！」

舌がペとりと竿に張り付く、包み込むようなフェラチオが始まる。
イツたばかりなのであまり刺激を与えると辛いだろうというアキラの配慮だ。

ゆるやかな快感に腰が痺れるのを感じながら、アナはアキラの口奉仕に身をゆだねる。

「……♡」

ちゅぷちゅぷ、じゅぷじゅぷ、じゆるる、ちゅっちゅ……。

優しい表情の中に奉仕することに喜びが混じる。

口でアナの白濁液を受け止める度に、アキラはお腹の奥がじんわりと熱くなるのを感じていた。

スライム娘 半オナホ状態

放課後になると雨が降り始めた。

傘を忘れたアナは小走りに女子寮に駆け込む。

「あーちべたかった」

「おや、アナ先生。濡れてしまったですか」

「夕映、それにのどか」

2人はお風呂道具を持っていた。

キュピーンとアナの第六感が閃く。

「待ってて！ 私もすぐイクから！ あ、体冷えそうなら先行ってて
！」

バタバタと走っていくアナ。

2人は顔を見合わせてくすりと笑った。

「アナ先生は欲望に忠実ですね、のどか」

「だね。アナせんせいらしいけど」

2人は一足先に大浴場へ向かった。

古菲や刹那、明日菜やこのか達がいた。

(この面子ならまだマシですね)

胸をペタペタ触る夕映。

体を流して湯船につかる。

「ケケ、恨みはないが捕まえさせてもらおうぜ」

「まあ、悪役ですし」

「なっ?!」

全員が水に取り込まれてどこかへ連れ去られてしまう。

「戒めの矢ああ！」

「不覚……」

「ぷりん?!」

「アトハマカセター」

アナの放った戒めの矢が風呂場全体に突き刺さる。

運悪く最後に転移しようとしていたプリンが行動不能にさせられた。

プリンはぷかりと浮かび上がる。

「みんなをどこへやったの?!」

「秘密……」

「ほーう」

「ん……ヤな予感」

ガシ。

プリンのお腹を両手で掴む。

脚を開かせ、巨根をつるつるの割れ目に添えた。

「これは想定外」

「今なら1回出すだけで許してあげるよ?」

「犯されるのは決定?」

「うん」

「終わった……」

抵抗を諦めてぐったりと身を投げ出すプリン。

アナは〃感じる場所〃を意識する。

頭の中にプリンの弱点が流れ込んできた。

じゅぷう。

「んひゃー!」

びくりと仰け反るプリン。

挿入された部分がぽっこり膨らみ、スライムなのでお腹の奥まで

入っているのが良く見える。

「お覚悟!」

ずっちゅずっちゅ! じゅぶじゅぶじゅぶ!

「んひゃあ♡ んあん♡ あ♡ が♡ うあああ♡」

じゅぶじゅぶ! じゅぶじゅぶ!

「んぐ♡ や、やめ♡ おかしくなる♡ ♡おかしくなるうう♡」

目にハートマークを浮かべ、よがりまくるプリン。

「さあ、みんなの居場所を吐いてよ。もうちよつと吐かなくてもいい

けど」

「やあ♡ ごりゅって♡ そこらめええ♡」

「射精る!」

びゆる！　びゆるるるる！

プリンの中に白濁液が注がれる。

ぽっこりお腹になってしまい、結合部から入りきらなかった白濁液がドロドロとあふれ出る。

お風呂場から水柱が立ち上がり、もう1匹のスライムが飛び出してきた。

「プリンー！」

「戒めの矢」

「んばばば」

哀れ、2匹目のスライムも同じ末路を辿ることになるのだった。

「ううむ。2人の戻りが遅い。よもや捕まったか？」

ヘルマンは水牢に人質を入れ終えても帰ってこない使い魔に眉を寄せる。

「ヘルマンの旦那。見てこようか？」

「すらむいか。魔法使い達がいるかもしれない。偵察だけして戻ってくるんだ」

「おうよー！」

水の螺旋を描いてその場から消えるすらむい。

「んぶ……もう、らめ♡」

「お♡　お♡　お♡　お♡」

すらむいが大浴場で見たのは、お腹パンパンに白い物を詰め込まれたプリン。

太い棒でバックからゴスゴス突かれているあめ子だった。

（なんだこれ?!　あの子どもがこれをやったのかよ！　一旦退却して旦那にほうこ）

「戒めええー！」

「ぎゃんー！」

何十本という矢が面となり降り注いだ。

すらむいは避ける間もなく食らってしまう。

ぷかーと浮かぶすらむい。

ずるずる……(ぎ)ぽっ。

「あふ♡」

べちやり、と水面に落ちるあめ子。

股からどくどくと白濁液を垂れ流しながら恍惚とした表情を浮かべている。

ぷかぷかと浮かびながらその様子を見るしかないすらむいは、ゆっくりと近づいてくるアナに恐怖を感じた。

「大丈夫。気持ちよくしてあげるからね♪」

ズン！

「にゃー♡」

水牢からの帰還、からの乱交

「そんなものかね、ネギくん」

ヘルマン相手にネギは魔法を封じられ、苦戦していた。

早々に気絶させられた小太郎は高畑が看病している。

(うん。役得だね)

苦痛に耐えるネギを視姦。

手は小太郎の尻を撫で回す。

この時間、もつと続いて欲しい。

(ネギくん。頑張るんだ)

邪まな気持ちで応援していると、空から少女が降ってきた。

「斬〜岩〜剣〜」

「ぬ!」

悪魔パンチで応戦するヘルマン。

斬撃を叩き落すことに成功したが、何故か背後の水牢がすべて弾けとんだ。

「皆さん、逃げますえ」

札を手に茂みから現れる千草。

古菲、夕映、明日菜らは気絶している者を抱えて千草の方へ走る。

「ぬう、やる! 仕方ない。プランAといこう」

「がっ」

ヘルマンの本気の悪魔パンチがネギに突き刺さった。

吹き飛びながら気を失うネギを、瞬動で高畑がカバーに入る。

ネギを触りまくる高畑をヘルマンは感心した目で見た。

「どうやら君も“たしなむ”ようだ」

「おや、あなたもかい? 残念だ。せつかく気の合う者に出会えたのに」

「ああ。依頼主から彼の戦力を把握したら君の抹殺を第一にせよと言われている」

「フェイト。いや、フェイトくんは来ていないのかな」

「それを言うとも?」

「ふっ」

「ふふっ」

パァン！

2人の中で空気が破裂した。

(ん……)

刹那が目を覚ます。

自身は裸で愛刀もない。

辺りを見回す彼女の目に飛び込んできたのは、触手に絡みつかれて喘いでいるクラスメート達だった。

「あん♡ や♡ 胸はダメえええ♡」

膣をぐちゅぐちゅかき混ぜられ、おっぱいを揉みしだかれている朝倉。

「あ……♡ は……♡ ……もる、です……♡」

じゅぶじゅぶと膣、尿道を攻められている夕映。

「んぐ、じゅぶ、ぷはあ……あっ♡ あっ♡ あっ♡」

上と下の口を交互に犯されているのどか。

「んぶ、じゅず、かほかほ、じゅる……♡」

ベッドの上で、明日菜がアナにパイズリ奉仕をしている。

「明日菜さん？ それにアナ先生？」

「あ、おはよう刹那。このか、刹那が起きたよ」

「ほんま？ あく、ほんまや。おはよう、せつちゃん♪」

「お、お嬢様！」

割れ目から白濁液を滴らせたこのかが近づいてくる。

刹那の前で四つん這いになり、にこつと微笑んだ。

「せつちゃん、うち、犯されてもうた」

「……え？」

アナに。

いや、まさかあのヘルマンとかいう悪魔に？

そう考えただけで全身からさーつと血の気が引く。

「ふっふっふ。挿入しちゃうぞー。刹那、君は見ているしかデキナイ

ノダー」

「やん♡」

じゅっぶ、じゅっぶ、じゅっぶ、じゅっぶ。

このかが前後に揺れる度に卑猥な水音が響いてくる。

なんだ、やっぱりアナか。

刹那はほっと胸を撫で下ろす。

「ノリが悪いなー。ここは『やめろ、代わりに私が！』って言うところだよ」

「あ、いえ。呆れてしまいました」

「むー。しょうがない、このかは舐めてあげて」

「了解や」

このかは刹那の脚を開き、顔を埋める。

ピチャピチャと割れ目を舐め始めた。

「そ、そこはダメこのちや、あんっ」

「ちよつとー私も混ぜなさいよー」

明日菜がアナに抱きつく。

彼女の割れ目を弄ってやると、嬉しそうに喘ぎだした。

「あん♡　そこ、クリクリ気持ちいい♡」

「今日ががんばっちゃうぞー」

パンパンパンパン。

このかのお尻に腰を激しく叩きつける。

今日は無礼講だ。

酒池肉林だ。

アホなことを考えながら、アナは少女達に何度も何度も精を放つのがあった。

結末 超鈴音

「私の、計画が……」

雨の中、超鈴音は傘もささずに歩いていた。

魔力消費量は何故か3倍に増えた。

計算の結果、今年の大発光は起こらない。

彼女の計画に必要な魔力は20年以上待たないとならなくなった。

「鈴音？」

振り返るとアナが立っていた。

ナニか良いことがあったのか、肌がツヤツヤしている。

「傘くらいさしなよ。ほらほら、入って入って」

「すまないネ」

超鈴音のほうが背が高いので傘を持つ。

2人はしばらく無言で歩いた。

「……副担として力になれない？」

「難しいと思うヨ」

「私じゃ力不足かー」

「いや、どの先生にもムリだと思うネ」

「そっか……」

「うむ……」

会話が途切れる。

雨音の音がやけに大きい。

しばらくするとアナが立ち止まった。

「ちよっと休まない？ 歩き疲れちゃった」

「私の目に狂いがなければ、ラブホテルに見えるんだガ」

「女同士だからいいじゃない」

（変な先生だヨ、ほんと）

英雄ネギの双子の妹、アナ。

兄の輝かしい実績とは比べようもない程普通の少女。

兄と共に歩みながら、何故か兄が遭遇した難事を無自覚にのらりくらりとかわし続け、後に“ラッキーガール”、“台風の目”などと呼

ばれるようになる。

兄に負けず劣らず人望もあり、特に目立った戦闘もないがかなりの実力者たちと懇意にしていた。

だが、何故か仮契約はエヴァとしかしていない。

闇の福音と仮契約しているだけでも大したものなのだが。

「はいタオル。お風呂は向こうだよ」

「なんだかやけに手馴れてるネ」

百合の人だったか？

超鈴音は頭を振ってバカな考えを忘れる。

「何か悩みがあるみたいだけど、気持ち良くなれば忘れるよ♪」

「やはり百合の住人だったか……って……それ……」

ピンと反り立ったモノ。

下には割れ目があるので、いわゆるふたなりというやつか。

(こ、こういうことだったのか)

歴史に隠れた真実。

これは言い伝えにもないなと超鈴音は納得する。

その後、アナにたつぷり気持ちよくさせられた超鈴音はアナの「んじゃ、月とか他の星から魔力もつてくれば」という冗談からヒントを得て、火星に直接魔力を集める方法を模索し始める。

この方法の後押しにネギもかなり貢献。

魔法世界の寿命は十数年後に解決する。

「鈴音〜♪」

じゅぷつ。

「ふあ♡ まだやるの力？」

「だって鈴音の膺きもちいいんだもん〜」

「あ♡ や♡ 分かった、分かったネ。だからそんなに腰を振らないで欲しいヨ♡」

「わあい」

未来は明るく、彼女の願いも叶う。

アナにおっぱいを吸われながら、軽い絶頂を続けている超鈴音がそのことを知るのは、もう少し後の話。